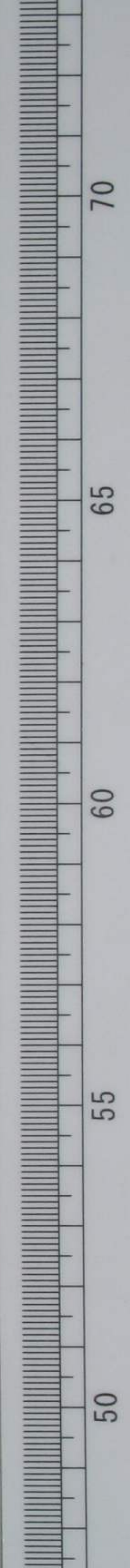




戀愛詩評釋 全

本問文庫
文庫 14
D 87



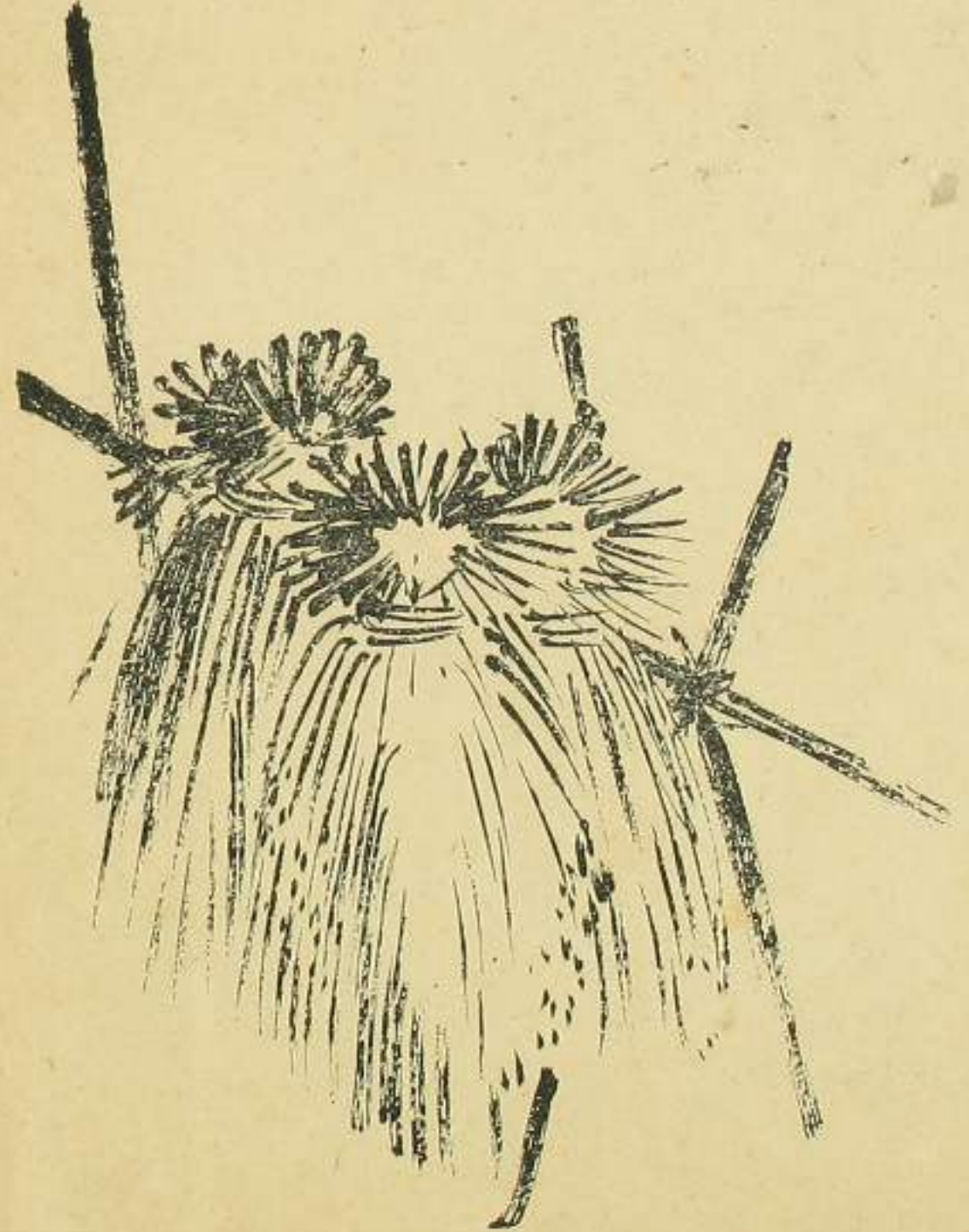
戀
愛
詩
評

全

服
部
躬
治
著

君がため
すてむ命を
朝ゆふに
かくいたはるも
たと君がため

文庫14
D87



文庫14
D87

繪事は、素より後なり。詩は、邪にして成るべからず。詩味は情味なり。情味を嘗めずば、詩味に觸れじ。人の情は、神の情なり。神の情は、人在りて有り。人を透して、詩と成る。詩は、邪にして成るべからず。

詩には、叙事あり、抒情あり。いづれ、神意に副はぬはなく、ともに、自然の資たらむ。自然は大なり。まづ、精し。要求は自由に、活動は自在に、超くまゝ。測り知られぬ。その要求に應へ、その活動に隨ひて、はじめ、詩は成り、詩はたらく。叙事と抒情と、そは、たゞ、境々にのぞみて、較るる名目のみ。

美は美なり。善にあらす。善以上に超然たるべく、また、善に冒さるべからじ。情は聖し。その生活は自由なり。こゝに於て、人は生き、こゝを以て、詩に命あり。命ある詩は、こゝもなほさす。生きたる人の、生きたる情の外延なり。自然の懷に温められて、やがて結ひて、結ひて解けざる、情の塊なり。砕けども砕けず、灼けどもやけず、永く久しく、その存在を失はざらむ。

まづ、人ありて、まづ、詩を成すや、必ず、まづ、情を抒べむとせむ。情は廣し。必ず、まづ、愛を歌はむ。愛に類あり。必ず、まづ、戀に創めむ。兩性間の戀に創めて、而る後、父干に及び、兄弟に及び、社會に及びむ。兩性間の戀愛は、聖の、最も聖なるもの。その人の生くる、その詩の生くる、はたまた、固より、その數なり。生きたるその詩、味ひ見むば、いかにいかに、樂しからずや。ために、この書を作りぬ。

さばれ、わが詩は、わが詩たるべし。いづこまでも、わが詩たるべし。詩の存在は、自己に伴ふ。詩は、自己を離れず。離るべきは、詩にあらざるなり。抒情詩、殊に然り。戀愛詩、殊に殊に然り。他人の詩を讀む、そは、自己の發展に、力を加へむがためのみ。自己の發展をさしおきて、他人の詩情に倚るべからず。たゞ、それ、始に反らむとよき。夫は無垢なり。情は聖し。

明治三十三年八月十五日波和ぎたる夕

富士見ゆる安房の海濱にありて
服部 躬 治

凡 例

- 一、この書輯むるところの詩、その數六十二紀元一千年代より、紀元二千二百年代に跨る。遡りては記紀萬葉より採り、降りては淨瑠璃本より抽く。體形はた、一あるを期せず。長歌、短歌、旋頭歌、今様及び、俗謠など、つとめて、その多きを庶幾せり。
- 一、作者は、上、皇族より、下、無名の下司に及びり。いはゆる歌仙の作、必ずしも採らず。失名氏の作、また、必ずしも棄てず。むしろ、比較的、作者不知のもの多し。これ、蓋し、歌を見て、歌を取捨したればあり。
- 一、字句の解釋は、その樞要あるものに限れり。去か、も、かは、詳を期して、苟もせず。評は、まづ、内容よりし、次に形式に及びり。内容と形式との一致、これ、最も力を盡して、説かむことを企てたり。措辭につきて、格調につきて、一首、十日を費したるもの尠からず。
- 一、その大部分は、おほかた、自身の鑑識に訴へたれど、まづ、古來、その解を二三にするものある時は、異説を擧げて、これを辨疏せり。
- 一、時に作者の總評を試みたり。言はむと欲すれば、いさゝかも假借せず、皇族を除

庫14
187

- 一、又時に、修辭上の議を挿みたり、零碎の論もどより、盡しがたしといへども、望むところのあさにしもあらず、讀者の作詩に資せられむまではいさ。
- 一、題詠のものは、皆題を去りたり、題に因りて、その歌の價値を、上下すべきにあらねばなり、實感によりて成れる、特に、その境遇をいふの必要ある等は、いづれも、詞書、もしくは、本書前後の文を引けり。
- 一、作者の傳は、一々に注せず、目的は、詩そのもの、上に存せればなり、徒に、紙數を費さむば、た、好ましからねば。
- 一、この書稿を改むること、實に三回、第一稿は、安房國天津町に於てし、第二稿は、東京駒込の寓居に於てし、第三稿は、また、安房國高崎村に於てせり、この稿を、意に慊らず、更に、一再の削訂を施して、こゝに至りぬ、おほ、未だ、詩情を剖拆し得ざらむを、憂ふることに止ます。



戀愛詩評釋



服部躬治 著

八田若郎女

八田の一本菅は一人をりごも大君よしごきごきはひごり居りごも。

古事記仁徳卷に載りたるにて、いはゆる旋頭歌の體あり、天皇皇后磐之媛の御妬みによりて、この郎女を召し見給ふこと、御心のまゝ、あらず、よろづ、びんちがらせ給ひて、

八田の一本菅は子持たず立ちか枯れおむ、あたら菅原言をこそ菅原といはめ、あたら清し女。

と御歌よみて、賜はせければ、郎女、かしくみて、御返し仕りたる、即ち、この歌なり。
◎八田の一本菅。大御歌をうけて、一人住みある自らの身に譬へたるあり、八田

は、和名抄に、大和國添上郡八田郷とある、その所あるべく、郎女は、其所に寡居して
おはしつるからむか。◎一人居りとも。一人棲めりとも、更に、悲しくも、わびしく
も思ひ申さじとあり。もの下に、含めたる意あり。かく、三句に言ひたる語を、六句
にて、再び反覆するは、旋頭歌の本體からむと思はる。萬葉集卷七ある

山背の久世の社の草、なたをりそ。まが時とたちさかゆらむ草、か手折りそ。
霞ふり遠つあふみのあど河柳、枯れくともまたも生ふてふあど河や、あぎ。
もしくは、日本紀雄略卷ある

あたらしき猪名部の匠、かけし墨繩、しがあけば誰からけむよあたらし墨繩。
あど、の如き、皆同例ありとす。されど、後には、必ずしも、この例に随はず。古今集うち
わたす遠方人に物をすわれ。そのそこに白くさけるは何の花ぞもの如き措辞
あるに至れり。短歌に於ては、二句と五句とにかゝる反覆の辭様を見ること多し。

◎よしとささば。よしは、可しかり、好しの意にはあらず。ささばは、なほ詔は
いと言はむが如し。もとは、令聞の意ありけらし。萬葉集に「懇に君がさこして」いさ
とをさこせわが名のらすを「あ寝そと母さこせどもあど數多見えたる、皆詔ふの
意かりと知るべし。

あたらずがし女ど、のたまひおこせたるかたじけなさよ。いふせき宿に、寡居せる
身のあぢきなさば、さることながら、わが頼みに頼みまつれる大君だに、たゞ一言
可しと詔はせむには、このまゝ、子持たすに老い果つとも、何しに、御恨みまゐらす
べき。他し人の百萬言より、君が情の一言こそうれしかるべけれど、あゝ、たゞ一言
の情によりて、覺性的快樂の凡てを、犠牲に、供せむとす。これ、豈、至極せる貞操のこ
ゑに、あらずや。献身的熱誠、詞句の間に、披瀝して、殆ど、自他の差別あらず。淳素ある
上古婦人の性情、げにかくの如くありしからむ。まかも、瀆勢理毘賣、命の
八千矛の神の命や、わが大國主、汝こそは男にいませば、うち見る島の岬々、かき
見る磯のささおちす若草の妻も、たせらめ、われはもよ女にし、あれば、汝をおさ
て、夫はあし、汝をおきて、夫はあし。古事記

と、暗に、怨言を洩し給へるには、ことかはりて、いよ、この歌の高潔なるをおぼ
ゆるかな。蓋し、思ふに、郎女は、もの和かに、情こまやけき、手弱女をりけむかし。形式
的、道德のいまだ、全く、泌入せざりし時代にして、なほ、この貞操あり。貞操は、美中の
最も、美あるもの善からむよりは、むしろ、美あるものあり。美を要求するは、人間、天
賦の本能、本能によりて、貞操をもとむ。何ぞ、他の制裁を待つを、要せむや。一たび、貞

操をもどめえて、それにをらは、意おのづから、晏如たらしむ。宗教の力といへども、決して間隙を見いだし得じ。

この歌三句と六句とに、同語を反復したる、すでに力あるを、居りともと言ひさしたるのみにて、何等の説明語をも點出せざるは、殊に一段の沈摯を認む。沈摯かくの如きが故に、ぞよく憂悲の外に儼在せる、貞操婦人の言動に一致するを得たりし。かる。本居宣長の三句の一人居りともをよしにつけて、御子はかくともよしやの意と解したるは、いまだし反復の辭様いかなればか見とめざりけむ。四句の大君しに於けるしの一音は、たしかに一首に徹底して、殆どだにの意を保てり。たゞこの助辭のあるが故に、他人はいかにとも言は言へ、君だに可しとのたませむには、更に憾みあかるべしとの熱情を發抒し得たり。これも亦宣長の如く斯は助辭ありとのみ看過したらむは口惜しかるべし。拾遺集戀一ある
あはれども君だにいは戀ひわびて死を命ををしからなくに。
は、恰もこの歌を和げたらむもの、如くあれど、しかも、きは輕佻なる調子たるを免れず。矯健は、たゞこの歌の獨擅か。

し。忽ち一折して、一人居りとも。かる直截的の句法に入る。全く、日本紀卷三あるみつゝし久米の子が粟生にはかみら一もどそねがもどそねめつなぎて討ちてしやまむ。

ど思想の按排を、相均くせるものといふべきあり。かゝる轉義は、夙く、上世に發達せり。日本紀古事記の歌謠中、この例を見ること尠からず。直諭は、即ち、記上卷ある赤玉は緒さへ光れど白玉の君がよそひしたふとくありけり。

の如き、諷諭は、天智紀の
橘はおのが枝々かれ、ども玉に貫く時同し緒にぬく。
の如き、即ち、これあり。その圓熟の域に達せるは、もとより、年序を歴たる後あり。いたづらに、穉氣を脱せぬ故を以て、上世の歌を批判すべきものならむや。

隼別皇子

はしたての倉梯山をさかしみ。岩かきのねてわが手ごらすも。
これも古事記仁德卷に載りたり。隼別皇子は、仁德天皇の弟あり。記の文によれば、この皇子はやくよりよこしまある心をたくはへど、かく無禮なる御所行のおは

しければ、遂に、天皇の逆鱗に觸れて、命失はるべくなりにけるを、いかにして知り給ひけむ、その妻女鳥王の御手をとりて、都をさまよひ出で、宇陀之蘇邇に抵りませるに、軍兵の追ひ及くところとあり、御夫婦、刃の露と消えさせ給ひぬ。この歌は、その倉梯山にさしかゝれる時のありまこと、この皇子に、異心ありけむや否やは、未だ、にはかに知るべくもあらじ、又、こゝに、判ち言はむの要を認めず、されど、おもふに、皇子は、おはれ、かる、境遇に、處り給ひけむか、肥前風土記杵島山歌垣の條に、

霞ふる杵島がたけをさかしみと草とりかねて妹が手をとる。

といふ歌を載せたる、この歌の訛傳あることしるく、當時の人の語りつぎ言ひつぎて、同情をよせけむほどもれしは、からるゝよ。

◎はしたての倉梯山。はしたてのは枕詞倉梯山は、大和國十市郡にあり、都より伊勢に越えむ途にあたり。◎さかしみと。峻くあるによりての意あり。みは、富士谷成章のサニと釋したる、よく慍へり。どの用ゐざむ、更に、後世にあることなし。軽く心得べきあり。◎岩かさかねて。岩を掻き難ねてあり。かくは、頭をかく、落葉をかく、砂をかきからず、髪をかきむしるさどの、かくに均し。かねは、爲し能はぬ意の動詞にして、思ひかね妹がりゆけば、冬の夜の河風寒み千鳥をくありのかねも、

七

「夜やくらき道やまをへる杜鵑わが宿をしも過ぎがてに鳴く」のがても、ともに、このと同一意義の詞ありとす。◎わが手とらすも。わが妻のわが手を執れるよとあり。とらすのすは助動詞。これの加はれるがため、同じ意ながら、婉深の味あり。れはかたは、敬意を表する場合に用ゐるかれども、上古は、うちまかせても、かく言へりき。もは感嘆詞。天の原雲をさよひにぬば玉の夜わたる月のかくらくをしも」

「天雲にちかく光りて鳴る神の見ればかしこし見れば悲しも、さどのもに均く、上世に、最もおほく用ゐられたる助辭なりとす。くるしくも降りくる雨か」のもも亦、これと同姓にして、かものもは、勿論しかなり。

都をいで、やうく、こゝまでは逃れ來しものを、何ぞ、この倉梯山の峻く峻きや、羅綾にも堪へざるわが妻の、いかで、心安く越えらるべき。岩が根を攀ぢむとして、將に倒れむとせり。倒れむとして、危くも、わが手を執れるよ。いざわが妻、そのまゝに、わが肩に倚れ。さてもぞ、心安く、この山を越えむと。妻は、夫を力にし、夫は、妻を助りつゝ、おづみゆくらむ状況、さながら、目前なるこゝちせずや。醜籍の中、おのづから、悲婉の調あり。とらすの一語、何ぞ、情の濃かある。上下相親み、男女相睦ぶは、古の風、かり、禮を飾らず、愛を賣らざるも、亦古の風なり。たゞに、古どの、みは、言はじ、情的

生活の自由からむほどのものは後世といへども、
且、這般の眞率を流露し得む。夫婦有別あどいふらむ道徳の埒外に超然たるを得ざるものこそ、情を矯めて人前をつくるひはては、兩性の間に嚴格ある階段を設くるかれ。
四句、岩かきかねてといへる直ちに、這ふの体たらくを聯想せしめむ。かきの一語動すべからず、これなくば、いかにして巖山のこゝしき景致を浮動し得む。たとひ攀づの意あればとて、決して攀づとは言ふべからず。もしそれ、五句の七音にいたりては、情切に韻ながく、瑤瑤のひびき、或は、かゝるものかとも疑はれむ。詩を以て、辞藻を揆するに止ると、あすものもとより、この歌の神情を會し、能はじ、綺麗は、元來珍とするに足らぬものをや。

はしたてのさかしき山も吾妹子と二人越ゆればやすむしろかも。

これも前のごとく、時詠み給へるにて、日本紀仁徳卷に載りたる歌あり。古事記には、

はしたての倉梯山はさかしけと妹とのばればさかしくもあらず。

とあり。紀の方はるかに優りざまあり。されど、皇子の眞の御聲はその何れかりけむ。今にはかにさだむべからじ。

◎吾妹子。わぎもことよむわがもこの約りたるあり。妹は、年わかき女子を親みて呼ぶ通語にして、夫婦朋友兄弟姉妹、いづれの間にも用ゐらるゝ、からひなり。されど、長上に向ひては、決してこれを用ゐるを許されず。大伴田村大嬢の、妹坂上大嬢におくれる歌に、「よそに居てこふれば苦し吾妹子をつぎて相見むことはかりせよ。」萬葉とある。あごによりて、必ずしも男女の間にのみ用ゐらるゝ、からぬを知る。但し、こゝあるは、夫より妻を指して呼べるあること、言ふまでもあらず。妹に對して、男子を呼ぶべき汎稱を兄といふ。こゝも亦、夫婦朋友兄弟、その何れの間にも通じ用ゐらる。子は、男をも女をも親みいつくしみて、呼びあす語あり。神武天皇の「みつゝし久米の子がどのたまひたる、萬葉集に「わが待つ子らはたゞ一人のみ」と見えたる。かど、皆この例あり。子の語源は、小と均かるべく、小きものは、何ぞともかく憎げなく愛らしきよりこそ、かくは言ひけめ。◎やすむしろかも。安席哉あり。安らかなること、恰も、席上に在るが如しとの意を、簡約に言ひたるあり。巖石けはしき、あら山中をゆくこゝち、若し、われ一人をらむには、いかゞあるべき。

今はわが妻とつれだちたれば道の難阻もものゝかずあらず。恰も庭の上に座せらむが如く泰らかなる哉との一首の情意、豈、歛すべからずや。世界は二人の爲にの、大、信、念、の、歌、に、抱、か、れ、た、り、ま、か、も、こ、れ、感、情、の、盈、る、と、こ、ろ、い、か、あ、る、人、の、胸、中、に、か、こ、の、自、然、を、有、せ、ざ、ら、む、夫、婦、は、一、を、意、味、す、い、づ、こ、ま、で、も、そ、の、位、と、形、と、を、動、す、ま、じ、き、も、の、た、り、そ、の、位、に、安、ん、じ、そ、の、形、に、安、ん、ず、夫、婦、そ、れ、以、外、別、に、力、の、存、在、を、認、め、得、む、や、す、で、に、認、め、ず、他、に、倚、頼、せ、ざ、ら、む、は、必、然、の、勢、あ、り、二、人、越、ゆ、る、が、故、に、心、安、し、山、の、嶮、峻、あ、る、途、に、こ、れ、を、い、か、に、し、得、べ、き、を、安、心、立、命、の、地、歩、由、來、遠、き、に、あ、ら、ず、相、戀、相、愛、容、易、に、こ、い、に、抵、ら、し、め、む、宇、宙、間、の、萬、事、萬、物、も、と、こ、の、我、の、た、め、に、成、れ、る、あ、ら、ず、や、や、す、む、し、ろ、か、も、の、一、句、七、音、よ、く、こ、の、熱、誠、を、煥、發、せ、り、か、た、く、思、ひ、ど、り、た、る、意、氣、料、峭、と、し、て、面、を、向、く、べ、か、ら、ず、簡、勁、の、要、こ、い、に、於、て、か、お、こ、り、造、語、の、功、こ、い、に、於、て、か、あ、ら、は、る、。

造語は上古歌人の最も好くしたる修辭の一あり。この歌のこの五句はた然りと
なす。安席ある名詞に接する直ちに哉の感嘆辭を以てして當に措かるべきある
の語尾を排し去りたるむしる驚くに堪ふる大膽あらずや。この歌以後この般勁
拔の句法絶えてあらず。今の歌人たらむもの跡を古に徴して更に自ら古を成す

底の用意あるべし。萬葉集ある夕波千鳥ことよせ妻「遠妻」こもり妻「朝戸出」佐保
風「道の長手」草深百合「磐床」千名の五百名「風まもり」豊はた雲「夕さらす」夜こも
り「秋さり衣」みこもり草「いや年のはに」朝菜洗「兒」などいづれか造語の妙致の
あらぬ橘守部の短歌撰格に曰ふ。

夕べの海のさびしき波の上に鳴く千鳥を夕波千鳥といへるたぐひ短く約り
て言せまらずかゝまらずをれすくだけずして高くも雄々しくも優にもあは
れにも聞えたるかの文字して言を填む漢土の語といへどもかうつゝまやか
に、よく言ひあへむや。後世のかけても及ぶべきところあらず。
と、及ばざるにあらず。爲さざるあり。古今集以後の歌人輩はたゞ古人の跡を辿れ
るのみ常に斧鑿を事としつゝも、遂に古人の上に出でず。擅あるもあしくみだり
なるも亦悪しけれど、小心に過ぐるは決して詩に忠あるものといふべからじ。

わがせこが來べき宵ありさゝがにの蜘蛛のおこあひこよひしるし
も。

衣通姫

日本紀允恭卷に見えたり。天皇ある時、この姫のおはすかる藤原の宮に御幸し給ひて、ものかけより御覽せさせしに、姫うちわびたる御けしきして、この歌を、しひやかに、うちあげ給へりきとあむ。姫のまことの御名は、弟姫と申す。

◎わがせこ。さきにも言ひつる如く、男子を親み呼ぶ通語なり。こは、吾夫の意にて、天皇をさし奉れるなり。◎さゝがにの。蜘蛛の枕詞なり。又、うちまかせて、直ちに、蜘蛛の意にも用ゐる。さゝは、いさゝ川、さゝ波、さゝやか、さゝのさゝに均しく、微細の義。かには、蟹あり。蜘蛛の形の蟹に似通ひたるよりおはせたる名なるべし。荒木田久老は、この句を、佐瑳、餓泥、能と訓みて、小竹之根之の義とし、組といふ言にかゝる發語なりと言ひ定めたり。珍しき解釋をがら、かは、普通のまゝあるが穩かからむかとして。◎蜘蛛のれこなひこよひしるしも。蜘蛛の行ひによりて、夫君の來りますべきがしるしとなりしは、分明の意の形容詞。いちじるくのしるくに均し。

今宵は、わが待ちし夫君の來ますべきなりげに、來ますべき今宵ありけり。蜘蛛の舉動に、いちじるしく、その兆のあらはれたるよど。外枯れて、内音に、垣易の中、おのづから、無限の情致を含めり。殊に、一二の句來べき宵ありと、斷定して、いさゝ、

かの疑をも挿まざる。世慣れぬ女子の信念まこと此の如くならむといひて、たしべきの助動詞よく、その處を得たるにあらずや。今宵來まむかと、惑ひ抒べむは、こゝに慳はず。この七音分毫も、動しがたかり。五句に再び今宵をおきたる、重複の嫌ひなきにしもあらねど、辭藻才華を競はざりし上古の歌に向ひて、答めむまでは、要せざるべし。殊に、思ふに、萬葉以前の短歌に於ては、二句と五句とに、同語の重複するを、厭はざりけむ。その例を見ること、抄きにあらず。

玉さばる内の大野に馬かべて朝踏ますらむその草ふけ野萬葉集卷一

三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらむかさふべしや同

手弱女の袖吹きかへすあすか風都を遠みいたづらに吹く同

かど即ちこれあり。たゞに、厭はざりけむのみにあらじ。心ありて、この重複を肯へて、したりならむか。

足引の山のしづくに妹待つとわがたちぬれぬ山の幸に同卷二

天にはも五百つ網はふ萬代に國しらさむと五百つ網はふ同卷十九

大野山霧たちわたるわがをげくおきその風に霧たちわたる同卷五

の如き反復の辭様は、かくして後に成就せるものと思はる。

古今集序の註文に、この歌を引用したる四五句「蜘蛛のふるまひかねてしるしも」
とせり。これ後人のさかしらあること言ふまでもなければ、源氏物語帯木の巻に、
「さゝがにのふるまひしるき夕暮にひるますくせといふがあやあさ。」

とあるを以て、その時代の頗る遠きに屬したるを知る。おこなひをふるまひと改
めたる何等のいはれかあらむ。今宵をかねてと訂したるは、同語の重複を厭ひて
のしわざありけむ。さるは時代を辨へざらむよりの妄とぞ言ふべき。香川景樹論
じて曰く、

かくては、其蜘蛛のふるまひをかねてしれりといふ方にも聞きあさるゝ語勢あ
りてまどはしきこゝちするは、もとより作者の詞にたがへばなり。こよひしる
しもは蜘蛛のおこさひ今宵いちじるしと、たしかに其兆あらはれたるをいふに
て、いとあきらけし。

と言ひ得て、肯綮に當れり。

蜘蛛の家の中に垂り下るを見て、或は衣に附着するを見て、わが思ふ人の當に來
るべきを豫想するは、蓋し當時の有せりし信仰ならむ。久老の「組むといふよしの

名につきて男女の相隠り寐る前祥とはするなりと思ひとりたる、むしろ穿鑿に
過ぎて、感興を削ぐこと夥し。這般の信仰は、由來人間の情的要求に伴ふもの。古往
今來その軌を一にす。文化あき國民の心的素質は、恒にこの信仰の下に司配せら
る。如何からむ宗教を宣布すとも、かくの如きの俗間信仰は、永く泯滅せむの期あ
かるべきあり。

今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝりわれをたのむる。古今集

様の來る夜は宵から知れる。前を蓮池鳴がたつ。徳川時代俗謠

等時代を隔て、おほその趣くところを一にせずや。たゞに、この事一に留らず。嗟
する下紐の自然に解くる。眉根の痒き耳の痒き。元結の自然にはつる。夜臺の室
内に飛び入る等の類、皆情人の當に來るべき前兆ありとす。支那の古俗、おほこの
類の信仰を有しき。

蠅蚋一名長脚。此蟲來著人衣。當有親客至有喜也。河内人謂之喜母。幽州人謂之親

客。爾雅陸機疏

蜘蛛集而百事喜云々。西京雜記陸賈云

あど、これが徵證たらむ。

わがせこはいづくゆくらむおきつ藻の名張の山を今日か越ゆらむ。

當麻真人麻呂妻

萬葉集卷一に載りたる歌持統天皇六年三月伊勢國に行幸ありし時この麻呂も人々とともに御供仕りけむを都に残り留れる妻の思ひやりて詠みたるあり。

◎おきつ藻の名張の山。おきつ藻は枕詞あり。奥は水の底をいふ。水底の藻はかくれて見えぬものなればおきつ藻の枕詞とあしたるにておきつ藻は隠るの古語あり。萬葉集卷十六に「難波の小江にいほり作りおきつ藻を居る葦蟹をさごいへるなまりはおきつ藻の通音なりとす。さて名張の山は伊賀國名張郡にあり。續紀十一に「天平十二年冬十月壬午行幸伊勢國是日到山邊郡竹器堀越頓宮癸未車駕到伊賀國名張郡」とあるを見れば大和より伊勢へ下るには必ずこの山を越えたるあらむか。わが夫君は車駕に扈從して何處をかり給ふらむ伊勢路あたり雲ふかうしてむねのおもひの遣らむ方かし。かゝるればそれよ今日頃は名張の山を越えもすらむと一首全く感情の凝結したるものか。欄に凭りてうちわびたらむ手弱女の風、詞句の間に隠躍せり。男女相隔て、互に相憶ふ。相憶ふことまきりにして、

去かも相見むのよすがあらす。惆悵纏綿の情何を以てか。慰むることを得む。この婦の胸中たい良人あるのみ。良人は遠し見れども見えす。二の句突如として起りず。こしも擬議せざるは蓋しこの情を常にすればあり。この句のまづ提起せられたる必然の勢からずとせむや。三句の枕詞よく以上の語勢を抑へて四五句を言はむの餘裕を設けたり。名張山と明かに一箇所を指定せむは感情の激昂やまづまりたる後からでは不能は。感情の激昂まづまらむまでには多少の時間を要せむこと必せり。古人はかくの如く配置をたると枕詞を名づけて半臂句と言へりき。半臂は束帯に必須なる服の名袍と下襲との間に着くるなること。恰も一二句と四五句との間に挿りてその抑揚張弛を司る三句に類するよりや。かくは言ひけむ。俊惠法師嘗て、

たらちねはかゝれとてしもうば玉のわが黒髪を撫でずやありけむ。の歌を評して、

かゝれとてしもうば玉とやすめたる程こそ、ことにめでたく侍れ。といひきとかや。移して以てこの歌の評言ともしつべからむ。五句の今日かの三音、一ごとに萬鈞の力ありたいこの三音一首の命脈を維けりかの音ごとに離

すとも離すべからじ。試みにやを以てて、におかば、一首の生氣、殆ど滅殺せられ
了らむかり。緩急その度にかきひ、抑揚その宜きを得たる、この歌の如き、萬葉集中、
かほ多しと、かさず、富士谷御杖の

上は、ひろくいづこを行くらむとよめるにて、さて、日を數へあごして、大抵、今日
あごは名張の山を越えもすらむかど、さまふに思ひわづらふ情、かく、をさか
げある詞づくりにて、かへりて、思ひやりふかきなり。
と言へる、よく、詩情を割折したるものと謂ふべし、伊勢物語なる

風吹けば奥つ白波たつ田山夜半にや君がひとり越ゆらむ。
は、古來、人の激賞するところなれども、この歌に較べては、殆ど全く、顔色かけむ。一
二句の不自然ある、何ぞ感喟を抒ふるに、慚はむや、風吹けば沖つ白波、ある冗語に
よりにて、立田山のたつを生みいだせる、巧緻は、すあはち巧緻なりといへども、そも
また、自ら、たのれが感情を弄びたるの、甚だしきものあり。

みよし野の山した風の寒けくにはたやこよひもわが一人寐む。
作者知らず

これも萬葉集卷一の歌にして、文武天皇、大和の吉野宮に行幸し給ひし時、從駕の
人の詠みたるものあり。

◎山下風。その山の麓を吹く風あり。おほかたの萬葉注釋書、これを、山のあらし
と訓みたれども、如何あらむ。たとひ、和名抄に、嵐山下出風也とありとはいへ、文字
に隨ひて訓まむに、憚りあらじ。殊に、山の嵐、ある語の、こゝに在りては、音の加は
れるがために、調律をそこあふこと、尠きにあらぬものをや。◎寒けくに。寒くあ
るにの意と見るべし。後世あらば、寒けきといふべきところなり。寒けくを善け
くを、あご、古格の、必ずしも、古格とのみ看過すべからざるを、知れ。◎はたやこよひ
もわが一人寐む。はたは、脚結抄に、里言に、セウコモナイといふ義ありといへる
が如く、さし當りたる事の、意外にありゆくを、うち嘆ぐ意の副詞あり。單に、又の意
あるは、たとは、混同すべからず。雅言集覽の關豊脩が補言に、俗語に、わが思ふやう
あらぬ事を、ナゼマタカウダラウといへるに、語意近しとある。また、よくその意を
會したるものたり。集中、さを鹿のなくある山を越えゆかむ日だにや君にはたあ
はざらむ命あらばあふこともあらむわが故にはたあ思ひそ命だにへばあご、こ
の副詞を用ひたる例、頗る多く、古今集の郭公鳴くこゑ聞けばあぢさきくぬし定

らぬ戀せらるはたも亦この例ありとす又の意あるは源氏物語初音卷に「その外
の心もとあくさびしき事はた又トあければうつば物語俊蔭の卷に「光をはさつ
やうに見え給ふ子はたモ又さらにもいはすこの世にも似す後撰集に「わびぬれ
ば今はたモ又同じあにはあるみをつくしてもあはむとぞ思ふ」あご見えたる類
これかり拾遺集の時代にすらこの語の意義の失はれけむその集には四句こ
よひもまたやと改め載せたり以ての外のみさかしらと謂ふべし一句の意は今夜
もせむかたあくた一人寐むことかとなり故意にわれ一人寐むといふにはあ
らでわれ一人寐ざるを得ざることかどうち嘆ぐ意あり萬葉集の「一日だに見ね
ばこひしき父母をおきてや永くあがわかれあむ」霞ふり板間風ふきさむき夜や
はた野にこよひわが一人寐む新古今集の「葦かくや霜夜のさむしるに衣かたし
き一人かもねむ」あごのやかの用法皆こゝあるに均しと知るべし。

情交蜜の如き妻を別れて身は今芳野の山麓に在り今夜も亦この風の寒きに一
人丸寐をあすことか旅魂冷かにして「堪ふまじうおぼゆるものをと作者は、
車駕に扈從せるみやつこかりまかもあは孤情を抱いてこの嘆聲を發す強ひて
自ら虚らざればありた戀きが故に戀しと言ひ悲きが故に悲しと拵ふいまた、

にはかに禮を忘れたるものとはあすべからず國家的思想のおぼるげありけむ
上代にかくの如き作の多きは決して奇とするに足らじ。
一首沈痛殆ど卒讀するに堪へず一句より三句にいたる縷々として絶えざる糸
の如く忽ち波折して四句を起す四句のはたや何等凄婉のひいきぞ一首の生命
は蓋しこの副詞によりて保たる三音みあがら開口音ある擬聲の空きを得た
るものか悵然として大息すらむ人の音聲はまことにかゝるものあるにあらま
やざるをいかればか拾遺集の撰者はこの句をこよひもまたやと改めたりけ
むかくては音律紊れて調を成さじはたやこよひもに於ける高音符はやに在り
こゝを以てこの音全体に透徹せむほどの力を帶ふ故にもしこの音にしてこの
位置を失はれこの歌の價值は正に半減せられあむこよひもまたやに於ては高
音符もあり隨ひてやの音は最も輕微あらざること能はずさては如何にして
か想と形との一致を全うし得べき。

石見の海つぬの浦わをうらなむ人こを見らぬ瀉をし人こ
柿本人麻呂

14
7
そ見らめよしゑやし浦はかくともよしゑやし瀉は無くともい
さかごり海邊をさして和田津のありその上にかあをなる玉藻
沖つ藻あさはふる風こそよせめ夕はふる浪こそきよせ波のむ
たかよりかくより玉藻をすより寐し妹を露霜のおきてし來れ
ばこの道の八十限ごに、よるづたびかへり見すれどいやごほ
に里はさかりぬいやたかに山も越え來ぬ夏草の思ひしをえて
しぬぶらむ妹が門見むおびけその山

反歌

石見のや高角山の木の間よりこがふる袖を妹見つらむか。
さゝの葉はみ山もさやにさわげごもわれは妹思ふわかれきぬ
れば。

萬葉集卷二に載れり。これ、人麻呂朝集使にて都に上る時の作ありけむ。

◎角の浦わ。和名抄に石見國那賀郡都農郷とあるその所あるべし。わはくまわ

(隈回くるわ廓おどのわに均しく何にてもあれ灣曲せる處をいふあり。◎浦あし
と人こそ見らめ瀉あしと人こそ見らめ。美き浦かく美き瀉あしと人は見るらむ
とありらむを見に接続せしめたるは古格にして萬葉集中皆この例によれり。萬
代に見ともあかめやみよし野の瀧つ河内の大宮ごころ「春日野に煙たつ見ゆ少女
らし春野のうはぎ摘みて煮らしも」の見とも煮しらもかごも後世からば見ると
も煮るらしもといふべきにてこゝの見らむと、その格を同じうせり。古今集の歌に
すら春たてば花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のかくといふがあるを以て
すれば、上一段の動詞には、その第二變化に、第三變化所屬の助辭助動詞を接せし
むること、全く常例ありけむと思はる。◎よしゑやし。單によしやといはむも同
じく、ある事を假に設けいふ時に用ゐる副詞あり。この集に「たらちねの母に知ら
えずわがもてる心はよしゑ君がまに」天地の神もそれをばうつてこそしゑ
や命のをしけくもかしあどあるよしゑしゑやは、こゝのと、少しく意義を異にす
れども、詞の成立は、全く相同じきあり。やは感嘆の辭しは、單に語調を強むる助辭
あり。◎いさあどりは、鯨魚捕りにて、海に冠らす枕詞か
り。鯨をいさあどいふこと、壹岐風土記鯨伏郷の條下に「鯨走來隱伏故云鯨伏云々」俗

伊佐^爲とあるにて、よく知られむ。海べをさしては、次の來寄せにかゝる詞あり。◎和田津のありその上に。和田津の、四音の句あり。考略解おごはにぎたつのと訓みたれど、さる地名、石見の國に、たえてあらず。おほ、古義の、かく訓めるに隨ひてむ。和田津は、石見の那賀郡に在り。ありそは、荒磯の約りたるもの。◎かあをある玉藻おさつ藻。眞青ある藻あり。かあをのかは、語の上に添へいふ辭にて、かぐろき、かやすき、かより合ひ、か弱きおごのかに同じ。玉藻の玉は、ほめいふ詞にて、玉だすき、玉かつま、玉垣、玉柏、玉裳、玉釧、玉鬘、玉櫛、皆、これあり。沖つ藻といへるも、別ある藻をさせるにあらず。一つの藻を、かくは、重ね言へるあり。◎朝(夕)はふる。かく、わかち言へるは、對句をしつらへむための造語にして、朝夕となくうちふる浪風の義あり。そは、朝庭夕庭、朝狩夕狩、おごの例に同じからむ。はふるは、うちふるひさわぐをいふ。物の位置を轉ずる義あり。放るも、これと、語源同じからむ。この集おほは、小夜ふけては、ふりかく鴨。朝はふる波の高さわぎ。おご、夥多の用例あり。風をいたみいたふる浪の波の穂のいたふらしもよ。などのふるも、土佐日記に、磯ふりのよする磯には、年月のいつともわかぬ雪のみぞふる。とある。磯ふりのふりも、こゝあるはふるのふるに均しかるべし。◎風こそよせめ浪こそきよせ。玉藻沖つ

藻をありよせめど、わざとおぼめかしおきて、次の句に、きよせと斷じたるが、おもしろからずや。これをしも、古義の、依米は來依の誤りあらむ。とて、きよせと訓みたるは、おかくのさかしらあるべし。よすといふ動詞は、今こそ上二段に活け、もとは、四段活ありけむと思はる。そは、神代紀に、目ろ依しに依し寄り來ね。又、この集には、に立つあさでこぶすま今宵だに妻よしこせねあさでこぶすま。おごある例によりて、定めらるればあり。古義の、よせは、よすれの約りたるものとおもひとりたるは、未だしかりき。◎波のむたかよりかくより。波のむたは、波と共にあり。かよりかくよりは、彼方此方によりおびくをいふ。かどかくとは、かゆきかくゆき、かにかくに、かにもかくにもおごのかどかくどに同じ。この句は、玉藻あすを隔て、より寐し妹のよりを言はむための副詞あり。◎玉藻あすより寐し妹。玉藻の如くよりおびきて寐しわが妻あり。よるは、物の、かあたよりこあたに移りて、一に歸する意の動詞あれば、妻のわが方に、おびきよりたる意に用ゐるあり。◎露霜のおきてしければ。露霜のおきを言はむ枕詞。おきてし來ればは、家に殘しおきて、都へと上り來ればあり。◎この道の八十隈とどに。今、ゆく道の多くの隈々毎にあり。道にありて詠めるなれば、このどはいへるあり。八十隈は、定數を以て、不定數に代へた

る轉義◎よろづたび。こも前の八十限と同性質の轉義にして後世からば、いくたびか、あまた、びあせいふべきを、かく定數を以てしたる、方葉集全體におしわたれる辭法ありとす。萬たびはまた、誇張の最も大なるものからむ。◎いや遠に里はさかりぬ。來るに隨ひて、愈々ますく、わが里は遠さかりぬとあり。さかるは、離るの意にて、天さかるのさかると相同しき詞あり。◎いや高に山も越えきぬ。彌高々と、いくへの山をも、越えてきたりぬとあり。前のいや遠にの句と、對句に裝ひ成せるがうちには、どの助辭を、わかち用ゐたる、手腕あを、とるべからず。◎夏草のおもひしかえて。夏草のは、夏草の如くの意の枕詞。思ひしかえのしかえにかゝる、横の葉のしかふせの山、秋はぎのしかびてあらむ、あとの例あり。しかふもしかゆと同意義あるべし。◎しぬぶらむ。旅あるわが上をしのびねこすらむあり。前の句につけて、解すべし。◎妹が門見むおびけこの山。妻が家の門を見むによりて、たゞ一方に、靡き伏せよと、心かき山にねほせたるあり。

◎石見のや。たゞ石見のと言はむも同じ。やは、よに近き感嘆辭あらむ。日本紀體卷に「あふみのやけかのわくこが」この集に「淡海のや八橋の小竹を吾今集に」あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千とせは、あど、皆、同例あり。◎

高角山。石見國美濃郡に在り。拾遺集に、この二句を「石見あるたかまの山」とせるは、かたはらいたきまでのさかしらあり。◎わがふる袖。かへり見がちに袖ふりあどするは、旅たつ人の常あるべし。◎妹見つらむか。三句の木の間に連り接せる語意あり。わがふる袖を高角山の木の間に妹が見つらむかといへるあり。

◎み山もさやに。み山のみは、美稱あり。さやには、笹の音を擬したる副詞。さやぐ、さやくのさやと相均し。新古今集には「さゝの葉はみ山もそよに」とせり。さわけども、訓考に隨ひつ。古義のみだれどもと訓みたる、おとりさまに聞ゆれば。

長歌は、二段にわかたる。冒頭より、夕はふる浪こそきよせにいたる、これを第一段落とし、浪のむたより、結末に至る、これを第二段落とす。第一段は、まさに第二段の前提にして、いまだ感慨に入らざるもの。人麻呂の歌、往々この事あり。故國の海濱、風致にともし。浦汀の見るべきあく、瀉洲の遊ぶべきあしと、人は言ふらむ。たとひ、世人はしか言はむとも、たとひ、浦洲の美はあからむとも、わが心は、決して、故國を離れじ。朝はふる風、夕はふる浪は、沖の玉藻をもたらし來りて、荒磯の上に布くこと止まず。玉藻は青し。あよびやかあり。見るに目うつくしく、まさをるに手こゝ

ちよしど。これ、玉藻のあつかしきに思ひ臻りて、忽ち妹を聯想したるが如くあれど、
むしろ妹そのものを言はむがためにまづ配したる玉藻の文字のみ玉藻の一語
はた故國の海濱を思ふにつれておのづから口端を洩れつるが如くあれど然か
らず玉藻を言はむがために海濱を思ひ海濱を思ひて後故國に及べるからむこ
れ勢の然るべきところ庶幾せずして愛慕の情緒に率ゐられたるものありとす。
第二段まづ妹の語あり妹の語を装ふには玉藻と浪とを雙提し來る玉藻をすの
一句第一段の玉藻沖つ藻に廻映して各相背かず更によしゑやし浦瀧はかくと
もある文線を曳けり。文線伏在してあらはならねどよく讀む者はこれを認めむ。
波のむたかよりかくよりは疑ひもかくより寢しを生み出さむの序詞たり。古義
の、かよりかくよると訓みて玉藻の形容たらしめしは精しからじ。波の一語第一
段の結句をうけて直に第二段の冒頭を成す。漢詩にはゆる蟬聯の格に近きも
のかこの作者が修辭につとめたる以て知るべからむ。辭藻かくの如くにして、
かまは情致を失はずわれにより寐し可憐の妻を一人故山にのこしおきて、既
に羈中の身とはありぬいたる處ゆくとこる顧ること日に萬回故國いよ／＼遠
ざかりて途ます／＼高きにつく戀しさはわれのみからじ。わが妻はたわれを偲

びてかにかくと思ひわぶらむわぶらむその妻とても相見むたづきはあらず。せ
めての慰めに門をだに見ましを山よ重りあへる山よ一方に靡き伏してわが眼
界を濶からしめよと眞淵評して曰へらく、

古郷出で、かへり見る旅情誰れもかくこそあれもの、切なる時はをさなき
ねぎ事するをそれがまゝによめるはまことのみことあり。後の世の人はこの
心をわすれて巧みてのみ歌はよむからに皆そらごとゝなりぬ。
どこの願ひ到底達すべからぬこと常識の辨ふるところならむ辨へつゝもなほ
この語を口にす情の力は絶對に保たればなり。理はいづこまでも理に於て存
し情はいづこまでも情に於て存す。抒情詩の抒情詩たるべきはたゞこの二者を
相混へざらむにこそこの集卷十二なる

あしき山木末こぞりて明日よりはなびきたりこそ妹があたり見む。
はこれと同じく幼冲なる希望を歌へるもの。卷十五なる

君が行く道の隈手をくりたゝみ焼きはるばさむ天の火もかあ。
も亦これと共に狂痴の至極に入りつるものなり。なびけこの山の一句言ひ得て、
犀利の妙を極む。如何ぞ山の端逃げて入れずもわらなむの如き優長なる詞句と、

伍せしむべからむかの佐渡の俗謡「山退きやれ月の出入の邪魔になる」の初句五音ばかりぞ僅にこれと匹するに足りなむたゞそれ叙しつて感喟の盈るどころにおよび頓にこの警句を措きて一首の言を收結したる伎倆に至りては人麻呂以外また究めむに由なかるべし。

一首の意は實に結末の二句に集めらるこれ以外の言々句々は蓋し盡くこの十四音中より演繹したるに過ぎず十四音の含めるところはとりもなほさず一首の含めるところなりけり前提長くして斷案短く殆どその歸するところなきが如し感慨を抑制してしばらく他を言ふことこの歌の如きはもとより辭藻の餘裕饒きが致すところなれども人麻呂ならばこそあらめ凡庸の摸擬すべき手段にあらす凡庸これを敢へてせば歩々收束を失ひて一首全く懈弛し了らむなり人麿は實に天賦の辭藻を有せるなりき豪放不羈の才華を有せるありきおのれ自身も亦しか信じたりけむ鋪陳に大膽なること前後その比を見ずために往々その集中點を失ふに垂むとすることなきにしもあらず赤人に於ては然らじむしる小心に近き賦詠を以て充さる故にそのいかなるものにもありても一首緊束して首尾の全からぬはなしたゞ才華の煥發を認め難きのみ人麿との優劣はこ

ゝに剖つべきかぎりならねどそのいちじるしき甄別の點はたしかに今説くどころに誤りあらじ貫之が古今集序に於ける評隲の如きは疎放にして聞くに堪へむや。

反歌の一長歌に於けるよろづたびかへり見すれど之意を抽きて夏草の思ひしなえて思ふらむの意に配合し更に別趣の感慨に入る顧みがちに家を離れつ戀しさのあまり行く／＼うちふるわが袖をわが妻はた山の木立の隙より見おこすらむかわが妻のわれを思はむは猶われわが妻を思ふが如かるべきをど感慨しきりに加り來りて遂にこの情痴に陥る情痴の前には自他の差別あらずわが戀情を以て直に妻の戀情となし妻戀ひて振ふわが袖はわれ戀ふる妻の見るどころたらむとなすこの間殆ど他の念なからむ各句の配列常律を逸してしかも秩序を紊すことなきは蓋しこの作者なればこそなり詞調の莊重なるは言はずもなれど五句の七音は倏忽に讀過すべきにあらずたゞそれの一首一首の生氣を司れり音律の上よりすればこの舌端音能くその處を得て調を揚ぐること尠少ならず若し音を以てこゝに措かば忽ち緩なる調とぞなるべき又この意義の上よりすればこの助動詞よくその位に箴せられて多少の餘情を含蓄し

たり見つらむかは見たであらうかなり見たであらうかは必ず見ぬであらうかを伴ふ見つらむかいかにおほつかながりしはいはゆる戀の弱みならずやわが戀情はやがて妻の戀情に相均しと信じながらもなほこの弱みを脱却すること能はず情的機能は必ず當にかゝるべからむ故にもし又こゝを見ると言ひたらむには全く這般の妙趣を失ふにいたりぬべし見るらむかは見るであらうかなり見るであらうかは何の裏面をも伴ふことなしかなる疑の助辭もその力を加ふるに能はざらむ見つらむに接してこそいちじくる活動し得べし見らむの下には殆どその功あらはれざるなり音の配置助辭の條入決してゆるかせにすべからぬぞ

反歌の二長歌に於けるいや遠にいや高にの二句の意を擴めて配するに妹をおきてしくればの意を以てす即ち笹生に風たちてさやくとさわぎあふ哉笹のさわぎに山さへさやくばかりなれどわが心はそれにまぎれず戀しの妻をわかれて一人旅程に在る身なればたゞ戀慕の情思のみいやまさりゆくよとなりこの想もとより珍しとなさす

山の端にあちむらさわぎゆくなれどわはさぶしる妹にしあらねば(卷十二)

高島のあとかは波はさわげともわれは家おもふやとりかなしみ(卷九)

風さわぎむら雲迷ふ夕にも忘るゝまなくわすられぬきみ(源氏物語野分卷)などいづれかこの境地に異なるべき人麻呂のこの歌想に於てはむしる陳たるものなり既に長歌の末句に驚かされたらむ讀者は決してこの歌のために動かさるゝことなからむなり含むところは則ち然り包むところはいまだしからず一句より三句にいたる圓轉の妙言下に味ひ得べし四句忽然として頓折しわれはと言ひ妹思ふと言ふ樸拙なること上句に背けり寥落の意態おのづから哀しと感せられむさの音を重ねたるいはゆる頭韻といふべきものか萬葉集中この例なきにあらず

吉野なる夏筈のかはのかは淀にかもどなくなる山かけにして(卷三)

うくひすの通ふ垣根の卯の花のうき事あれや君がきまさぬ(卷十)

足引の山路もしらすしらがしの枝もとをゝに雪のふれゝば(同)

わがせこにわが戀ひをればわが宿の草さへ思ひうらがれにけり(卷十二)

の類即ちこれなり上古の歌人といへども決して修辭整調を苟もせざりしありけり五句の七音は蛇足のみこの句のために一首の價值の上下せられむことは

ゆめあるべからず。

淡路のぬじまが岬の濱風に妹が結べる紐吹きかへす。柿本人麻呂

萬葉集卷三の歌にて、この作者が旅中の作なり。石見より都にのぼるついでに、成りけむものか。

◎淡路の野島が岬。淡路は阿波に通ふ路の意なり。初句の四音なるは、古歌に例おほし。古事記に「さねさし相摸の小野にもゆる火の火中にたちてとひし君はも萬葉に「いづくにわれは宿らむたか島のかち野の原にこの日暮れをば「やまどのむろふの毛桃もとしげくいひてしものをからずはやまじ」などある、即ちこれあり。「おしたる難波の國は」そらみつ大和の國は」などの枕詞あるも、亦この例ありとす。◎妹が結べる紐。首途の時、妻が手づから結べる旅衣の紐あり、必ずしも、下紐とのみ見あすべからず。記紀に「赤紐長紐結紐」などの文字見え、雅亮裝束抄に、疊みて衣に附くるよし見ゆ。

の紐吹きかへす心細さ言はむかたをし。さるにつけても思ひいづるは、この紐を結びて、首途をいはひし、わが妻のおもかけあり。あゝ心うさわが旅路やと切々惚々家を戀ひ妻を戀ふる情緒詞句に離れ、又詞句に合す。雲巖が根にまつはれるあたり、風吹きたちて、日暮れあむとする岬頭のものさびしき、まさま目に見ゆるこゝちせずや。情は言外にあり。景は言中にあり。情致景致外より内より、相呼び相應へて、即不即の間に融會せり。人麻呂あらで、誰かは、これをよくし得べき。一句の四音は、蓋し自然に任せたるのみ。まかもは、期せずして、五句の急調に照廻したり。五句は、二二三即ち四三の韻律あり、四三の韻律は急の最も急なるもの。まかく急なるが故によく切迫せる感情に伴ひ得るを常とす。四音は、緩調あり、緩の最も緩あるべき韻律あり、緩あるを上にし、急あるを下にす。緩急相應じて急なるもの。まます急あるを得む紐吹きかへすと吟了して、かほ餘韻の迢々たるものあるをおぼゆるは、これがためありたい。これ、これが爲あり。四音三音六音等の句、これを措くの要は、たゞ作者の伎倆如何に在り、苟も、一首全體の調和をだに缺かさらむには、何ぞこれを肯てするに憚りあらむや。

四句の妹が結べる、これはた自然の言はしめたるものか。濱風の吹きかへすらむ

は豈心ありてのしわざあらむや。又豈紐のみに限りたらむや。然れども作者の情は、
妹の上にあり常に家ある妹の上に繋れり。忘れむとして之忘れざるが故に今こ
の境にあたりても妹が手觸れし紐のひるがへるをのみ見とめたるあり強ひて
去かしたるにはあらで、他を認めむの餘裕を有せざりしからむ。他を見ず、他を言
はず情として當にしかるべからむ。情人の名を、書冊の間に拾ひ讀みするその
情痴は、由來人間の本能たり。一を守りて二に及はず、一を認めて二を知らざるは、
そも、愛の至極ありけり。

三句のに音よく一首をして活變せしめぬ。四五句の詞つきよりすれば、こゝ濱風
の濱風はかゞあるが通例あるべきを、去か言はざりしぞ、さすがは人麻呂ありけ
る濱風にといひたればこそ、岬頭にたてらむ自己を主として自己の感情を發展
し得たりしかれ。四邊の風物をして自己に集中せしむるを得たりしかれ。濱風は
もしくは、濱風のかゞ言へらむには、濱風そのものが主とありて、自己はむしろ客
位とありぬべきあり。玩味すべきは、こゝに在り。藤井高尚の

五句吹きかへすと有るにかけて思へば、三の句は、風のとあるべきことわり
あれど、さにあらず。濱風にかうくゝの事ありと、四五句にことわれるあり。その

事は、妹が結びし(躬治いふ、かくいへるは、真淵の訓したるに従へればあり)紐ふ
きかへすといひて、かゝるにつけても、家の戀しさ堪へがたしといふ餘意あら
はれたり。このあはれある餘意は、のてにをばよりいできつるぞかし。
と言へる、わが意を得たるに庶幾し。されど、かは、初句の、四音あるをいふかしてみ、
若しは、淡路のやとありしを、寫し洩したるにかと言ひたること、未だしかりけれ。
千載集雜下に載れる

東路の野鳥が崎の濱風にわが紐結びし妹が顔のみおもかけに見ゆ。

の旋頭歌(?)は、蓋し、人麻呂のこの歌を襲はむのすさびありしからめど、詞意滅裂
さながら、舐舌を聞くらむこゝちのみする。後世歌人の無能、今にはしめず。

安部 女郎

わか。せ。こ。は。も。の。な。お。も。ひ。そ。事。し。あ。ら。は。火。に。も。水。に。も。わ。れ。を。け。
あ。く。に。

萬葉集卷四に載れる歌あり。

◎ものあおもひそ。物思ふ勿れの意あり。かは勿の意。そは、それそのあごのそと

同じく、去かど指し示すほどの辭あるべし。この集、あは、大君はものをおもほしすめろぎの嗣きて賜へるわれかけかくに「甚だも夜ふけてちゆき道のべのゆぎ」の上、に霜の降る夜を「あご見えたるにて、禁止の意をあらはし得るは、あごの助辭のためあるを知らむ。◎われかけかくに。われあきにあらず。われかくて在りとの意なり。この集、卷十五なる「旅といへばこと」にぞやすきくも妹に戀ひつゝすべなけなくに「のすべなけなくにも、この」と同じき形式なり。あけは、よけむあしけむなどのよけあしけと同じく、形容詞に、有りの動詞の加はりたる、その第一變化ありとす。すあはち、なけなくには、なくあらなくにといはむに均し。あくには、ぬにと同じ意なれども、また、特殊の語調を有せり。大崎の神の小濱はせばけごも百船人もすくといはるくに「鴨どりのあそぶこの池に木の葉おちてうかべる心わが思はるくに「たらちねの母が手はあれかくばかりすべなきことはいまだせあくに「あご、万葉集中、この例おほし。いづれも、感情の切ある時に用ゐられしを見よ。』わが夫君よ、あやかくものをおぼし給ふなや。もし、一たび緩急あらば、この百年の命を、君にさゝげむ。火の中水の中、すこしも、恐るゝに足らじものを、われ、かくて在る上は、心を勞せずしておはし給へど。これ、熱誠の凝結せるなり。牢乎たる決心。そ

れ、かくの如くならむには、天上天下何ものか、よく、抗塞をあへてせむ。愛の極は、没我なり。献身あり。我を没するは、なかくに我をもとむる所以あり。身を献するは、仁を爲さむがためにあらず。たゞ、情の司配の下に、その去就を決するのみ。すでに決す、その力や限るべからず。窮るべからず。一たび加へば、頑たる、死、巖も、生命を得む。聖賢佛菩薩、そも、愛の力と執れど、この歌、この想、いづれの世にか、朽ち果つべき。作者は、千年前の人、しかも、あは、千古に徹れる人、には、あらじか、一二句のまづ提起せられたる、自然の順序に、慥へるものあり。愛の對象にむかひてまづ、それに慰籍を與へ、而して後除るに、自己が決心の固さを示す。決心の固きは、四句の誇張によりて、これを見つべし。誇張は、感情の激越に伴ふ、恰好の修辭法あり。火にも水にも、どのみにて、何の説明語をも挿まず。直ちに、五句のわれかけかくにと相接したる、到底、伎工のよくすべき句法にあらじ。流暢の詞調は、由來、舖陳に宜しく、詠懐に適せず。詠懐、この歌の如きもの、何ぞ、詞調の流暢あるを得む。

ゆ。ふ。闇。は。道。た。づ。く。し。月。ま。ち。て。ゆ。か。せ。わ。が。せ。こ。そ。の。ま。に。も。
○ 豊前國、娘子、大宅女

見む。

これも萬葉集卷四に載れる歌あり。新勅撰集に再録せるには、四句かへれわがせことあり。

◎道たづくし。道のはどおぼつかなからむとあり。たづくしは、どたづくしともいふべく、たざるたづぬたどきなど、語源を均しくせり。おぼつかなく、心もどなき意なり。◎ゆかせわがせこ。行き給へわが夫君よとあり。行かせのせは、助動詞古事記の「天の浮橋にたゝして」日本紀の「大君のつかはすらしき」天板詞の「荒ぶる神をば神問はしに問はし給ひ」萬葉集の「わが戀ふる妹にあはさず玉の浦に衣かたしきひとりかも寐む」あどいづれも、皆この助動詞の用ゐられたる例ありとす。君は今、この夕闇に立たむとし給ふか。さりとは、道の隈手のたどくしからむにせめては、月の出づるを待ちて、行かせ給へ。その月待つ間にも、あつかしき君が姿を見るべきものと、嬌情かくありてこそ、夫の愛をば失はざらめ。夫の身は、わが身あり。二身二あるに、あらず。二身具足して一たるあり。その一舉手一投足にも、心のおかるゝは、常に然るべきと、こゝろたむ。二句にて切り、四句にて切り、更に又、五句にて切りたる。羞を含み態を含みて、ついでしり言ひけむ。女子の口吻をさあが

らうつしたらむが如し。夕闇のたどくしからむにつけて、夫の歸途を危むは、恒情あり。通り一遍の挨拶にも、或はこれを口に、しつべし。こゝに於て、か更に歩一歩を進め、頓挫して五句を起す。五句の七音は、かりそめに得べきからむや。既に情を拆して、痴に入りたるものあり。委曲婉深、この歌の如き、萬葉集中、あほおほしとあさず。

人もし、この歌を朗詠して、後、小唄裏組(八幡)ある。

月は八幡のまた空にも往のく(最早往ナム)とは思へども、あどに心がど、まりて、後髪がひかるる。

をとりて讀まば、時間を異にして、男子の返歌をさくらむ趣味を感すべきなり。又、かの端唄の

羽織かくして袖ひきどめて、どうでも今日はいちんすかと言ひつゝ、立ッて櫺子窓障子細目にひきわけて、あれ見やしゃんせ。この雪に。

を思ひ合せ見よ、異なる時異なる處に於て、同じ人の同じ歌を、再び聞くのこゝちせられむ。たゞ、この歌は、主觀的にして、端唄のは、客觀的であるが、同じからぬのみ。

君待つごわが戀ひ居ればわが宿のすだれ動し秋の風吹く。額田女王

こは萬葉集卷七に載れる歌あり天智天皇を戀ひてのあまりに成れる御歌ありとぞ。

◎君待つと。君を待つとてあり。といふ助辭のどての意あるはこの集の「さ夜中に友よふ千鳥ものもふとわびをる時に鳴きつゝもとを古今集のほにもいでぬ山田をもると藤衣いさばの露にぬれぬ日ぞあきくると明くとめかれぬものを梅の花いつの人まにうつろひぬらむ」あごのたぐひ皆まかあり。

一首のおもて平かにして張弛もあく頓挫もあければうち見たるばかりにて直にその意を得べし。今宵はと契りし郎君は待てども來らず砌前関たること既に多時簷簾秋風に動いてむあしく聲あり胸を填むる懊惱の思ひいかにこの少婦を苦めけむまかもあはその情を内に藏めてこれを言外に逗出せしめずたい僅に待つ戀ひの二語を露したるのみ他は皆刻下の光景を描けるに過ぎず無量の感慨は蓋し餘韻に在り餘韻餘情趁へども盡さず尋ぬれども及ばず縹渺として羅浮おせる白雲を送迎すらむか如し簾うをかし秋の風吹くの十四音言澹にし

て聲哀しく無聊の極悽愴の至讀むにつれて讀む人の肺腑に徹せむ契沖嘗てこの歌を評して、

すだれ動し秋の風ふくはもしやおはしますと思ふ心よりそのもの音も君かと思ひはからるゝあり

と言へりき必ずしもまがるべからじたゞ物に觸れて興をおこし興おこりて懷を傷ましめしのみさればぞ含蓄の妙は一方あらぬこの集卷十の

君戀ひてまをえうらぶれわが居れば秋風ふきて月かたぶきぬ

の如き亦まかりとあす。

二句と三句とにわが居る同語の重複したるを見て漫にこの歌の價值を疑はむはいまだしわが戀ひ居ればと言ひて直にまたわがと言ひ冠せたるどころに多少の妙趣あるを知らずやこの集卷十一ある

わがせこにわが戀ひ居ればわが宿の草さへ思ひうら枯れにけり

と共におのづからに成りたる頭韻の一種とも見做し得べけむ紀氏六帖に、君待つと戀ひつゝ居ればわが宿のすゝき動きて秋風ぞ吹くとして載せたるはいまだこの歌の神情を會得せずしてのさかしらからずとせ

難波人葦火たく屋のすしたれごおのが妻こそごこめづらしき。作者知らず

これは同集卷十一に載れる歌拾遺集にも再録したれごいさゝか異れり。

◎難波人葦火たく屋の。難波の海人ごもが葦火をたく家の如くの意の助辭にしての如くの意に用ゐらるゝ例は古今集の吉野川岩波たかくゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし夕月夜さすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな又はこの集のまぬびには戀ひて死ぬともみ園生の唐藍の花の色にいでめやもちごの如しさてこの二句はすしを呼び起さむための序詞あり一首の意義に關係を有せるにはあらず◎すしたれご。拾遺集には煤垂れごとあれど大あるひが事ありさては四句のおのが妻に對して何のよりごころもあきにいたりぬべしすしは四段活の動詞にて黒ばみて澤のあくありたるをいふ煤はこの動詞の言ひすわりて名詞とありたるのみこの句は四句のおのが妻を説明せる語あり序詞にあらず◎おのが妻こそごこめづらしき。自己の妻こそ長しへに珍

らかかれとなりとこはとこしかへとこ世とこはあどのとこにして常即ち終始不變の義ありこそその係をめぐらしきにて結びたるは古格あり日本紀に衣こそ二重もよきさね床をかさねむ君はともしきろかもこの集卷一にしかにあれこそうつせみも妻をあらそふらしきかぞ見えたる皆同例ありとす蓋し上古形容詞のけれと活くものあかりしからむさるを拾遺集にこの句をどこめづらしと改め載せたるはいかにぞや事わきまへぬにも程こそあれ世上の婦女皆綺羅をかざり嬌態をつくるそれに比べてはわが妻殆ど顔色をしわが妻年傾きて色香全く失せぬしかれごもわれはこれを離別してかれを娶らむを欲せず舊りたるをすて、新しきを宛めむと思はずわが愛をは熾かり妻の愛も亦何れの日にか老いはつべき見れば見るほど目新しきわが妻あるかぞとこれこの歌意愛の最も高潔あるものならむ世上妍女おほしきかもわが妻のみ長へにわが眼底を占む妍不妍は蓋し比較的思察によりて岐る比較せむと思ひたつはやがて情の司配を脱せるものかり情は醇あるべし一たびこれを人に醜らばいかにすども他を省み能はし妍や醜やをも問ふのいとまあきかり夫婦の情味はたこの即不即の間に維る夫婦の間に増減なく夫婦の外に天地あらず

これ自然のみ何ぞ他の制裁を須を要せむ古事記須勢理毘賣命の御歌ある
赤玉は緒さへ光れど白玉の君がよそひしたふとくありけり

及びこの集卷十一ある

紅のやしほの衣朝かゝ狎るとはすれどいやめづらしも

卷十八ある

紅はうつらふものぞつるばみのかれにし衣にかはまかめやも

の如きは均しく皆この歌と共に自然の意を人間に洩したるものぞ

一二句の序詞譬喩を取ること婉切かり妻が風丰の醜あるを描くに力を極む四

句のこそこれがため一段の活動を得たり對映の妙苟も看過すべきにあらす五

句殊に雄渾斷じ得て傍人かきが如しとこめづらしきの音律おのづからまたる

れに慳へり拾遺集に載せたるが如くあらばとてこの斷案をさへ能はじと

その係移すべからずしきの結びも代ふべからず豈た古格とのみは言ひすつ

べけむや

作者知らず

千早ぶる神のたもてる命をもたれがためにかあがくほりせむ

こも亦同集卷十一に載りたる歌あり

◎千早ぶる神のたもてる 千早ぶるは稜威速ぶるの略音かりといへり神にか

ゝる枕詞あり神のたもてるとは神の保有せる即ち神の司れるの意あり原本に

持どあるは禱の誤りからむとて本居宣長は神にいのれると訓むべくいひたれ

どもかはこゝのまゝあるが一首をたすく訓方あるべし齡の長短は人力の左

右すべきにあらねばかく言へるあり◎命をも もは抑揚におきたるまであり

軽く見るべしあれもこれもものにはあらずこの句古義はいのちをばと訓みた

りさせむもあちがちあしかるまじけれどあほもどあらむ方調子のあだらかさ

を加へ得べしばと強く言はむところとも思はれず◎たれがためにかあがくほ

りせむ 誰人のために永く生きむことを欲すべきぞたゞ君あるがために去か

欲ふとあり永くの下にどを加へて見るべしほりは四段に活く動詞にてしかせ

むことを願ふ意あり今いふ欲すはこのほりすの音便かりと知るべし

わが命はわが心のまゝにかるべからず死期臻らば如何ともせむすべあからむ

去かもわれは常に長壽あらむを冀ふこれそもく誰が故ぞたゞ君あるがため

の意よりいでたる語にて、劔刀、いづれにも用ゐるべし。こゝにては、劔の太刀の義
あり、劔及び太刀の意にはあらず。◎もろ乃の利き。もろは、もろ共にもろくも
る人あどのもろにて、全體の意あり。即ち、劔の兩乃あるより、かくは言へり。利きは、
するごきのときにて、やがて、その意あり。さとし、聰とし、疾とく、研あご、皆同語源を
りとす。さて、かく利きとのみ言ひたるは、わが行きのけながくしあれば、の行きの
如く、形容詞の第二變化を、いひす。たる轉成名詞あり。利きをと言はずして、利き
にとし、もいへるは、妹が目に戀ひやあかさむ。吾妹子に戀ひてすべあみ。あごの如
く、諸乃の利きそのものに、わが身のひきつけらるるやうの氣味あり。足踏むとい
ふ語は、この集卷十五にも、信濃路は今のほり道かりはねに足踏ましむ。あぢわ
がせと見えたり。◎死にも死にあむ。たゞ死なむといふに同じけれども、そのを意
一きは強むるに於て力あり。同語を重ねいふこと、例おほし。進みに進む、飲みを飲
む、行きと行くあご、即ちこれあり。◎君によりてば。君のためならばと言はむが
如し。よるは、二以上のもの、一に歸する義あり。この集のあすのよひ照らむ月夜
はかたよりに今宵によりて夜あがからあむ。なご、これに同じ。君によるといふ語
は、この集に、秋の田の穂むきのよれる片よりに君によりあ、こちたかりとも。む

さし野の草のもろ向きかまかくも君がまにく、われはよりにしを。あご、あまた
例あり。

君がためならば、如何ある難事も、われは辞せじ。もし、かの劔の乃を踏みて、われゆ
ゑ死ねど、のたまはむをりもあらば、そのまゝ、仰せに隨ひなむ。わが命は、わが命に
して、わが命にあらず。既に、君に捧げまゐらせたるものあればと。一首の情意
何ぞ、それ悲壯あるか。火にも水にも比べて、又、別段の趣味を保てり。死を見るこ
と歸するが如きは、夙に安心立命の境地に達したるものからじや。安心立命は、
覓めて得べからず。祈りて得べく、信じて得べし。いはゆる君のためから命もいら
ぬの信念、かく確たりえむこと何ぞ、他力を籍りての後からむや。我は唯一の味
方にして、我に對しては、常に無限の力を有せり。この力、たゞひ愛をひきゐて人に
向ふや。彼と此とを融會せしめむとして、しばらくも滯らす。その當に來るべき結
果を見れば、止まざるなり。これ大なる煩惱の如くにして、まかもその根底に如
々のひきあり。表裏透徹して、遂に淨樂の境地を現出せむこと疑ひあらじ。たゞ
その愛の純一ならむを要とするのみ。

この歌、蓋し愛情の結晶あり。常人の最も恐るゝ劔太刀諸乃の利きを提出して、忽

ち。これ。を。粉。壺。に。す。感。情。の。激。昂。を。静。め。む。に。必。ず。則。る。べ。き。手。段。た。り。句。法。の。奇。々。た。る。後。世。人。の。耳。に。は。雷。霆。と。も。響。く。ら。む。か。一。二。三。四。の。句。一。瞬。傾。瀉。が。く。て。ぞ。決。心。の。固。き。を。も。表。し。得。べ。き。句。勢。お。た。か。も。勇。士。の。陣。頭。に。た。ち。て。三。軍。を。叱。咤。す。る。の。概。か。ら。ら。じ。や。五。句。頓。は。一。拆。し。て。は。し。め。て。そ。の。然。る。べ。き。所。縁。を。叙。ふ。奔。馬。忽。ち。掣。勒。せ。ら。れて。金。轡。鳴。り。を。し。つ。め。け。む。趣。あ。り。も。し。凡。手。か。ら。ま。し。か。ば。こ。の。七。音。に。收。め。ら。る。べ。き。所。縁。を。し。も。上。三。句。の。間。に。言。は。む。と。せ。ま。し。さ。て。は。如。何。に。し。て。こ。の。感。慨。に。一。致。得。べ。け。む。

玉敷ける家も何せむ八重葎おほへる小家も妹と居りてば。作者知らず

これも同集の同巻中にある歌あり。

◎玉敷ける家。美麗高尚なる邸宅を形容せるあり。玉は古人の物質的最貴の物と思惟したるところのものか。◎八重葎おほへる小屋。葎のいく重にも掩ひかれる茅屋をいふ。八重は必ずしも彌重の略と思ふべからず。八ある定数を以て不定數に代へたる一の轉義ありとす。定数を以て不定數に代ふるは、上古一般に行

はれたる轉義の一種にして千名の五百名五百重の波千引の岩五十槻が枝千萬の軍八十禍日百取の机あごの例甚だおほし印象を明瞭ならしむる功決して尠少からじかし。◎妹と居りてば。妻と同棲するからばとあり。この句の下に、樂しからむ喜しからむおごやうの意を含めたり。

大寔高樓何のたのむところぞ樂みは、それにあらず葎生の荒屋といふとも、わが妻と、相ともに棲めらむには、天上の樂みまのあたりあらむ。これ、一首の意あり。愛の極み、うべこゝにありて存す。如何あらむ野末にか夫婦の同棲を拒む惡魔あらむ。相戀相思、その味甘露よりも甘し美祿、われにありては、屑にもあらず。君と寐ようか五千石どころか。あんの五千石君と寐よう。

は、豈かの蕩郎のみが觀念ならむや。足利時代の小唄翠簾組ある。荒野にありと君と添ひあはば都あるもの。

および徳川時代の投節唱歌

君にあふ夜は埴生の小屋も玉の臺にまざるもの。

潮來節の

まゝいよ田舎がまた住みよかるぬしと一處にくらすあら。

等はいづれかこの歌意の時代思想をあらわすを證せざらむ。

玉敷ける家と八重葎おほへる小屋とを兩々提起し來りて照繳の宜しきにかへり最善と最醜との對比は反動の妙を致すこと尠しとせむや二句何せむと言ひすてたる峻烈面を向くべからず五句妹と居りてばどのみにておほくの含蓄あらしめたるはた感情の憤悱に伴ひたりとぞいふべき。

天地にすこしいたらぬますらをと思ひしわれや雄ぞるもあき。

作者知らず

これは同集卷十二の歌あり。

◎すこしいたらぬ。いさゝか徹底せぬとなり。◎われやをこゝろもなき。われは雄心も無きかと自ら疑へるありをこゝろは雄々しく猛々しき心の義あり。われは大丈夫なりわが心は天地間に徹底せり石の如く轉ばすべからず藤の如く捲くべからずとのみ今日が今日まで信じ居りしに、一たび人を戀ひそめてより、うたゝ意氣の銷沈せしよあゝわれには雄心なきか何ぞこの胸の苦しく痛き

五四

五五

やと情意は常に相闘ふ相闘へども遂に全く他の一を亡すことなし。理性の人のまたにはかに無情の人とはいふべからず。火を踏んで恐れざらむ猛者はあかく、涙もろきにあらすや分別盛りの男女にして往々無分別の舉動にいづることあるむしろ自然に近きがおほし時に情を抑ふるは自信ある人の當につとむべきどころかれども情を矯めて長へに活かしめざらむは決して人間の面目にあらじ。今この作者意氣雲を衝くの丈夫にして、まかもわれわれを疑ふ思ひしの一語點し得て能くその自信をあらはせり。根底ある自信は理性が司配の下に成る。理性の人ははかつこの嘆聲あり情の前には殆ど障礙をからむあり。

一二の句法最も奇警すこしいたらぬある消極的措辭はやがて積極的眞意天地間に徹定せるの裏面ならざるなきか。修辭の巧詐豈羨むべからずや四五句われわれを疑ふの趣詞調の間に餘蘊あらすやの一言沈痛を一首の面に與へ得たり。いはゆる畫龍點睛とぞいふべからむ。凡手をして擇ばしめむには必ずやを以てこゝに措かむに。

作者知らず

露霜のけやすきわが身おいぬごもまたどがかけり君をし待たむ。

これは同集集十二の歌あり。卷十一のには初句朝霜のとあり。

◎露霜の。露と霜との意にはあらず。露の水れるばのりの霜即ち水霜をいふあり。のはの如きの意にて、この句は次のけやすきを言はむためにおける枕詞なりとす。◎けやすきわが身。消えやすきわが身なり。けは消えの約りたるにて、古今集なる白玉か何ぞと人の間はむ時露と答へてけなましものをあるは、この集のあした咲き夕はけぬる月草のけぬべき戀をわれはするかも秋萩の上におきたる白露のけかもしなまし戀ひつゝあらずばあごのけに同じ。◎また若かへり君をし待たむ。または更にの意若かへりは、心があり古義にては、これををちかへりと訓みぬ。それもなほ若の意に異らず。君を待つといふは、その時一時にかぎりてはあらず。君のわが方にあひかむ日を待つとの意に解すべし。この集に、まつら川あか瀬の淀はよごむともわれはよごます君をし待たむ。あちの住むすさの入江のありそ松わをまつ子らはたゞ一人のみなどある類皆これあり。但し、一時にかぎりて待てる意に用ゐたるもなきにはあらず。これもこの集の足引の山のしづく

に妹まつとわがたちぬれぬ山のしづくに「道のべの草を冬野にふみからしわれたち待つと妹につげこうの如き即ちこれ。

露霜の消え易きが如くはかあき人の命あればやがてはわれも老いとあらむわが身いかほど老いはつとも君を見ずして死あるべしや。心ばかりは更にむかしのみまに若かへりて君を見るべき期あるを待たむと。これを一首の含むところとあす人を戀ふるは會はむの希望あればあり。希望は人の生命髪こそは白くもかれ、腰こそは二重に曲れ、希望だに失はざらむには人の生命は時じくなるべし。形骸はよし、一片の土壤に歸すとも前途をほ光明の煌燦たるをおぼえじや。この歌のこの想たいこの作者の私有からず。生をこの世に稟けたる人誰かはこれを抱持せざらむ。四五句の最も積極的なるは一二句の最も消極的なるに廻映して無限の味あり。その句勢の勁勵あるその句形の朴率あるおのづから決心の強きを示す得たり。これ蓋し伎工以上のもの。

しき島の○大和の國に、人さはにみちてはあれども藤波の思ひま

作者知らず

つはし若草の思ひつきにし君が目に戀ひやあかさむあがきの夜を

反歌

敷島の大和の國に二人ありさし思は何かあけかむ。

こは萬葉集卷十三に載れる歌あり古今六帖にも載せたれど字句の異れるところすくあからず。

◎しき島の大和の國。しき島は大和國の地名あり崇神天皇こゝに都し給ひて磯城瑞籬宮といひ後また欽明天皇もこの處に都をさだめ給ひて磯城島金刺宮とまをし給ひしかば遂に大和にかくる枕詞とあり直に大和をよぶ名ともあり更に大くとりあして日本一國の上をもよぶある名とはかり來しかり。◎人さはいふタクサンニに近し。◎藤波の。は思ひまつはしのまつはしにかゝる枕詞にて藤波の如くの意ありまつはしは纏綿の意にてまつはるまごふあご、語源相均し。◎わか草の思ひつきにし。若草のは思ひつきにしのつきにかけたる枕詞にてこれも若草の如くの意ありと知るべし若草はなよびやかにうちしあび

たるものあればわが心の一方により附く意を起し得るありつくは目につく氣がつく朝日づく秋づくあとのつくど同じく附着の意この集のをち方のしげさか下のさぬばりの衣につくあす目につくわがせなどを考へ合すべしさてこの句は上の藤波のおもひまつはしの句に相對へたるなり對句は長歌に必須なる辭様にして上古歌人の最も能くしたるものの一とす。◎君が目に戀ひやあかさむ。君の見たさに君にのみ戀ひわたりつゝこのあがき夜を明さむかどあり君が目にあ戀ひ明さむといはむが普通の措辭あるべきにやの助辭をとりて戀ひ明さむの間に挿みたるこの例古歌におほし君が目にあ戀ふといへるは見たし會ひたしの意を婉曲にあらはしたるあり目と言はずして目にとしもいへるは妹に戀ひ君に別れあさゝ同例ありをどの用法まぎらはしとてゆるかせにすべきにあらず戀ひや明さむはわれから進みて故意に戀ひ明さむといふにはあらず戀ひ明さむを得ざることかどうちわびたらむさまありあほ前のみよし野の山下風の寒けくにの條下に説けるを參看すべし。

日本國中に住めらむ人數かぎりもあく多しといへどもわが夫とたのまむはた一人のみかの郎一人のみ今こゝろ遠く隔り居れわが心は常に君にまつはり君

に附着して、一日片時も離るゝことあらず。あはれ、この長き夜すがらを、君戀ふばかりに明さむことか。さても戀しのわが君かなど。これ、この歌の大意。君が目に戀ひやあかさむの句法。何ぞそれ豪嶮あるか。大膽ある修辭は、万葉集以外殆ど全くその例あらず。見るの作用を起すべき目を以て、たゞちに見るの意義を代表せしむ。これ即ち目と見るとの間に、連絡せる關係を認めたるより、おこれる轉義の一種ありとす。集中なほ、

海山もへだゝらなくに何しかも目ことをだにもこゝたどもしき(卷四)

人目おほみ目こそしぬふれすくなくも心のうちにわが思はかくに(卷十二) たくふすを新羅へいませす君が目を今日か明日かといはひて待たむ(卷十五)

等、その例頗るおほし又かの

わが聞きし耳によく似ば草のうれの足なへぐわがせつとめたふべし(卷三) たらちねの母が手はかれかくばかりすべなきことは未たせなくに(卷十一) の如きも思想の關係に基きて成りたる轉義ありとぞいふべき。勅撰集の字句の研鑽は遂にこの境に入ること能はざりきたゞそれ古を宗として、模倣以上に脱出し能はざりしがためのみ。明治以後の歌人たらむものは、心をこの間に潜めて自ら

期するところかかるべからず。

反歌の語句とりたて、言はむを要せし長歌の意義を歸納して、更に特殊の信念を發展せり。信念かくの如く九天九地に徹底せるもの、この集中にすら、おほ匹をもどめむこと難し。古今集後の長歌短歌は、皆この歌の後に在り。夫婦は、一の天地を有つ天地の間に存在せるは、たゞ二人のみ。二人のみと觀せむは、夫婦それ自身の本能あり。觀せざるべからざるにあらざる。おのづからに觀すべしとす。夫婦は、たゞかも一体あり。大なる我あり。我を離れて天地あらず。天地の相は、我の相なり。既に、我の相を自識し、我の存在を自覺せらば、何をともどめて何かかむ。我は長へに安かるべく、世は時じくに樂しかるべし。蓋しこの安心は、絶對あり。人二人在りとし思は、の十二音を吟味せよ。思ふは自ら思ふをいふ。他力を籍りて思ふにあらざる。自力によりて自信し、自覺す。その方々決して奪ふべからじ。

敷島の大和の國、この歌に在りては、廣域二萬五千方里の日本の意味とのみはいふべからず。思ふに、當時の思想にありては、餘蘊なくあらはしたる、洪大無邊の意ありしあらむ。おほ天地間の意と見むこそかなはめ。人二人は、われどわが匹。隅との二人をいふなるものを、鹿持雅澄はこれを釋して、

天下にわがうつくしとおもふ人の二人とだにあるものあらばかくばかり何か嘆かむとあり。

と言へりき何ぞそれ鑑識のひくきやわが情人の二人あらむを希望するは貞操なく情熱なき後世の子女のみこの歌に向ひておほこの罪惡を延く作者や蓋し地下に泣くらむ雅澄たゞひとり然るにあらずおほかたの万葉注釋書ひとしく皆罪を古人に得たり思はゞの一語いかにこれを見たりけむか。

すべて戀歌は消極に陥り易きものあるをこの歌ばかりぞ最も積極ある豈歛すべからずや後の歌に類似のものをたづねむにも。

かがらへておあじうき世にありてのみ聞くやわが身のたのみみるらむ(新拾遺集)

あの上にいでもものをやわれ今この歌を推してわが國戀愛詩中唯一の絶品とあす大膽はわが性あり。

天地の神をきものにあらばこそあがもふ妹にあはず死にせめ。

中臣宅守

六二

六三

萬葉集卷十五に載りたる歌あり同卷四には二三の句神しことわりかくばこそとしてあり宅守事にあたりて越前國に配流せらるゝ時新妻ありける狭野茅上娘子と別れがたき事を言ひあひたる歌六十三首ありこれの一あり宅守は天平寶字頃の人。

◎あがもふ妹 吾思ふ妹ありあは一音にして吾の意の代名詞ありわはそれよりや後れて用ゐられたり◎あはず死にせめ 會はずして死ぬからむとありかゝる場合のす後世はおほかたで用ゐるでの助辭を萬葉以前の歌に用ゐたる例をさく見あたらす死にせめは死にを言ひするて名詞格とし更に佐行變格に活したるものあり。

一首の意天地間に神といふものゝあからむにはわが思ふ人にあはずして死に果つることもあらむされど天地の間には靈驗いやちこある神々のおはしますなれば思ふ人に會はずしてこのまゝ死なむ愛ひは斷じてあらずとありかくまで自信の固からむには情緒の感應決して空しからじ人の生命はた愛のみ愛の生命はた一の信に繋れりもし人生に信あるものゝあかりせばいかに社會は根底より覆らむぞ信の力豈大からずとせむや今この作者このわが信念を發抒す

るにあたり、正面より言を成さずして、殊更に消極的の句法に倚る。積極的の眞意のために、一段の豪快をおぼゆ。こくの如く、反對に基きて成れる辭様は、往々、短歌に於て見るごとあり。

久方の天つみ空に照れる日のうせあむ日こそわが戀やまめ(萬葉集卷十二)
わたつみの海にいでたるしかま河絶えむ日にこそわが戀やまめ(同集卷十五)
いかるがや富の小河の絶えばこそわが大君の御名はわすれぬ(拾遺集)
など、皆、この軌則によりたるものあり。

白妙のわが下衣うしあはずもてれわがせこたゞにあふまで、
○ 狹野茅上娘子

これも同集卷十五に載りたるにて、前の宅守と贈答したる歌の一あり。

◎白妙のわが下衣。眞白なるわが下着の衣なり。下衣といへばとて、必ずしも襦衣のことにはあらず。重ね着する時、下に着る衣服の意なるべし。別れに臨みて、紀念を、ろに贈れるならむ男女、かたみに、衣服をとりかへせしは、古の風俗なりきと見ゆ。この集に、宇治間山朝風さむし旅にして衣かすべき妹もあらなくに

「わが衣かたみにまたすしきたへの枕をさけすまきてさねませ」吾妹子がかたみの衣下にてたゞにあふまではわれぬかめやもなど、あまたある例にて、これを知るべく、大和物語にも、男女の衣をかりきて、今の妻がりいきて、さらに見えず。この衣を、みなきやりて、返しおこすとて、など見えたり。◎うしなはずもてれ吾せこ失はずに持つて居給へわが夫君よとあり。うしあはずのすは、ずしての意に見むこそかゝはめ。かゝるところに助辭をはぶくは、古の常あり。わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜あきらけくこそ、の三句も、ての助辭のはぶかれたる、こゝのと同格なるべし。もてれは、持ち有れの約れるものなり。◎たゞにあふまでに。この句は、四句の上におきかへて、解し易けむ。たゞには、正しく直ちになどのたゞにして、滞りなく、誤りなくなどいはずが如し。日本紀なる大和にたゞにむかへるをつの岬なる一ツ松あせを、この集のぬば玉の夢にはもとなあひ見れど、たゞにあらねばこひやますけり。天の河瀬々に白波たかけれど、たゞわたり來ぬ待てば、くらしみなどのたゞも、これに均し。
今、別るゝにのぞみて、わが下衣をまゐらす。やがて、恙なく還り來まして、再び、わが身にもとし給へ。それまでは、親く、肌に着けて、失ひ給ふな、必ず、持ちて居給へかし

と、一首眞摯にして巧ます飾らず、綢繆の情緒を忌憚なく暢發せり。うしなはずといひもてれといふ直截の極、いかで人肺に徹らざらむ。四五の句、音節起伏して、言詞の曲妙に相伴へり。もてれの三音一音は、一音より高くアクセントをれにどいめ一折して低きに附く。わがせこの四音ために婉約。次の七音は、上三音に高く、下五音に於て低し。一音の剩れるばかりにあふまで、にの音調おのづから緩なるを得たり。緩調聲ながうして韻曳いてやます。加ふるに倒装の辭様、その宜しきにかなひたるを以てす。一首生々の風骨を帯びて、一千年後の今日まで活動せるも、うべならじやは倒装の辭様は、感情の憤激に伴ひて、必ずおこる。巧言令色鮮矣仁的の雄渾は、實にこの辭様の與るところとなす。

少女らが袖ふる山の瑞籬の久しき時ゆおもひきわれは、(萬葉集卷四)

あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき野守は見すや君が袖ふる、(同集卷二)

春されば木がくれ多き夕月夜おぼつかなしも山かげにして、(同集卷十)

わすれては夢かと思ふおもひさや雪ふみわけて君を見むとは、(伊勢物語)

うつせみは殻を見つゝもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて、(古今集哀傷)
など即ちこれ。

わがせこが歸り來まさむ時のため命のこさむ。わすれたまふあ。

同 娘 子

これも前のごと同じ時の歌なり。

◎時のため。時のためになり、にの助辭をはぶけるなり。かゝる例、古歌におほきこと前に言へり。◎命のこさむ。わすれたまふな。今別れては死ぬべくもおぼゆれど、いかにもして、命を残さむなれば、必ず、わすれ給ふ勿れとなり。のこさむの下に、よりてなどの接續詞を加へて説くべし。されど歌の上に、さすべきものには、あらずなむ。

郎君罪あり北國へ謫せられむとす。いつまた都にかへりますらむ思へば、うつし心もなうなりゆく哉。郎に別れて、妾何ぞ一人泰きを得む。むしろ、厭はしきこの世を去らむか。死なむ命惜しどにはあらず。されど、郎の罪許されて、再び、かへりまさむ時のために、このわが命を残しおかむよ。妾は、恙なくて君を待つべし。臨の手ぶりに、馴れ給はむとも、妾あることを忘れ給ふな。君思ふ妻あることを忘れ給ふな。と。一命惜しからず。たゞ、郎のために惜し。郎を見むがために惜し。さよりも、郎に見せむがために惜し。き命なり。わが命は、夙く、郎に捧げつた。郎のために、死にた。

郎のため生きむ郎の愛わが愛なほかく相資縁せらむ上は死なむとすども死
なるべしやはわがせこがかへり來まむ時のため命残さむとこの娘子が口を
併り出でつる時天地間の萬物蕭然として皆籟をさめけむかもゆるが如き情火
は自他を包ねて殆ど方物すべからざるなり命のこさむの一句ことに奇警さな
がら天驕をさくらむこちす到底人間の聲にあらじ一句より四句にいたる一
氣に呵成してつゆも滞ることなし忽ち一頓拆して五句の情痴に入るわすれ給
ふなの一語これ蓋し言はむくとして之言はさりどころのものこゝに至りて
僅かに七音を以てこれを露す自我を没したるが如くにしていまだ全く去から
ざりき情は靈なり不可思議なりその力や廣大無邊にして人為の法則のえて律
すべきものにあらずこの娘の痴にかへりたるもとより自然に戻らざるなり
われこの歌と思ひ合して常に趣味を感ずるはかの廓文章の一節なりとす因み
にあげむ

もし伊左衛門さんわしこのやうに病うてな疾うに死ぬる筈あれど煎薬と練
薬と針や按摩でやうくと命維いてこのやうにまた櫛の齒も入れぬ髪

作者知らず

はろくにおもほゆるかもしかれごもけしき心をあがおもは
なくに。

こは萬葉集卷十五の歌新羅へ遣さるゝ使人の妻の別れに臨みてよめるあり

◎はろく／＼にれもほゆるかも はろく／＼は遙々にて杳冥の意ありおもほゆるは
思はるの轉成動詞◎けしき心 異心の意にて仇し心といはむも同じけはゆふ
け夕占ものゝけ怪などのけと均しく何にてもあれ不思議なる常に異りたるを
いふこの集をほ唐衣裾のうちかへあはねごもけしき心をあがおもはるゝに
ら玉のどしの緒ながくあはざれごけしき心をあがおもはるゝに^あを例あり源
氏物語薄雲の卷なる天變まきりにさとし世の中まづかからぬはこのけあり紫
式部日記あるけしからぬ人をおもひきこえさすとも云々のけもこゝのけに異
ることなし◎あがおもはるゝに 吾思はぬになりこの下に決して心づかひし給
ふな之意を含めたり

君もし新羅へ行き給はむには歸りのほどもおぼつかならむまことに杳々た
るこゝちのみして今より後の心細さやいかならむされど君決して心のこし給

ふかよ、妾は、幾年を待ちくゞて、一月月日を暮さむともゆめ、君を忘るることはあ
るまじきをど、埠頭にたちたる少婦の、袖の間より洩したりけむこのしらべよ、誰
しの人か、同情の涙を吝まむや、一朝一夕の別れだに、悲しからぬは、あらしものを、遠
き海外へ、旅行くらむ、郎を送る妻の、情緒けだし、言ふに、忍びざるものありしなら
む、思婦の、胸裡を、まづ、填めむは、嗟痛の、情なり、嗟痛の、情の、動くところ、何物の、礙
あらむや、一二句の、突如と、提起せられたるも、うべある、哉、磅礴たるこの、情堪へむ
として、え、堪へ、果てず、われ、知らず、この、嘆聲を、吐きたれども、には、かに、心づきて、意
を、翻し、郎の、顔色を、うかへ、ば、心安からず、或は、われに、絆され、む、恐れ、こそ、あれ、郎
に、後顧の、思ひ、おらし、むるは、どりも、なほ、さす、わが、罪あり、ごとくに、於て、か、三句に、措
くに、ま、かれども、を、以て、し、つと、めて、郎が、羈緒を、慰め、むと、す、四五句の、峭直なるは、
これが、ため、あり、われに、異心なし、郎君、願はくは、安んせよ、この、言や、山に、誓ひ、海
に、盟ひて、恥づるところ、亦、恐るゝところ、なけむ、旅行く、人、いかに、ぞ、満足せざる
を得べき、惟ふに、春の、如き、温情の、その、面上に、漲り、つらむよ、五句、あがも、はなくに
どの、み、心の、こす、などは、言はずとも、あり、なむ、故ぞ、文理、曲折して、聲調、超忽、抒情の、
最も、宜しき、を得たるものと、す。

後世の歌人もし、この境に臨むことあらば、はるゝに云々を、まづ言はむに躊躇し
て、けしき心を、云々の、情意を、第一に、提起せむと、試むならむ、さるは、情を、弄ぶもの
なり、情につれて、情を行き、まばら、くも、滞ること、なきは、由來詩の、能事、たらざる、か
きか。

車持氏娘子

さ、に、づ、ら、ふ、君、が、み、言、こ、玉、づ、さ、の、つ、か、ひ、も、來、ね、ば、思、ひ、や、む、わ、が、身、一
つ、ぞ、千、早、振、る、神、に、も、な、お、ほ、せ、ト、部、ま、せ、龜、も、な、や、き、そ、戀、し、く、に
い、た、き、わ、が、身、ぞ、い、ち、じ、ろ、く、身、に、し、み、ご、ほ、り、村、肝、の、心、く、だ、け、て、
死、な、む、命、に、は、か、に、あり、ぬ、今、更、に、君、か、わ、を、呼、ぶ、た、ら、ち、ね、の、母、の
命、か、百、足、ら、ず、八、十、の、衢、に、夕、け、に、も、占、に、も、ぞ、問、ふ、死、ぬ、へ、き、わ、が
ゆゑ、

反歌

ト、部、を、も、八、十、の、衢、も、う、ら、ご、へ、ご、君、を、相、見、む、た、ご、き、知、ら、ず、も、

一本反歌

わが命をしくもあらず。さにづらふ。君によりてぞあかくほりせし。

萬葉集卷十七ある歌集の注文に、右傳云、時有娘子、姓車持氏也、其夫久逕、年序不作、往來、于時娘子係戀傷心、沈臥痼病、瘦羸日異、忽臨泉路、於是遣使喚其夫君來、而乃獻歎流涕、口號斯歌、登時逝沒也、とあるによりて、この歌の成れるゆゑよしは、明かあらむ。

◎さにづらふ。紅くにほひやかに、うるはしきをいふ。さには、丹なり。色、紐紅葉、妹、君、漢女などにかけて、枕詞とす。◎君がみ言と。君がみ言とてなり。君がみ言葉を傳ひ持ちてなり。◎玉梓の使もこねば。玉梓は、使にかけたる枕詞、玉の梓弓の義にて、射遣す意より、彼方此方をゆき通ふ、使の枕詞とはかしたるかりといふ。後には、秋風には、つかりがねぞ聲ゆるたが玉章をかけてきにけむとやうに、書簡の意に用ゐるならされたり。たらちねを、母の意に用ゐると、おあじたぐひなるべし。◎思ひやむわが身一つぞ。わが身一つに、かにかくと思ひなやむとなり。◎千早ぶる神にもあおほせ。夫君の來らぬは、誰の咎にもあらねば、神の御所業ありと、

恨みまゐらすることあるまじきかり。われは決して恨みまゐらせざらむとあり。千早ぶるのぶるは荒ぶるすこぶるあとのぶると均しく、そのはたらきをいふあり。あおほせは、おほする勿れといはむに同じ。おほすは、俗に、罪ヲヌリツケルかどいふヌリツケルに近き意ありて、委ぬる、託するあどいはむが如し。この集に「わぎもこにわが戀ひ死あばそこをかも神におほせむこゝろしらすも伊勢物語に、一人知れずわが戀ひ死あばあぢきあくいづれの神にあき名おほせむ」などある。皆この例あり。◎卜部ませ龜もなやきそ。卜部を坐さしめて、龜をもやくこと勿れとあり。卜部氏は、大寶の雜令、凡取陰陽寮諸生者、並准醫生云々の義解に、謂先取占氏（即ち占部あり）及世習者、後取庶人、十三已上十六已下、聰聆者爲也とあるが如く、世襲して、陰陽道にさづさはりしなり。龜をやくとは、龜卜を行ふことあり。龜卜は、上古に行はれつる占卜の一種にして、もとは、支那より傳來せるなるが、後、國風の占法を如味して、普く、一般に國民の信仰を司配せりき。その法、まづ、龜の甲を、長さ三寸、廣さ二寸ほどに切り、裏面は、手斧もて、二分ばかりのうつさに削り、さて、小刀もて、表面に縦横の線を畫し、これを、左手に持ちて、右手に、細く削り成したる朱櫻に、火の點じたるをとりて、甲の破るゝまで灼き、その龜甲の火拆によりて、吉凶禍福

を判するあり、堀河百首にも「かかふやと龜のますらにとは、やを戀しき人を夢に見つるを」と見えたり。わが國、龜下の行はる、前つ方には、鹿卜法ありき。鹿卜法はた、龜下の方と殆ど同じ。古事記に、「内拔天香山之眞男鹿肩拔而取天香山之天波々迦而命占合麻迦那波而云々」とある、この證あり。さて、この句卜部ませとあるませは、坐す〔四段活〕に對する他動詞にして、下二段に活く。他をして、そこにあらしむる意義を有す。日本紀に、「起紫宮權奉安置棄驛馳奏迎佛像四軀使坐干塔内」とある、この例なり。◎戀しくにいたさわが身ぞ。戀しさの堪へがたくて、身内の痛きわが身ぞとあり。戀しくには、戀しくあるによりてと言はむが如し、後世は、戀しきにとこそ言へれ。◎いちじろく身にしみとほり。痛き苦しさが、全身に泌みわたたりてあり。いちじろくは、いちじろくにて、際たちて、その事をねぼゆる謂あり。◎村肝の心くだけで。村肝のは、心の枕詞。むらは群あり。心くだけでとは、身の痛き、胸の痛きの頂點に達して、心が粉碎せられたりとの意なり。◎死あむ命今はにありぬ。最後に垂むとせりとなり。わが命今はにありぬと言ひてあるべきを、死あむ命としも言ひたる、到底たすからぬわが命と、かねて、斷念したればあらむ。◎今更に君かわを呼ぶ。今更に、わが枕べにて、わが名を呼ぶはわが夫君かとなり。かは疑の助辭

たり。◎たらちねの母の命か。たらちねは、母の枕詞。日足禰の略轉なりといふ。ねは、刀禰かごの禰と同じき美稱あるべし。母は、直接、その子を育つる故、かくは言へるあり。後世は、直に、母の意に用ゐるからしぬ。命は、御事にて、敬語あり。母上、母君といはむが如し。かは、前句のと均しく、疑の助辭あり。わが名を呼ぶは、夫君にや、はた、わが母刀自にやと、夢うつゝのやうに疑ひ迷ひたるあり。◎百足らず八十の衢に。百足らずは、八十にかゝる枕詞。八十の衢は、蜘蛛手に筋違ひたる街路の意あり。八十は、數の夥多なるを明晰ならしめむとて、殊更に、定數を以てあらはしたるものなり。◎夕けにも占にもぞ問ふ死ぬべきわがゆゑ。わが命は、とてもたすからぬものを、おほ、蘇生することもやあらむとて、人々は、占に問ひ、夕占に問ひ、おほし給ふよとなり。夕占は、夕街頭にたちて、心に、船戸神(衢の神)を念じ、往來の人の言語を聞き、さて、その言語を神の言語とあし、わが問はむとする事に合せ考へて、可否を判斷するところの占法あり。船戸神は、古事記に、伊弉諾命の黄泉國より歸りまさむとする時、於投棄御杖所成神名なり。拾芥抄に、ふなごさへ夕占の神に物問へば道行く人よりまさきにせよ。とあるによりても、この占法の如何ありしかは知られおほむ。さて、この夕占の一種

に、黄楊の櫛もて占ふものあり、即ち、續拾遺集ある

はり櫛もつげの齒かくて吾妹子がゆふけの占を問ひぞわづらふ。

の歌以て、これを証す。後世の辻占といふもの、蓋し、その源は、この夕占にあるべし。延喜時代に、道饗祭の祝詞ありき。今亦、ほ、至るところ、道祖神塞神の齋かれあるを見るあり。占にもと別けて言へる、それと指定したるがあるには、あらじ。たゞ、おほかたの占トを謂へるならむか、死ぬべきわがゆゑは、死ぬべきところの吾なるものをの意あり。

◎卜部をも八十の衢も。卜部は、長歌にいへる龜トをさし、八十の衢は、夕占を指せり。卜部をものをはにと言はむに同じかるべし。處置格に接して、下に、他動詞を属せしむべき助辭のとは異り。人を別る、門を過く、山を行く、あとの如く、その物を、それと指定する時に用ゐる助辭あり。◎たゞ、さき知らずも。たゞ、さきは、たゞ、きに同じ。手段方法をさゞ、言はむが如き意にて、更に、そのすべを知らずとの謂あり。もは感嘆の助辭。

◎をしくもあらず。惜しくも何ともなしとのことにて、もの助辭は、抑揚におけるあり。◎さにづらふ君によりて。さにづらふは、さきに言へり。君によりては、君

のためにてなり。君を見たさによりてあり。よるは、君によりては、の條下に言ひおけるが如く、二以上のものが、一方に相歸する意ありと知るべし。◎あかくほりせし。わが命をあり。あかくの下に、とを加へて見れば、解しやすからむ。ほりせしは、思ひ冀ひたりとの意あり。こも亦、前に言ひおきつ。

この長歌には、段落あり。冒頭より、瀉下して、結末に至る。その間に、多少、解を割つべき、なきにしもあらずといへども、一首も、これ、瀕死の思婦が、枕上の、嗟嘆に、過ぎず。何ぞ、辭藻の上に成れるもの、同一視するを、要せむや。章回の、參差たる、句々の、錯落たる、蓋し、その、數なり。郎君家を去りて、日すでに隔りぬ。時來れども、かへらず。待ち戀ふれども、その、せむなし。せめて、頼めし使も、來らぬは、心も、と、ささのかきりある哉。思ひわづらふも、身一つなり。人に告ぐべく、同情なきを如何にせむ。こは、神のみ所業にあらじ。何ぞ、神を恨みまゐらせむ。こは、卜部の、司り得る、限りからじ。如何ぞ、龜をやきて、その、兆を驗せむ。戀しさは、たゞ、増りて、胸の、痛み止む時あり。身心、ともに、かえくつを、れて、病める身、今は、臨終に、ちかゝらむとす。郎君、なほ、來らず。はやわが、望絶えぬ。望絶え、あむとして、あやし、君が聲を聞く。郎君、か、あらぬか。母の御聲か。何ぞ、わが耳の、け、遠く、わが目の、おぼろげある。母よ、母よ、枕べある人々よ、な

ほ、衛に出で、夕占に問ふを敢へてし給ふか。わが命、殆どあやふし。とても死ぬべきわれ故に、占問ふ人の心、哀しやと、哀痛何ぞ、卒讀するに堪へむ。氣息奄々として、涙ながらに、つゝしりけむ。當時をさへこそおしはからるれ。今更に君か、わを呼ぶの一句十二音何等の悲涼ぞ。肺腑おのづから戦きて、そいろ齒の寒きをおぼゆ。今更になるぞかし。あ、今更に君が聲す。一目見むにも、そのかひあらず。怨恨千古にわたりて、盡くる期なからむ。われ涙もろし。この歌のこの句に讀みいたり。未だ嘗て、胸を抱いて泣かざることはあらず。怨みを啣める唇、悲しさに垂れたる眉。今をほ、この歌の上にあらはれ來るよ。

これを詞句に驗すれば、わが身一つぞの句ありて、程なく、いたさわが身ぞの句あり。いたさわが身ありて、直に、身にしみどほりを措く。百足らず以下三句、言ふところ全からず。誰が占問ふにか、言表にては、到底察すべくもあらざるは、蓋し當時枕上に在りし人の、既に感せりけむどころなるべし。舌強くありて、言を失ひ、言を失ひて、遂にたゝすなりけむ。思婦の胸中おもひやるだに、哀しからずや。はすべての抒情詩は、それかくの如くなるべし。とは言はじ。さはれ、華を摘み、藻を採するのみを以て、詩の能事了れりとなさむ。は、人の同情を率くに、意なきもの、所業あり。撲

なる辭、誦ある言、必ずしも、詩に於て排すべからむや。たゞ、神情を捕捉したるは、上は、その發展に、時間を興ふべからず。躊躇して、あらむ間に、逸し去る、恐れなきに、あらず。神情を捕へて成したる歌の、人の同情を、覓めざることを、決して無からむものをや。

反歌の一、言ふに足るべき趣味を感せじ。われは、むしろ、この歌の在らむを冀はず。長歌に於ては、下部ませ龜もなやきと、いひ、更に、死ぬべきわがゆると言ふ、こゝを以て、思ひ迫り、思ひあきらめたらむ、あはれさを含蓄し得。下部に占問ひ、衛に占問へども、なほ、君を見るべきすべを知らずと言ふに至りては、何等悲哀の情に觸るゝ能はず。誰か、かゝる言を口にし得ざらむ、必ずしも、瀕死の人を待たざるあり。疑はくは、これ、他人の歌の混入せるか。長歌の結末に、夕けにも占にもある句の、あるに便りて、後人の、猥りに、加へたるさかしらならじか。一本の反歌こそ、なかく、この作者の作たるべけれ。證跡なしといへども、試みに疑を存しおく。

反歌の二、即ち一本の反歌は、前に擧げつる「千早振る神のたもてる命をも」の歌と、殆ど相均しき情味を有せり。この集なほ、

後、せ山、後、も、あ、は、む、と、お、も、へ、こ、を、死、ぬ、べ、き、も、の、を、今、日、ま、で、も、生、け、れ、(卷四)

天ぎらひふりくる雪のけぢめども君に逢はむとあがらひわたる(卷十)
ありさりて後もあはむと思へこそ露の命もつぎつゝわたれ(卷十七)

等、同類に乏しからず。未だこの歌の私するを許されざるあり。さもあらばあれ、郎を思ふ思婦の情緒、かくの如くならむは、蓋し至り極れるものなり。わが生命惜しとにあらす。わが生命は郎のために惜し。郎あくば、われ疾に死をむをたゞ郎あるが故に、死なむ命と知りつゝも、あは惜みくゝて、今日に至りしなり。今日にいたりて、郎あは歸らず。心身と伴はず。身將に亡びむとす。今はいかにともせむかたなし。残るは、一の執着心のみ。この執着を笑ふ。あかかれ何ぞ菩提を装ふを得む。あかく欲りせし。のせしを味へ。これ過去をわらはせるものぞ。永く久しくと願へりしわが命も、今は限りとなりけるよの嘆聲、必ずや、讀者の胸を快らむ。一首、渾然として、風態、長歌と相愜はず。詞調の秩然たるは、た、瀕死の人の言ともおぼえず。恐らくは、これ異なる時のものか。長歌や、蓋し、孤なりし、からむ。

つるつ、井筒にかけしまろがたけおひにけらしを相見ざる
作者知らず

間

伊勢物語に見えたり。この歌の前文に「むかしゐるあかわたらひしける人の子ども、井の下に出で、あそびけるを、大人になりければ、男も女も、羞ぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めとおもひ、女も、この男をこそと思ひつゝ、親のあはすること、も、さかであむありける。さて、このどなりの男のもどより、かくなむとあり。

◎筒井筒井筒にかけしまろがたけ。筒井筒を、二つ重ね言へるにて、一の筒を略けること、月夜よし夜よし「あつま屋のまやの」みよし野のよし野の「わするなよあよ」などの例に同じ。かけしは、それに言ひ及したる意にて、わが身丈は、かの井筒ほどやあらむ。あどいへりしあるべし。かけまくもあやにかしこき「玉櫛かけのよろしく」あどのかけも、こなたよりかなたに、おし及すやうの意なれば、こゝのかけに均しからむ。萬葉集に「まそかみかけてしのべとまつりだすかたみのものを人に示す」とあるも、形見にかけてしのべの意なれば、こゝなる井筒にかけしの場合、合に異ならず。まろは、吾の意の代名詞。真淵は、才ある人を、かどくしなどいふにむかへ、丸といひて、才あき意に、謙り用ゐたる詞ありといひたれど、必ずしも、さるこ

とくしき詞からじ。この語源は確かからず。日本紀應神卷の「かみし大御酒うま
らにきこしもちをせまろがち拾遺集の「夏草のしげみに生ふるまろこ菅まろが
まろ寐よいく世へぬらむ」王佐日記の「ある人の子の童あるひそかにいふまろこの
歌のかへしせむ源氏物語帚木卷の「まろが侍らざらむに、おほし出でむやと聞
え給へばいと戀しかりむ。まろは、内の上よりも、母をこそまさりておぼゆれ」
どの如く、男女におしわたりて用ゐられしなりき。◎おひにけらしな。今は、長じ
たるらしきよとあり。背丈の延びて、大人びたるをいへるあれど、自らの上なるか
ら、わざと、おぼめかして、かくは、けらしの疑辭を用ゐたるあり。否は、感嘆の助辭に
て、哉に於けるかに均し。さて、この一句、普通本には、過ぎにけらしかとあれど、今は、
藤井高尙の塗籠本と眞字本によりて、かく訂正したるに従ひおきつ。◎相見さ
るまに。君とわれとしばし相見ずして居りし間にの意なり。この句も、普通の本
には、妹見ざるまにとあれど、塗籠本には、相とあるよし、高尙の言へる、正しくおぼ
ゆれば従ひぬ。うちつけに、その人に向ひて、妹見ざる間にと言はむこと、おだやか
なりとも思はれぬば。

幼遊びの偲ばしさよ。共に、井筒の邊にむつれ合ひて、わが身丈は、かの井筒ほどよ。

君が身丈は、かばかりあらじかと、はかき事に耽りたりしも、思へば、昔とかりに
けり。遠く相別れて、年月をわたり、はからず、また、こゝに相會ひたり。幼おもかけ、
今は、た、趁はむによしも、あらず。君は、いたくも、大人びし哉。われまた、大人びわれ
る。あらむ。かのをりは、井筒ばかりの身丈ありしを、今は、かばかり生ひのびしよ。君
は、忘れ給はざるべし。昔の契りを、われは、希へり。今より後の事。たとひ、如何あらむ
さはりありとも、君を棄てむや。君を棄てじと、情味津々として、掬すれども、尽きず。
春を、知り、そめし、この、少年、少女の、間には、ゆるが、如き、情熱の、相通、せるもの、ありけむ
や。疑ふし、二人の、幼時、は、圓満、ありき。二人、あほ、生けり。何ぞ、その、缺陷、を、期せむや。
人いまた、嫁かす。一人いまた、娶らす。希望は、若し、生命は、若し、人世の、樂み、何者か。
れに、加へむ。再び、相會ひて、そゝるに、幼時、を、追懷、すれば、影の、如く、幻の、如く、相互の
胸に、浮ぶもの、あり。今にして、は、じめて、その、戀たるを、知りぬ。戀や、純あり。いまた、汚
されず。いまた、無情の、世の、魅入る。ところと、あらず。歡樂、極りて、歌、自然に、成る。一首
典麗にして、詞調、爽快なる。蓋し、自然の、致すと、ころ、いづれの、隈に、か、些の、悲哀、を見
出し、得む。一二句の、婉、ある。四句の、楚、あるに、人世の、春も、こもり、たらずや。
かけしの一語、打開きには、かけ比べし。の意とも、思はるべけれど、決して、さにあら

いとけあき時、ぬげたにくらべて、いかほどにあらばなど契りけるるべし。と言へる、穿ち過ぎたらすや、如何ほどにあらばとせむかくせむかと、幼心に契らるべしや、は、四句過ぎにとあるに執して、井上文雄の、

こは、井筒にかけし長だちの、井筒にも、今は過ぎて、高くおれるよしあり。

と思ひ定めたる、理りげにも聞ゆれど、おは、情趣を辨へざらむが如し、井筒より、身の過ぎたりと言へり、とて、真淵のいはゆる、老すけたるほどの情、あらはれ得べきにあらず、既に、青年となりつる時の作あるを、記せざるべからじ。次のけらし、か、爲家本の如く、けらしもとあらむは、甚だ劣れり。かの一感嘆辭、苟且に、看過すること勿れ。この音のひいき、何とはおしに、對者の同情を惹起すらむの力あり、強く言ひ懸けたる、就裡無限の妙致を認む。五句、妹とある本によりて、真淵の、井もに言ひ兼ねたるを、らむと言へるは、甚だ甚だ、不合理ありや、例に無き、謬見ありと謂ふべし。この歌の時代と、この歌の風格とに、注目せざりけむよりか、幽齋の「妹は、わがものと領じての言かり」と説きおしたるは、た、姑息の見解ありけり。

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君あらずしてたれかあぐべき。

作者知らず

こも亦伊勢物語に載りたるにて、前の、かへし歌あり。この歌の後文に、「かくいひく、て、つひに、ほいの如くあひにけり」とあり。

◎くらべ來し。振分髪。幼き程、相共に、長さを較べ來りし振分髪あり。振分髪とは、髪をはちちて、後にたれたるをいふ。もとを結ばずして垂るゝおれば、おのづから髪、兩つに分かるゝものあり。古、男女とも、小兒の時には、同じやうなる振分髪なりき。さればこそ、くらべ來しとは言ひたるおれ。さて後、十五六歳にもなれば、女は、振り分けたる髪を束ねあぐるなり。◎肩過ぎぬ。その振分髪、今は、肩過ぐるまで延びたりとあり。この、一句、年頃な少女の、さ、婉曲に、おらはる。◎君あらずして誰かあぐべき。君の外、わがこの髪をあげさせて、人とおらすものは、あらじとあり。誰かとしも言へる、殊更に、装成したる疑問の辭様あり。髪をあぐるは、萬葉に、「橘の裏の長屋にわがいねしうちりは、おは、髪あけつらむか」などあるが如く、人妻とならむほどのわざあり。必ずしも、人妻とあらざれば、髪あげがたしと言ふには、あらず。竹取物語に、「人にありぬれば、髪あげさせて、きすすきちやうのうちよりも

出さずとあるは、たゞ成人したればの意あり。されど、こゝは、おほ君こそわが夫を
れ。君ならでは、誰にか、この髪をあげさせむの意に見むを適へりとあす。
うれしくもおほせおこせつる哉。幼遊びの昔偲はしきは、君ばかりにあらす。妾は
た、同じ思ひになむ。井筒にかけしまろがたけとの仰せ承るにも、ゆくりなく、胸に
うがふは、振分髪の昔なりけり。井筒の邊にて、籬の下にて、較べ合へりしわがこの
髪の今は、弱肩するまで、たけ延びたり。大人びつと見給ひしもうべなりけり。あ
昔の契いかで忘れむ。誰しの人も、言は言へかし。わがこの髪をあげさせむは、君の
外にあらじものを。妾が心は、はやく定れり。ゆめ思ひわび給ふちよと。女は、女の情
致を有す。昔の振分髪今は、たけある黒髪あり。たけある黒髪誰がためにか、櫛らむ。
異人に會はせむ。母の思召しには、よし、背きまつらむども、わが頼む人は、二人あら
す。一人の愛人。おほわれを忘れず。歌ありわが許に來る。羞態依然たること難けむ。
臉上の紅は、鏡面の知るところのみ。黙してあらむは、本意にあらず。すおはち、意を
決してこの歌を作る。初句のくらべこし。何等調謬の言を。男は身丈をいひ。女は髪
をいふ。髪をいふ。これ、女の情あり。女情の粹は、たゞこの黒髪に纏りつきぬ。君あら
ずしてと言ひけむをり。この少婦や、いかに面正したりし。この歌を得たる人の満

足こそさるべかりしからめ。五句のあぐべき少婦の嬌痴、そのまさに然らざるを
得ざりしからむか。歌は、必ずその人に伴ふ。これを真かりとせよ。この歌、到底浮薄
女子の言たること能はじものを。

この五句塗籠本には、撫すべきとせり。藤井高尙、これに執して、更に竹取物語を引
證し、髪をあぐるは、必ずしも人妻とありたるしに、あらずと言へりき。或は然
らむ。然れども、三句の肩過ぎぬを吟味して、思ひを、一首の情趣に趨かすれば、あぐ
べきの當に相應すべきを領せむ。撫すべきからば、肩すぎぬる髪を待つを要せじ
ものをや。契沖の

髪も、肩過ぎて、おがくありぬれば、君からでは誰か、手をふれて、この髪をあげむ
といふ意あり。
と釋したる、むしろ過ぎたり。夫の手して、髪はあぐべきもの、に限るべからじ。しか
も、ひたすら、その人に倚頼したらむ。青春の情熱は、實際以上の言を、あすを許すべ
きあり。君からずして、誰かと思ひ入りつる心よりこそ、この言は出でしからめ。

○ 作者知らず

月夜よし夜よし。人に告げやらば。こてふに似たり。待たずしも
あらず。

これは古今集卷十四の歌あり。

◎月夜よし夜よし。月夜美し月夜よしと重ねいふべきを略きたるものあり。か
の「あつま屋のま屋のあまりに」など、同格に成れり。◎人に告げやらばこてふに
似たり。人の許に告げやりしからば、たい告げやりしばかりにても、來給へといふ似
たりとの意あり。人はいふまでもなくわが思ふ人。こてふは、來といふの約言あり。
ここのみにて、命令の意あり。來よ來いといはむに均し。◎待たずしもあらず。待
たざるにもあらず。待タナイデモナイなり。その人を待ち戀ふるがために、月夜よ
しと夜よしと言ひやるからねど、さりとて、まんざら、その心の無きにもあらずと
いへるあり。

今宵の月はよからずや。げに今宵の月のよさと、文して言ひおくらむには、かの人
は、何とか思ふらむ。さばかりの言の葉も、來給へ訪ひ給へと、言はむに似たるもの
を、かの人には、たしか思ひとりて、或は訪ひ來給はむもは、かれず。それよ、訪ひ來給は
むには、いかにうれしかるべきありやうは、待ち戀ふる心の、あきにしもあらざる

ありと、これいほゆる本歌取りの古をあして、またそのよろしき得たるもの、即ち、
萬葉集卷六、ある。

わが宿の梅咲きたりと。告げやらばこちふに似たり。散りぬともよし。

の詞意を籍りて、まかも、その上に位せるものあり。月を以て、梅に代へたるのみは、
さまであらねど、月夜よし夜よしと、うち重ねたる句法は、到底後人の企及すべき
にあらじ。さもあれば、作者の眞伎倆は、いまだそこには、顯れたらず。五句にい
たりてこそは、しめて、一首を活變して、情味の津々たるを、致さしめ、たれ、原歌の五
句の如きは、もとこれ、漫に措ける言詞に過ぎず。いまだ以て、一首の生命を維ぐと
は、あさざるあり。この歌のは、然らず。この句あるが故に、この歌あるあり。この句あ
くば、この歌や、存在に値する意義を、亡び了らむ。鐵を練りて、金と化すと、は、それ、か
くの如きと言ふか。四句のこてふに似たりも、今は、この歌の、所有に歸しぬ。待たず
しもあらずの妙句は、天この作者に、私せしあり。さばれ、この生命ある五句といへ
ども、この歌を、離れては、どても、その妙趣を、保有し能はじ。この句の妙趣は、この歌
の司るところ。月のさやかあるに、人の戀しさ、いやまさらむこそ、恒情かれ。待たず
しもあらずは、蓋し、日を経たる思ひあり。月夜にのみとは、限るべからじ。まかも、月

夜に友をもとむ。友をもとむるに乘じてこの思ひはしめて外に露れたり。一首の結末に及びてこの句の措かれたる豈うべからずとせむや。

さるにてもこの歌の四句に疑ひを挿みて定家眞淵あとの一首の意をあらぬ方に解きかしたるこそいふかしけれ契沖は、

かゝる夜をいたづらに過ぎず來ませと告げやらは人の心をはかり見るにさためて來むといふべきに似たりわれも亦この良夜には待たぬにしもあらねばいざ告げやらむといへるにや侍らむ。

と言ひ眞淵も亦こてふのこを來むの意とあし、

かしこにもこの夜おもしろきにいざあはれてやがてまからむなど言ひこし給ふに似たりと人して告げやりてその使のまだかへらぬほどのひとり言あるべし。

と言ひき何ぞまからむ來は加行變格の命令格ならずや來むの意など如何にすども認めらるべきか似たりの一語をも何と見おしけむこれ一首の眼目ありゆるかせに看過すべきにあらじものを三句の告げやらはを眞淵また告げやればとあるべきをうつしあやまれるにやと疑ひたるこれ何とぞや告げやらは

はもとより將然あり將然なるが故にこそこの歌の生命はわれ既に告げやりたる後の獨語からむには何等の趣味をか包含し得べき告げやらはいかにそは來よといふに似たりとは言へるぞかし歌の鑑識は言表にのみ留るべけむや景樹の解可し古き古き顯昭の釋最も可し。

本歌取りの歌は古今集以後時代を経るに随ひてますます饒多あり古を宗とする必ずしも陋ありとはあさず然れども自己の存在を失ひてまで古に泥まむは策の得たるものとおぼえず自己が思想の範圍内に他人の思想を活かせむは可し他人の思想に黏して遂に他人の思想を出づること能はざるは決して自信あるものゝ喜ふべき手段にあらじ本歌取りは本歌を取るべし本歌を取らば自己が思想の火爐に投じてこれを鎔盡せざるべからず鎔盡せざるの本歌はいづこまでも本歌そのものゝ存在を意味すいかにぞこれをしも自己の思想もしくはその一部分と見るを得べけむ自己の思想たらしめむはたゞその火力にありて存す火力の熾んあるをいたさむはまたその燃料にありて存す燃料置しからむにはその功や空しからむ危きは爲すべからず自己を守りて自己の發展につとめむこそ詩に忠あるものとは言ふべからめ。

天の原ふみごころかし鳴る神もおもふ中をばさくるものは。作者知らず

これも同集同巻にあり

天の原 大空をいふ原は張る腹をさく語源を均しくして何にてもあれ廣く大あるところを謂ふあり原野とのみは思ふべからず萬葉集には庭の露原といふ語さへあるあり。◎おもふ中をばさくるものは。相思ふ二人の中をば隔で得るものか決して隔て得じとありさくるはどはさくるのさくるにして割くと語源を均しくせり。一のものをも二以上からしむる意あり。

猛烈なる破壊力を有するもの雷神に加くはあらず天上天下何物かこの神の怒りに觸れてその性を亡ひその位を移さるべき然れども相思ふ二人が中のみはいかにすども離間し得ざらむ二人が中は鯨膠もて接けるが如く全く情の融合して一團と化りたるものあればかりこの歌この意を抒ふるにあたり擬人法を用ゐて雷を有情なるものと如くすために一首の力を増ししこと尠少ならず二句のふみごころかし鳴る神の猛烈なる動作をあらはして餘蘊あらず三句のも

文字かりそめに措けるものとは見えすこゝにありては殆どすらもデアツテサへモの意を有せり鳴る神といへども亦ほ且しかりまして他のものをや人力の如きもどより恐るゝに足らずとの餘情もたゞこの一音のために含蓄し得たるなり助辭の配置豊ゆるかせにあすべけむや四句のは文字はたその處を得たりたどひ他の物を離間し得むともこの二人が中ばかりはどの餘意を認むるに難からぬはまたこの助辭の妙用ありけり。

五句口惜しくも聲調の宜しきを失せり字乎たる這個の決斷は厲勁ある句勢と超忽ある聲調とに倚賴せざるべからず今この歌を吟哦するに結末にいたりて頓に聲弱く勢折けて掌中の何ものかを失ひたらむこゝちするを如何せむ蓋しこれさくるに於ける音のためのみこれをしも改め代ふるにさけむを以てせば聲調は全く整ひなむぞさくるの音譜は一音ごとに低きにつきさけむの音律は一音ごとに高きにつくアクセントはむ音にありこゝを以ての故にぞ一首掉尾の勢あるを得む歌に於ける音調の要は事新しく言ふを須るじまかもこれを説くに筆を以てしては到底至極せむことばつかかしこの歌のこの句に於ても亦然り志あらむものは高吟百番せよ庶幾くはその妙致を悟り得むか古今集

の註釋書にして古往今來こゝに説き至れるもの絶えてあらず。たゞに古今集とのみといはじ。幾多の歌學者の研窮は、いまだこの境に達せざるあり。をちあきわれのこの言を成す。蓋し止むを得ざればあり。

偽のなき世ありせばいかにばかり人の言の葉うれしからまし。作者知らず。

これも同集同卷にのれる歌あり。

◎偽のなき世ありせば。偽といふもの、更に無きこの世にてあるならばとあり。◎人の言の葉うれしからまし。わが意中の人の言ふ事の、いかに喜しからむにとあり。この下に、然れども實際偽おほき世あるこそせむかたあけれをといはむが如き意を含めて見るべし。

われはよく人を信ず。人の言れに向ひて、言を巧みにするものあれば、忽ちわれを失ひて、その人に纏る。しかも、今日までの經驗によれば、人言は、決して、あてにあるものにあらざるあり。もし、この世に偽あるもの、なからむには、いかに心の安からむ。ばた、人言の喜しからむ。さて、も、ち、は、虚偽の、この世に存在せらむ上は、そのか

ひあからむ。人言、今は聞くを要せずと、人言、すでに頼むべからず。われ、何れの邊に向ひて、か、淨樂の域を、覓めむ。あ、人、世は、遂に、偽の存在を拒み得ざるか。然りたしかに拒み得ず。慰藉の聲、同情の涙、それをいかに、わ、か、た、む。虚偽の慰藉は、天下に充てり。虚偽の同情も、天下に充てり。頼みても、頼みがたなきもの、豈、た、い、に、意中の人の言のみ、からむや。この歌、句々率直にして、ま、か、も、苦悶の風態あり。偽の無き世ありせば、と、言、へ、る、疾、く、に、偽の存在を認識し、ね、れ、は、あ、り、意、志、は、意、志、と、し、て、い、づ、こ、ま、で、も、そ、の、存在を認め、情は、情として、い、づ、こ、ま、で、も、また、そ、の、絶無を、を、冀ふ。心的機能の靈なること、由來、か、く、の、如、し、い、か、ば、か、り、の、一、副、詞、は、切、ち、る、情、に、率、ら、れ、て、出、で、ぬ、偽の存在を認むるに、隨、ひ、て、い、よ、く、こ、の、嘆、聲、を、た、か、め、む、こ、と、必、せ、り。人、間、は、到、底、か、く、の、如、き、の、未、練、を、脱、す、る、こ、と、能、は、さ、る、か、り。吟、後、な、は、餘、情、の、趁、ふ、べ、か、ら、ざ、る、も、の、あ、る、蓋、し、こ、れ、が、た、め、の、み。

六帖に、

世の中にたえて偽をかりせば頼みぬべくも見ゆる玉づさ。

とあるは、頗る、この歌の想に類すれども、詞意淺薄にして、調子はた諧和せず。古今の偽と思ふものから、今さらになが誠をかわれはたのまむ。

のみぞ僅に、これが匹とするに堪ふべき。

月やあらぬ春やむかしの春をらぬ。が身一つはもこの身に。し
て。在原業平

こは古今集卷十五に載れり。この歌の詞書に、五條のきさいの宮の西對に住みける
人に、ほにはあらで、ものいひわたりけるを、正月の十日あまりになむ、外へかくれ
にける。在り所はき、けれど、之もの言はで、又の年の春梅の花さかりに月のお
もしろかりける夜、去年を戀ひて、かの西對にいきて、月傾くまで、あばらかる板敷
にふせりてよめる。となり。五條后宮は冬嗣の女順子とまをす。住みける人は誰に
かわらむ、今知るべくもあらず。或は二條后高子の若くおはしつるほどの事にも
やと言へり。それも、にはかに信すべからず。景樹は、この詞書は、後人のわざ。伊勢物
語に作りあせるよりのさかしらあり。とて、詞書をはづして、この歌を見むにも、あ
は戀の歌たること、うづあしと論じたりき。

◎月やあらぬ春やむかしの春をらぬ。月は、昔のまゝの月をあらぬやは。春は、昔の

まゝの春をあらぬやは。いづれも、昔ながらにて、今にいたるまで、すこしもかはれる
ことあしとあり。初句の月やあらぬは、月や昔の月にあらぬといふべきを、略した
るなり。二句に、春を重ねたるにて、おのづから、その然あることを知らしむ。◎わが
身一つはもこの身に。して、われ一人は、もこの身に、して、もこの身に、あらず。全く、
境遇の變りつるよとあり。身にしての下に、含蓄したる餘意あり。

朦朧たる春月、さながら、昔のには、ひあり。身邊の風物、均しく、皆昔をかたれども、再
び昔にかへさむやうあし。わが身一つは、何故に、かくは、境遇の變りにけるぞ。むか
し、この對屋に相會ひし人、今果して、いかに、むかしの歡樂、又、趁ふべくもあらず。あ
あ止みあむ、わが心を、ましと、四邊の風物に、興を起し、興起りて、懷を傷ましむ。月も
の言はず。春、何ぞ心あらむや。しかも、春月を、捕へ來りて、わが身に、たくらぶ。感極り
て、痴に入ること、かくの如き、由來、人間の、眞面目たり。わが身を、啣つもの、必ず、相手
を、覓むるは、人の、常に、經驗する、ところならむ。直衣の袖を、被きて、梅さく宿に、假寝せ
りけむ。若人の、面貌、一首の、面に、躍如たるを、おぼゆ。悲涼の、調子、優長の、風骨、蓋し、技
術の上に出でたり。まづ、月を、提したるは、まづ、月を見れば、なり。形あるを、先に、し、
形なきを、後に、す。詠物の、順序、秩然たりと、いふべき。一二三の、句、業平、獨擅の、藻思、

流暢にして滞らず。餘韻迢々たり。四句のわが身一つは何ら悲婉の言ぞはの助辭。こゝに活きてたいわればかりはの意を明晰からしめたり。わが身一つの秋にはあらねどの生氣なきが比ならむやは五句もとの身にしてとのみ言ひさしたる。感情の激越せしが故ならずとせむやはじめはすはち惆悵たりき上句の言ふとろため懇切くり返して嗟嘆を長うせり終はすはち怨悱せるなり下句の言ふところおのづから沈痛口や意に従はざりけむ緩あるもの忽ち急に切迫して餘意を殘せり。餘意餘情尋ねれどもおほ及び易からむや。

風體抄にこの歌を稱へて、

月やあらぬといひ春やむかしのちどつゞけるほどのかぎりなくめでたきあり。

と言へる宜なり。古來この歌を襲ひて詠みたる春月の和歌殆どその數を知らず。

梅が香に昔を問へば春の月こたへぬかけぞ袖にうつれる新古今集

梅の花たが袖ふれしにはひぞと春やむかしの月にとはいや同上

梅の花あかぬ色香も昔にておなじかたみの春の夜の月同上

おもかけのかすめる月ぞ宿りける春やむかしの袖のあみだに同上

梅が香も身にしむ頃は昔にて人こそあらね春の夜の月新勅撰集

これらその一斑あり。いづれも梅を點せるは詞書に執したるよりのわざあるべし。

貫之が古今集序に於ける心あまりて言葉足らずの評言は決してこの作者のうくべき限りにあらず。業平の歌や端睨すべからずあるものは豪邁あるものは跌宕あるものは伉爽あるものは婉深風態また一々にしていまだ嘗て同規を蹈みたることあり。家集一卷これを證して餘りあらむ。蓋し人麿以來の一人たり。貫之が輩何ぞ驥尾にだも属し得むや。

僧正遍照

わが宿は道もなきまであれにけり。つれなき人を待つとせしまに。

これも同集同巻の歌あり。

◎道もなきまであれにけり。門を出入せむ道の形もなくあるまで荒れに荒れたるよどあり。までは物事の進みゆく果をさしていふに用ゐる辭。◎待つとせし

まに。待つとしたる間になり。

來むとの契り今はいかにせし。さりとは無情の人あるかを。その無情の人を、われは愚にも待ちくたりしよ。今日は明日はと、空だのめしてありし間に、見よ、わが住む宿は、行きかふ道もあきまで荒れはてたりと。これ、一首の意あり。築地の垣、見るかげもかく崩壊して、庭の草、くも手に亂れ合ひたる宿の板敷に、物思はしげある人の、悵然として立てらむ趣、あらはに、一首の面に見えわたらずや。二、三の句、目前の光景にして、即ち結果たり。光景、まづ目に入る。故に、これを叙すること。早し。四五の句は、光景につきて起したる感興、即ち結果を來し、原因あり。つれあき人は、宿の荒れたる後にこそ斷定したれ。今日かくと待ちつる間は、いまだ以て無情の人とは思はざりしあり。まかもあは、つれあき人を待つとせし間にと言ふ。後なるを前に及ぼし、部分によりて全體を推斷す。この大膽放縱は、感情の憤激に、つるゝこと、必然たり。誰人もかゝる事あらむ。待つとせしの一語、苟もせず。待つとせしは、自らその暫時からむを期したれはなり。今日こそは、今日こそはと、待つこと重りて、日隔り月過ぎたり。豫じめ、その待つ間のかくは、永しと知りたらむには、何を以てか、かの無情の人を頼めむ。さも知らずして、今日に至りし口惜しさよ。これ、この

餘情は、この七音のために、浮動することを得つ。豈、超凡の手腕に成らずと言はむや。萬葉集卷十一ある。人もなき古りにし里にすむ人をめぐゝや人の戀に死かせむ。は、この歌と相並びて、共に特殊の趣味を有てり。

ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける。

作者知らず

源氏物語桐壺卷ある。かくてぞ人はどはかゝるをりにやと見えたりとある條の奥入に、この歌を引用したれど、その書名をあげざれば、誰が歌なりとも、今、知ることを得ず。奥入は、行成卿の末ある宮内權少輔從五位上伊行の作ありといふ。

◎ある時は、人の存へありし時はなり。◎ありのすさび。在るに乗じて、在るにまかせてあごいはむほどの意ある造語あり。すさびは、すさのをの尊すさまし、吹きすさぶなどのすさと同語にして、荒び進みゆく趣あり。故に、こゝあるは、人の存在してありと、信じ居る心より、おもふまゝにふるまひ荒ぶる意あり。換言すれば、あるにまかせて、わが心のまゝにたちふるまふことあり。◎なくてぞ人は戀しか

りける。その人の世に亡くありたる後にかへりて、その人の戀しくありまさるとあり。

人のこの世にいまそかりし時は、よろづ心のまゝにふるまひて、わが身に加へらるゝ親切をも、更にものゝかずと思ひたらず。かかゝ、面憎きやうなるこゝちして、つれなくのみもてあしたりき。その人今は亡しく、思へば思ふほど、おほくの罪を作れりしよ。かの人の情は篤かりしものを、今更に思ふも、愚しきわざがら、そのをりの言の葉を、胸に浮び出で、戀しさの限り知られぬ哉と、桃の天々たるはしめより、春雨の情を解すべしとせす。處女の世情に於けるは、た然らむ人のたまゝ、愛を餽るものありとも、つれあしづくりて、とりあはざらむは、決して認めがたき事實にあらす。まかも後に至りて、追想を逞くし、われ知らず、不覺の涙に沈み、未練の涙に咽ぶは、必然あり。豈たゞに、處女の然るのみあらむや。心的變移の測るべからざる、識者を待ちて知るべきにあらじ。人心は、由來わが儘なり。放縱あり。かつ氣の毒を感じて、かつ人を弄ぶ。理性も、その間に力を加ふる。こと能はざるあり。靈妙不思議あるは、そもゝ人間の心情あらじか。この歌や、蓋し、人情の機微を抉剔せるもの。詞調は、た、典雅婉麗にして、ちりばかりの埃蓋を止めず。恰も、

秘篋を開きて、白銅の鏡を取り出したらむが如し。二句のありのすさび、何ら巧妙の造語ぞや。これに最も得意ありし人麻呂すら、なほこの上に出づべきものは、有せざるあり。簡潔の妙、古今獨歩とぞ稱へつべからむ。まかも、この語を珍襲せるは、古來、

花鳥の色にも音にもしのぶやとありのすさみもあらばあらまし。(中務内侍日記)

ありのすさびのにくきだにありきのあとは戀しきにあかで別れしおもかけをいつの世にかは忘るべき。(源氏盛衰記)

等、その數甚だ多しとあさす。これむしろ、奇なりと謂ふべし。古今六帖の

ある時はありのすさびに語はで戀しきものと別れてぞ知る。

は、或はこの歌の訛れるものか。はた又、この歌の、かへりて、六帖のより訛傳せるか。そはとまれ、歌がらの甲乙は、柄として、火を見るよりも明かあらむ。

三句にて切りたるを、更に再び五句にて切る。こと決して、渺き例にあらず。まかも、凡手をして、そを敢へて、せしめむには、必ずや、腰を折らむ。句々の緊束して、些の弛みもあさき。この歌の如きは、その類甚だ夥しとあさす。蓋し、これ、新古今風の、よりて、基

け、る、と、こ、ろ、た、ら、む、か、萬、葉、以、外、の、調、子、あ、り、け、り。

有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし。 壬生忠岑

古今集卷十三に載れる歌。

◎有明 月の残りたるまゝ、夜の明けゆくほどをいふ。こゝは有明の月の意と心得べし。◎曉ばかりうきものはなし。 曉ほど憂くつらくおもはるゝものはあらずとなり。つらくは無情の意ばかりは、こゝにては、程の意あり。必ず否定の語を以て結ぶ。分量を示すばかりは、混同すべからず。

過ぎつる曉、情人と別れともなきを別るゝとて、有明の月の夜の明くるも知らずがほなるが、何となく、面憎くも、つれなくも、見えたりしより、曉といふものほど憂くつらきもの、この世にはあらず。今あほ、曉ごとくに思ひ出づるよと。これ、一首の意あり。當時の残月、いかに、つれか、しと見入りたりけむ。心的動作の一面は、まこと、かゝるものあるべし。鶏を恨み、鐘を恨み、夜の短きを恨むは、離別を悲しむ自然の動機のみ。狂痴は到底、この境に於ける男女を離るべからじ。戀愛は、人をして魯

愚からしむ。老者も、小兒と異なるかきあり。分別や、智量や、在るが如く、無きが如く、われ、遂に、われと、伴ふこと、能はざらむ。この歌、二三の句、最も、巧緻、見えしの一語、苟もせず。四五句の、誇張、その功、空し、からずして、多少、人の同情を率く。

この歌、古來、その解を一にせず。或は、不逢戀の歌とし、初句を、つれなくの枕詞、即ち、有明の月の如く、の意に解したる、契沖、眞淵、景樹、彦麻呂、長秋、衣川、御杖等、これあり。或は、後朝戀の歌とし、初句を、實在の月と解したる、顯昭、定家、履軒等、即ち、これあり。果して、かばかり、難解の歌か。わが目は、この歌に臨みて、別に、意義の不明瞭を感せず。また、言語の不足をも、濫晦をも、感せず。當に、顯昭、定家らの釋したるが如く、か、る、べ、き、あ、り。初句を、枕詞とせむか。二句の見えしを、如何せむと、かする。逢はずして、歸るに、別れ(名詞)の語あるを得むや。別れある一名詞は、相會ひて、後にこそ、生じ來べけれ。たとひ、六帖に、來れど、あはす、ある題の下に、この歌をおきぬとすとも、そは、撰者その人のふつゝ、かのみ、歌を、解くには、歌を見るべし。歌を見ずして、いかでか、その解の適切を期し得む。中井履軒ひとり、専門以外にして、鑑識の明ありき。その著百首贅々に曰く、

有明ト云ヒテ、即チ、月ヲ指スナリ。故ニ、下ニ見えシト承ケタリ。コノ、句、實、景、ナリ、冠

解(枕詞)ニアラズ。……つれなくハ月ヲ指シテ云フナリ。月ヲ妬ム意アリ。女ノつれなきニハアラズ。……別れよりトイヘルニテ、其後月數ヲ歴タルコトヲ知ルベシ。コノ後曉ゴトニコレヲ思ヒ出デ、月ホド腹ノ立ツ希代ナル物ハ世ニナキゾトナリ。

と何ぞその言の卓越せる契沖の二月の貌の明くるも知らぬ心にして、それにあはずしてかへす人のつれなき體を相兼ねてよめるあるべしといへる姑息の見解と孰れか優れる彦麻呂の二三句のつゞきもの足らぬこゝちせり」とて有明のつゞきなくとありしを、つれなくと書き誤れるにかと疑ひたる片腹痛し。一首の風態格調を如何せむとのさかしらわざを眞淵の、

有明の月の夜は明けぬれど、おほ面つよくざりげあくてあるものなれば、人のつれなきをいふ冠辭におきて、下に曉といふ言を合せたるを、後世の巧みなり」と論定せるは、偏りたり。冠辭におきたるからずとして、解しかほさば思ひ半に過ぐるものありけむに、家隆定家爲家皆均しく、この歌を推して古今集戀歌第一の秀吟となせり。そは、何を以ての故にかありけむ。定家は特に、
つれなく見えし、この心にこそ侍らめ。この言葉のつゞきは及はずえんに、をか

しくもよみて侍るか。これほどの歌ひとつよみ出でたらむ。この世の思ひ出に侍るべし。

と言へり。これ溢稱のみ。古今集中豈この歌以上のもの尠からむや。この世の思ひ出とて、かばかりの歌に甘んせむは、自屈の最も甚だしきもの。上に上あり。末に末あり。何を詩美の窮りあらむ。期するところを限るべからず。限りて後には如何にかすべき。

されど、この歌必ずしも、すつべからじ。まこと定家の言ひけむやうに、つれなく見えしの巧緻は、いづこまでも巧緻として、これを玩味せむよ。詞調はた秩然、毫末の亂れもなく、分厘の弛みもあしと、言は言はれむ。いまだにはかに、人情の機微を捉へたるの故を以て、これを稱すること能はざるのみ。

作者知らず

君。や。來。む。わ。れ。や。行。か。む。の。い。ざ。よ。ひ。に。槇。の。板。戸。も。さ。ず。寐。に。け。り。

これは古今集卷十四の歌あり。

君やこむわれや行かむ。君の方より來給はむか。それとも、わが方より行かむか
とあり。◎いざよひ。たゆたひためらひあごいはむが如し。心の決せずして躊躇
するをいふあり。十六夜をいざよひといふも、月の空にたゆたひてやすらふやう
に見ゆるより、出でたる語あり。古今六帖に、この句やすらひにとあり。詞の上は、劣
りざまあれど、意は異なることなし。◎横の板戸もさゝす寐にけり。横の板戸をも
鎖さずして寐ねたりとあり。板戸のものは、をもの意、横の板戸も、その外のものも、
かくくしたりとの意にはあらず。さりとして、又抑揚におけるのみにあらず。サへ
モの意に聞きあざるべし。ざらすのす、後世あらば、でとあるべきところ。
今宵は、君の來給はむか。それとも、こなたより行きてみむか。いかにせむくんと躊
躇しつゝ、遂に、夜を更し、横の戸をも鎖さずして、闇に入りぬ。そは、もし、君の來給は
むかとのめつる心の、あきにしもあらねばなりと。この歌、蓋し、萬葉集卷十一の
紅の裾曳く道をおきてわれや通はむ君や來まさむ。

より、脱化し來りたるもの。言詞温雅にして、すこしも巧を衒はず。いまだ、自然の境
地を失はざるものなり。櫛笥の上に頬杖つきて、低迷の思ひに堪へざりけむ人の
風半、髣髴として、紙上に躍る。君や來むわれや行かむを、一の名詞格とし、直ちに、の

の助辭を以て、これを稟けたる方を入れずして、まかも、人を驚すに足る。更に驚く
べきは、三句の五音あり。いざよひに。一語の中、多少の時間を含蓄して、いづこと
もあく氣のもめたらむ風情のこもれるをおぼゆ。四句のもの、字點し得て適切。こ
れにてこそ餘韻をおぶれ。他の文字を以て代ふべくもあらずらむ。五句のすはた、
六帖の如く、でと言はむには、語呂といははりて、舌滑かならざるべし。後撰集の

山里の横の板戸もさゝざりきたのめし人を待ちし宵より、
は、たしかに、この歌の模倣にして、しかも、赤裸々たるの感あきを得ず。

素性法師

そ、こひ、なき、淵、やは、さわ、ぐ、山、河、の、あ、さ、き、瀬、に、こ、そ、あ、だ、波、は、た、て

これも同じく、古今集卷十四に載れる歌あり。
そこひなき淵やはさわぐ。奥底もあく深き潭の水は、さわぐものか否、決してさ
わかじとあり。そこひのひは、方の意ならむか。底は、海河の水底をのみいふに限ら
ず。凡て、上下四方、いづれありとも、限みあく、深く遠き果をいふ。天雲のそぎへのき
はみなどのそぎも、またく、底と同意ありとす。淵は、水の常に堪へて、淀めるところ

をいふあり。◎あさき瀬。淵の反対にて、水のまばしものと、まらず。さらりと岩
ばしるところをいふ。◎あだ波。せむもあき波、つまらあき波などいはむに同じ。
あだは、凡て、何にても、軽々しく、更に、根底あきことをさしていへり。かたみこそ
今はあたられのあたとは異れり。こゝなるは、濁りてよむべし。
試みに、かの碧潭を覗め、水常に静平ならずや。また、試みに、岩瀬を見よ。水波たちて
やむ時あからむ。わが情ふかきこと、潭の如し。君をおもふこと、篤けれど、いまだ、
軽々しくうち出さず。うちいたさるの故を以て、直に冷酷ありとはおし給ふな。
愛情は、輕躁に、弄ふべきに、あらしものをと。まことある哉。巧言令色は、仁鮮し。大象
は、痴の如く、鼯鼠、克く趨る。言はぬは、言ふに、まさるものあり。寡言の人、必ず、思ふ事
おほく、多言の人、かゝりに、思ふ事、すくおし。木佛、金佛、豈又、必ずしも、冷かりどお
さむや。この歌のこの想、蓋し、作者が得たる、歸納的、眞理あり。いづれの世にかは動し
得べけむ。一首、全く、諷諭を以て成る。思想の發展、ために、淺薄、あらざるを得たり。か
くの如きの修辭は、萬葉、おほ、これおきに、あらざりきといへども、洗練の功は、古今
集時代のをさむるところとありぬ。二句の反語、思想の基礎を鞏固にし。四句のこそ
をして、更に、一倍の力を以て、五句の斷案を、扛げしめたり。

これ、この作者が第一の秀吟むしろ、客觀的に、世相の一面を觀破せるものといふべ
からむか。

か。た。み。こ。そ。今。は。あ。た。な。れ。こ。れ。な。く。ば。わ。す。る。時。も。あ。ら。ま。し。も。
の。を。 作者知らず

これも、古今集卷十四の歌。

◎かたみこそ今はあたなれ。かたみの物、今は、かへりて憎むべき敵とありぬと
あり。かたみは、紀念の意、形見とかくは、借字なるべし。もしは、忘られかたみよりい
でたる語か。あた清みてよむ。◎わする、時もあらましもを。昔の事を忘れ果
てむをりもあらうものを、さはゆかすして、もの思ひのいやまざるよとあり。もの
をの下には、餘意の含めらるゝならひあり。こゝも、亦しかりとす。

情人と別るゝにのぞみ、紀念にとて、殘しおかれたるこの衣服、必ずしも衣服との
みは、かぎらねど、今は、かへりて仇とありぬ。このかたみの、身邊に在る故にこそ、
かにかくと、その人の戀しくて、え堪へざるあれ。もし、これだに、あかりせば、人も昔

もうち忘れ果てつべきをさもえぬ今この身のせむ方かさよど非情の遺物をかい抱きて千萬無量の思ひを託す聲調おのづから哀痛なりその眞意蓋し忘れむことを心の底より冀ふにはあらし戀ししの頂點に到着したるよりの捨言葉あらむ人と相別るゝやせめてはどその遺物を覓むこれ自然の情なり萬葉集卷十五に

吾妹子のかたみの衣無かりせば何もものもてか命つがまし

と言へるすなはちこれ別れて後にはやうと戀しさのまさりゆきて遂に如何ともすべからざるに至りそらその遺物のかからむを冀ふ今はの一語一首の眼星たりこれあるがためにぞ當時はしか思はざりしがの意までを發抒し得たるかたみこそその力を強うして能くこの物こそはと特に思ひ入りたる感情に伴ひたり四五句の含蓄するところは如何に思ひ煩ふとも到底君を忘るゝこと能はずどの意あるかさか忘るゝこと能はず又必ずしも忘れむことを冀はずしかもなほ今は仇おれの如き冷言を洩して憚るところを冷酷はまさに狂熱の半面あり狂熱の一時形を變したる冷酷のみ變し了れるにあらず一時の幻影のみ喜びと泣きと怒りと笑ひと決して絶對なるものにあらず水火豈相納れざらむ

ものあるかは

會ふことこのたえてしなくばなかくに人をも身をも恨みざら
まじ

藤原朝忠

拾遺集卷十一に載りたるにて天曆歌合の時のなり

◎あふことこの絶えてしかくば 情人と相會ふことこの絶無ならばとありしはたゞ語調を強むるための助辭にすぎず◎あかゝに 却りての意あり◎人をも身をも恨みざらまし そのつれあき人をもこのはかあき身をも更に恨みざらむにとあり

思ふがまゝには會ひもせず何とて人のたまさかにのみ會ひ見給ふぞそのつれあき御心こそかへすゝ恨めしけれもしたまさかあらでは會ひ給ふまじきならばむしろ絶えて會ひ給はぬがまさりたらむさらば何もかもうち忘れて御心のつれあきをもわが身の薄幸あるをもさらに恨みざらむものをさりてはつれあき人あるかあとこれ一首の意あり惜いは可愛の裏とぞ聞く情人に向ひて

恨み言を呷々するは、やがてその愛の大をれば、ぞ萬葉集のいはゆる

一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まくはしき君かも(卷六)

の衷情は、いかなる人か有せざらむ既に、この衷情ありたまさかの歡會何ぞ慊る
ことを得べき、慊らざれども、心任せに會ふこと能はず、恨みくへて恨みの果にこ
のかこち言おのづから出づ、作者の眞意必ずしも會ふことの絶えてし無からむ
ことを望むに、あらじ蓋しくは會ふことの絶えざらむを冀ふや切ありしかく冀
へるが故にぞ、なかくにの語知らずく、口端に溢れしある四五句を吟了して
おぼゆるは、かく思ふかひもあく會ふことのため、たましくあるこそせむ方あけれど
の餘情あらむ、これこの餘情たゞ三句の五音のために生じ來る奇ならずとせむ
や。

この歌の解古來二途に出でたり、一はさきに解せるが如く、相會ふことのかれく、
なる意とあし、二は世の中に男女相會ふ道のたえてなかりせばの意とあす、景樹
はた、一たび前者に左袒しつれど、再び按じて、

さすがに、相見ること絶えずして、さて、うきふしのまじれるを、中々に絶えは
てたらむ中あらば、どうちつけのつらさをいとせめて恨みたるかとも聞ゆ。

と言へるは、うの宜しきを得たるものを、天曆歌合に戀歌五番ある、皆不逢戀の意
を詠み、拾遺集にも前後不逢戀の中に入れて、を以て、まばらく諸抄に従はむと
迷ひたるぞ、心つきあき、この歌如何ぞ不逢戀を詠めるからむや、三句のなか
に、ある一副詞は、恨みて後の捨言葉ぞかし、若し男女相會ふ道のかかりせば、どの意か
らむには、いかにすども、この副詞のあらむや、うかからむあふとは、履軒も言へる
が如く、わが愛人ひとりにか、れり會ふといふ事と、一般に指したるからむには、
世の中にあふてふことのかかりせば、を言はでやはあらむ、さらば歌の聞ゆ
べからず、朝忠いかで、かばかりの辭法を辨へざるべき、いはゆる歌學者たらむ人
々の、この誤解を相嗣きたるこそ、かへすく、いぶかしけれ。

作者知らず

世の中、のうきもつらきも、しのぶれば思ひ、しらす、人を見ら
む。

拾遺集卷十五の歌

◎まのぶれば、堪忍して、色にも聲にも、あらはさざればと、あり昔をしのぶしのび

妻あどのしのぶとは相異れり。しのぶに三の意あり。一は、即ちこゝなるしのぶにして、堪忍の意。一は、追慕する、戀慕するなどやうの意にて、昔をしのぶ、亡き人をしのぶ、遠き人をしのぶあどの類、これあり。一は、隠れしのぶしのびやかに讀むあどの類にて、人の耳目にたいざらむやうにするをいふ。◎思ひ知らずと人やみるらむ情も何も辨へぬ者ぞと、かの人は、われを見做すからむとあり、思ひ知らずは、無感覺を言はむが如かるべし。

世上の事いづれ憂くつらからぬかは、うき事つらき事常に、わが身邊を襲ひくれば、ごもわれは、一々、それに抗せむとは思ひもよらず、堪へに堪へ、忍びに忍びて、かく冷かに装ひ居るければ、かの人は、われを目して、或は、感覺を情なき男と見なしもやせむ。さて、わが胸の裡は、人一倍、懊惱せるものを、強ひて、色に表し、聲に出さるる苦しさいかばかりとかおぼしめすと、人世の缺陷は、戀に於て、殊に、そのいぢむの期あるべからず、抗して、贏たざらむよりは、むしる、退いて、泣かむに、加かす、まかも、この作者、うきもつらきも、忍ぶといへり、忍びて、泣かざるは、情を控へて、泣かざるが如くなれども、蓋しくは、泣きて、泣きて、泣きの果に、忍びざるを得ざるにいた

りしかり。泣くべく情の動きながら、おほ、泣かさらむ苦しさ、如何ぞや。見よ、一二の句、人世の艱苦を、嘗めつくしたる人の口吻を、らじか、四五句にいたりては、かくまで思ひ知るものを、の含蓄あるを、認めむにかたからざるべし。人や見るらむとの捨言葉は、なほ、その人にかぎりて、同情を、宛めたるの語氣ならざるあきか。世はおしあべて、われにつらかりたゞ、君一人ぞわが頼みあるとの衷、たが目にか、涙ぐませざらむ。一首、さあがら、悲痛の調子を、帯べり、消極的戀歌の、成功に、近きものか。心に入れて、擬せむは、要せねど、哦して、涙を、頰つに、足らむ。夕されば、螢よりけにも、ゆれども、光見ねば、や人の、つれなき、古今集。ことに出で、言はぬばかりぞ、水無瀬川下にかよひて、戀しきものを、(同上) 聲にあらはれ、鳴く虫よりも、言はで、螢の身を、こがす、(投節) 胸で、苦しき火は、たくけれど、煙たゝねば、人知らぬ、(都々逸) これら、いづれも、この歌と、嗟嘆を、均しくせるものあり。

あふまで。ごせめて。命の惜しければ。戀こそ。人のいのちを。りけれ。

藤原顯房

こは後拾遺集卷十一に載れる歌。

◎あふまで。そのわが戀ふる人に相會ふまでとあり相會はむ日まで生き永
らへたしと思ふ心よりの意なり。◎せめて命のをしければ。せめては迫めて
なり。古今集のいとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞぬるのいと
せめてと同じかるべし甚しく迫りて命の惜しきとあり。

人の戀しきいよ／＼熾んにしてわがこの命も惜しからずありぬいつにてもわ
れ死ぬは安けむと思へども思ふにまかせずしておほこの命を惜しみするは戀
人に一たび會はむを欲すればあり逢ひたし見たしと思ふにこそ絶えなむ玉の
緒もいまだ絶えざれまこと戀あるものは人の生命あるかかとげに戀は人の生
命なりまた人世の生命ありゆくど行くどころいづくこにか戀あかるべき人世にも
し戀あくば一瞬の生命もなほおぼつかならむ戀は活殺の自然力を有せり誰
しの猛者が克くこの自然力に反抗し得む戀は希望を生み希望は生命を維ぐ故
に戀こそ人の命ありければ言へるあり相會はざらむうちこそあふまでとせ
めて命のをしかりけめそはその時かぎりの希望のみ相會ひては更に
君がためをしからざりし命さへあがくもあとおもひけるかな後拾遺集

にいたらむこと必せり是に於てか戀を有する人の生命は時じくあらむ四五句
の誇張もまた宜からずや。

二句のせめてまことに切ある感情より湧きたる言とぞおぼゆる三句一轉して
情をはかれ四五句の斷定を大膽ならしめたりこの斷定や斷案やむしる自ら安
んずるの言あり死ぬべくおぼゆるわが心を強うせむとのすさびなりけむ二句
の命は五句の命に累を及せり無からむには。

能因法師

○ 聞ちかき梅のにはひに朝な／＼あやしく戀のまさる頃か。

後拾遺集卷十四に載りたる歌なり。

◎聞ちかき梅のにはひに。わが寐る聞のほとりある梅の匂ひによりてありこ
のに文字により意と心得べし。にはひは薰香の意にのみ限らず氣韻色彩映發
あごやうの義を含めり萬葉朝日かけにはへる山に照る月のあかざる君を山越
しにおきて月草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわが戀ひめやもなど皆
薰香以外なりされど後には大抵鼻覺に訴ふる馨香の意にもちるからされたり。

こゝも亦、去かりとなす。◎あやしく、不思議にもどいはむが如し。
聞近き壺の梅、この頃は、人の心も知らずして、香にほふかき、そのえからぬにほひのため、何故とも知らず、心のときめきて、不思議にも、人の戀しさいやまさりゆくよと、これを、一首の意となす。五官の感覺、いちじるく熾ならむには、誰人も、恍惚として、自失するをまぬかれざるべし。繪畫を見むも、しかり、音樂を聞かむも、亦しかあり、まして、自然の美に觸れたらむをや。梅花は、もとより、自然の囀中にあり。その色を見、その香に觸れて、心的異動を起さむは、理のまさに然るべきところ。梅花の美にうたれて、ある他の美を聯想し、而して、それ、全く融和し去らむこと、有情の人の常からざるを得じ。今、作者戀を抱けり、戀は愛の用あり、愛は美中の最も美あるもの。梅花の美と相融會して、一團となりたりといへる。この歌の意、自然に合せるに於て、疑ひあらじ。二の句、言ひ得て簡明なり。三句の朝あく、その事の日を経たらむよし、朝々ごとに、戀のまさりゆくを自識しつゝ、もあほ、且再び三たび、その境に陥る弱くは、かききは戀の常あれば、五句の頃の一字むしる、無きを優れりとあす。三句、既に、頃の意を含めり、更めて、これを措くの要あらむや。朝と、狭く、時を限定したるにこそ、趣味は、饒けれ、頃の如く、おぼるげに、時をあらはさむは、

この歌の趣に、戻れるものあり。

芭蕉が有名なる

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

の發句「見ぬ戀つくる」の奇抜ある、或は、この歌にまさりたらむさばれ、清楚の點に於ては、われ、未だ、その孰れあるかを知らず。

來ぬ人を恨みもはてじ、契りおきし、その言の葉も情ならずや。
藤原忠通

詞花集卷八に載れる歌あり。

◎恨みもはてじ。恨みるまでにはいたらじとなり。果つは、その行くべき處までゆきつきたる意あり。故に、こゝのはてじは、恨みの頂上に達せじとのこゝろと見るべし。◎その言の葉。契約したるその人の言の葉あり。
契りし人は、何故來ぬぞ、とせむかくせむのあらましごとくも、今は、仇となりしよ。さりどて、あからさまにうち出して、恨み言を、之言ふべくもあらず。かの人の情うすきは、あかく、わが愛の足らねばならむ。來む來給へと契りおきし、かの人の言の

葉は既に情といふべからずやしかり情あればこそふつゝかあるこの身がり訪はむとだにのたまひしなれのたまひしのみにて實際に訪ひ來給はぬは心ゆかぬかぎりかれども情ある人ど知りつゝいかでその人を恨み得むやと情愛かくの如くば何ぞ永くもの思ひに沈まむやはやがては歡會の期あらむこと必せり人を恨みむと欲して恨み果てずわが身を責めわが身をかこつ世かれぬ女子の情緒往々かゝるものあり一首の體形雄勁あれば強ひて自ら煩惱を抑制しけむおはれさもあらはならずわらはからざるが故にかへりて一倍のおはれさをおぼゆるあり一二の句は必ず二の句たるべきものこれを下に移すべからず恨みもはてじの一句蓋し一首の主腦たらむ恨みむとしてえ恨まず恨みざらむとしておほ恨むが如き趣あるはたこの句の存すればぞかし單に恨みじと言はむにはいかにしてこの風情を含み得べき四五の句率直ある言ひぶり勅撰集中稀に見るところのものたらずとせむやいやみさきことこの句の如きこの歌の如き萬葉のおもかげあり作者は凡手からざりけり。

○
祇 王

君があげこし手枕のたえて久しくなりにけり何しにひまなく
むつれけむながらへもせぬものゆゑに、

源平盛衰記祇王祇女佛御前の事の條下に見えたり参考本に入道又打ウナヅキ、此歌ハ侍從大納言帥中訥言娘ニ相具シテ契淺カラザリシニ何程モナクシテ別レツ、歎ノ餘ニ作り出シテウタヒシ今様也。以上故事ソレニハ我等ガアケコシ手枕ノトコソ有ルニ、一ノ句ヲ引キ替ヘテ君ガアケコシ手枕ト歌フ事ハ、入道ガ所ヲ思ヒナヅラヘテウタフニヤ。ソレヲバ祇王ハ如何トシテ知リタリケルゾ、加様ノ事ハ時ニ取リテ上手ナラデハ叶フマジアハレ、祇王ハ今様ハ上手カナ。上代ニモ聞キ及バズ……………トゾホメ給フ。とあり。

◎君があげこし手枕 君が頭をあげ來りしわがこの手枕とあり手枕は古より關なくばかへりてだにもうちゆきて妹が手枕まきてねましを「朝寐髪われは梳らじうつくしき君が手枕ふれてしものを」を「あど普く用ゐるからされたり」春の夜の夢ばかりある手枕にかひなくならむ名こそをしけれをも思ひわはすべし。◎何しにひまなくむつれけむ 何が故に絶間もかく睡ひ合ひけむとあり何しにのしは、さらでしも今し方かくてしもあごのしと同じく意をふかめ語氣を強からし

む。◎あがらへもせぬものゆゑに。永くも繼續せぬものにてありあがらとなり。ものゆゑは、今俗に知りもせぬくせに云々あごいふくせにの意に近し。古今集の「秋ならであふことかたき女郎花天の川原におひぬものゆゑ戀すればわが身は影どかりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ恋すれど皆同例ありと知るべし。わがこの織手君が枕とからざること久し思へばはかなき契りありけりかくはかなき契りあらむにはむしろ始より契らざるに加かじものをあゝわれ何故にさりとも料り知らずして殆ど絶之間もあくむつれたりけむ繼續せざらむ契と知りたたましかば程よく人に親ましをさては今の物思ひも少かるべかりしありと人の愛を失ひたる人の情怨かくの如からむは世の常あり後にこそかうも言はるれ當時にありてはいかにすどもひまあくむつれざるを得ざりしからむあがらへもせぬものゆゑは宛然たる女子の口吻いくたびかこの言をくりかへたりけむくりかへし〜てもつきぬは長き恨みあらずや。

萬葉集卷四ある

あか〜にもだもあらしを何すどか相見そめけむとげざらなくに。はた同じき怨み言あり逢はぬ昔を戀ふるにいたる痛切何ぞ堪ふるを得む。

初二句一意に到底して滞らず三句一頓して語氣おのづから激せりたゞに抒情の順序を得たるのみにあらず朗詠するに於てまた節奏の空しきを得むか手枕のたど絶えてのたど又何しにのたど長らへものなど共にこれ頭韻をふみたるもの詞調の婉麗うたうて後にこれを知れ。

よ。し。さ。ら。は。涙。に。く。ち。ね。唐。衣。ほ。す。も。人。目。を。し。の。ぶ。か。ぎ。り。ぞ。 顯昭法師

千載集卷十三にのれる歌あり。

◎よしさらば 可し〜かくありたる上はせむかしさらば云々せよと三句の唐衣におほせたるあり◎涙に朽ちね 涙のために朽ち果てよ朽ち果てよ思ふさま人に見られよと命令したるあり◎唐衣 もとは美しき衣の意にのみ用ゐたりしが後には單に一般の衣服をさしてもいへり古今集うれしさを何につゝまむ唐衣袂ゆたかにたてと言はましをの唐衣はた然りとあすこゝあるは無論たゞの衣服と見るべし◎人目をしのぶばかりぞ 人に見られぬやうに包みかくすまであるぞとあり。

人戀しければ、涙落つ。涙落つれば、わが衣ぞ沾ひがちある。衣は、常に沾へども、そを他人に見られて、どやかく言はれむが口惜しさに、ぬるれば乾し、ぬるれば乾しつゝ、今日が今日までは、さて過しきその心づかひもあだどありて、今は、浮名を歌はるるよ。さては、人目を憚らむ必用あらじよし。思ふさま人を戀ひて、泣きに泣かむか。わが衣よ、汝も亦、その心して、涙のために朽ち果てぬかし。今日まで、汝を乾したりしは、たゞ、人目を憚るによりてありしものをと、あゝ、人言は毒蛇の如し。執念くも、われに魅入りて、しばらくも離れず。嫉み嘲り疑ひ、人世に充ちて、いさゝかの同情をも覚めむよし。わが戀、今や、世上に傳播せり。何を苦みてか、人目をつゝ、むを要せむ。ぬれぬ前こそ、露をも厭へ。既にぬれたり、今は、た、何を頼み、何をか恐れむ。頼むものなく、恐るゝものなし。われば、ひたぶるに、わが情を、わが戀を行らむのみ。この歌、この心的動機を、捕捉したるは、争ふべからず。この意氣地は、世の無情を、感ずることばけしき。人の當に、往々おこすべき、反動力たり。

千早ぶる神の忌垣も越えぬべし。今はわが名のをしげくもあし。萬葉集卷十二
人目をも今はつゝ、まじ春霞野にも山にも名はたゞばたて。續千載集
天と八幡この上からは立つや、浮名を無にせまい。吉原総まくり

今更心を入れかへた、とて、立ッた、浮名が、消えはせぬ。都々逸

あど均しく、これ同一の意氣地に成れり。理性を、こゝに加へたらば、或は、この境を拯ふを得むも、戀に迷へる熱性の男女は、大抵、そこに臻らざるあり。戀に迷ひて、迷ひて悟めて得たるところの歸趣は、即ち、涙に朽ちねの一句に、こもれり。自棄といはむや、自暴と言はむや、この歸趣をもどめ得たる人、既に、心頭を滅却せるなり。百千の阻碍も、恐るゝところにあらざるべし。

初句のよしさらば、何らの痛切ぞ、思ひ切りて、言ひすてけむ時、こをおしは、からるれ。五句のしのぶかぎりぞと、廻映して、向ふに、面さむきこゝちす。それ然りしかは、あれども、一首を、唐衣に諷託したるは、あかず口惜し。這般の意氣は、最も、直截ある、眞摯ある、發展ならざるべからざるものを、や、詞華を、戀歌の上に競ふは、古今集、すでに、その源を、おせり。この歌の如き、むしろ、當時類あき率直ありけむ。おほ、題詠風を離るゝこと、能はざるは、いかにともせむあし。

藤原實方

契りこし事のたがふぞたのもしき。つらさもかくや、かはるご思

へば、

これも千載集卷十三にのれり。

◎契りこし。これまで戀人と契約し來りしことなり。◎つらさもかくや變るとおもへば。契約を履行せぬが如く、再び今のつらさの和ぎもすらむかとなり。かくやは、一二の句意をさして言へり。

末のするまでと契約せりし事の、かく違ひゆかむとは、思ひもかけざりしが、よく思へば、かへりて頼もしきことなりけり。かの人の心は、たやすく變移す。たやすく變移するよりおせば、今のこのつれなさも、再びかはりて、もとのまゝある中とあらむ期もあるべし。それを頼みに、それを樂みに、今のつらさに堪へ居らむよ。これ、一首の意あり。契約の違へること、何ぞ必ずしも頼もしからむや。頼もしからぬばかりにあらず。怨恨せざらむとすとも、決して得べきにあらじものを強ひて自ら慰めむとて、心にもあらぬこの言を成す。その衷情あはれからずとせむや。二三句、突如と提起し來りて、殆ど人の意表に出づ。かか／＼にある副詞の力をも、籍らずして、直截に、たがふぞたのもしきと、断定し去る。誰か、呆然として、まづわが耳目を疑はざらむや。四五句に、いたり、除に、そのまゝに、然るべき所以を叙ぶ。これ、歌

人の話手段、最も讀者の耳目を聳動するに適せるの辭様たらむ。いはゆる機警、これあり。

新續古今集に、

かか／＼にまた頼まるゝ世なりけり。かはるべしともちぎりやはせし。とあるは、全く、この歌の想に均しけれども、婉曲ならむとして、かへりて、失敗せるもの。到底、この歌の匹にあらず。

藤原俊成

おもひあまりそなたの空をながむれば霞をわけて春雨ぞふる。

新古今集卷十二に載れる歌。

◎思ひあまり。思ひに堪へかねてあり。たもひかね妹がりゆけばのおもひかねも、これと同じ意あり。◎そなたの空。戀人の住めるあたりの空あり。そなたは、そのかたの約れるもの。

長閑ある日、うちつけに、人の戀しさいや、まさりて、堪ふべくもおぼえざりしかば、せめてもの心やりに、その人の住める方を、うち眺むるに、霞、見る／＼ふかうなり

て、春雨の、まゆぐと降り出でたる、さびしさは、心も消ゆるばかりありと、春日、かげのごかある夕あど、離々たる嫩草を踏んで、戀しき空のあたりを眺むる風情、いふべからざるものあらむ。ことに、細雨の、蕭々として、降りいでたらむには、胸に、思ひのなき人といへども、おほかつ、無名の涙あきを得じ、戀しさあづかしさの、困じ果て、は、何時かは身も世もあらぬ思ひせざらむ。まして、この幽静寂寥の境に、のぞみたらむに於てをや、この歌、この風情あり、玩味するに堪ふべし。一二三句、詞調暢やかにして、更に、拘束せらるゝところの、あきはた、又味ふに堪ふべからむ。されど、四句の霞をわけてにいたりては、纖巧に失して、感興、あか／＼にあさし。宣長の「たゞ何となく言へる事ども聞えず、されど、その意いまだ思ひ得ず、殊あるよしあくば、詮なきいひことあり」と言へるは、あか／＼、せむあき難にはあれども、たゞ、それ、わけての、一語、一首の風格を、毀損したること、決して、尠少ならず。霞みあがらにあど、おほらかに、言ひたりしからむには、淳素にして、清楚あるべかりしものを、精細は、もとより、詩美の一たり。跌宕豪放と相對ひて、詩美の領域を、分割すらむは、論なし。殊に、修辭の、進歩しゆくにしたがひて、ますます、範圍を、擴めむこと、や拒むべからず。拒むべきには、あらずといへども、その立脚點までを失ひて、小刀細工に陥

らむは、決して許すべからざるあり。精細は、印象を、明晰にす。印象の、明晰あらむは、小刀細工の、能くせざるところ、自然に、隨伴して、自然の、風格を、保たむと欲せば、必ず、また、措辭の、自然を、期せむを、要とす。措辭の、自然は、小刀細工を、あすを、許さじ。當に、大匠の、一氣に、鑿を、揮ふが、如くあるべし。まがる、後に、ぞはしめて、神情の、そこに、宿るもの、あらむ。俊成が輩は、由來、歌作りあり、作ると作るところの、歌精細あるが、如くにして、まかも、浮薄輕佻からざるもの、すくあし。豈た、この歌のみ、あらむや。

西行法師

は、る、か、なる、岩、の、は、さ、ま、に、一、人、居、て、人、目、お、も、は、で、も、の、思、は、い、や。

これも、同集卷十二の歌なり。

◎岩のはさま。巖石の間あり。今俗には、さまるといふは、このはさまと、同語源あるべくや。◎人目おもはでもの思はばや。人目にふれもやせむの心づかひもあ、く、思ふさま物を、思ひたしとあり。ばやは、希望の、助辭あり。おのが上にのみ用ゐる。他の上にかけては、おもむを用ゐる例あり。外山の霞た、すもあらなむ。吾の衣をわれに、貸さなむ。よひ／＼と、こたうちも寝か、むあど。

人目人言はどよに、無情なるはあらず。今は、とても、この社會に身を措くべくもおぼえず。ありぬ。願くは、遙ある山の山奥ある巖の間にこもり居りて、人に見られむの、氣づかひ心づかきもなく、思ふがまゝに、物思ひたし、あかき世の人口のうるさ、よどげに、かく思ふもことわり哉。多恨の人、常に世と相背く。さて、世に、戻るにあらず。世の、これを納れざるあり、いたづらに厭世と謂ふ勿れ、そしる勿れ。理想なきもの、希望なきもの、何ぞ世を泣くを敢へてせむや。人を戀ふるは、希望の大なるものなり。理想を實現せむと期すれば、胸いたく、涙おほきは、決して、怪むに足らじ。まかも、世は、その人を目して、痴と罵り、女々しと嘲る。痴か、大に痴なるべし。これ、濃情を意味すとあらば、女々しとか、大に女々しかるべし。これ、多恨多涙の評語とあらば、痴愚の頭に宿る神なり。涙の裡より生るゝ神あり。神あり、神あり、われ、神をもとむ。神を覓むと、何處をたづねむ。世を避けて、世の人口を避けて、天地を、一身に歸する時にぞ、はじめ、神は、頭に宿らむ。痴のいたり極るところは、たゞ、こゝにありて存す。あゝ、たゞ、こゝにありて存す。痴は、一人を意味せり。一人、あらむを冀ふは、どりも、あほさず。神をもとむるなり。一人あるを自覺したらむは、やがて、神をもとめ得し。かり。自覺は、いづこまでも、自覺にして、他力の加ふべきかぎり、にあらず。社會

を離れ去つて、まかる後に、その一人あるを自覺せむも、社會を離れずして、即身、その一人なるを自覺せむも、いづれ異るところあらむや。自覺は、自覺あり。四邊の物象の有無に、累さるべきに、あらじもの。を、今、この歌の言ふところや、全く、神域に達し、果てざり。宜あり、その身邊の物象に拘束して、その無を、認識し、能はざることを、然れども、これ、なほ、頂點に達せむ。向上の一路たり。かく、その一人ならむを冀ふの極、頓然として、その既に、一人なるを自覺せむこと、決して、期すべからざるにあらず。否、まかあらむこそ、むし、當然の理。運たらめ、萬葉のいはゆる「人二人すめり」と思は、何か嘆かむは、すかほちこれあり。

人住まぬ國もあらぬか、吾妹子とたづさへゆきてたぐひて居らむ。萬葉集卷四

いからむ巖の中にすまはか、は世のうき事の聞えこざらむ。古今集

どうでそはれぬうき世からみ山のおく、その奥のすつどの奥に住居して人目思はず物おもひたや。端唄

これら、いづれも、この歌の言と相合せるものあり。作者の浮屠氏あると否とは、決して、この歌の想に關せず。

一首、澹々、苟も、巧を銜はず。まかも、あほ、ひとりゐてと言ひたる三句をうけて、四句

の頭に人をおけるは、おのづから聲調の滑脱あるを得たり。四句より五句にいたる思ふの一語を重疊して、その言を婉約おらしめたる、忙中の閑作者が胸中の餘裕をおしはからるゝげに、西行おればこそ。

かへるさのものごや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月。

藤原定家

新古今集卷十三に載れる歌あり。

◎かへるさ。わが思ふ人の、今宵はよその人がり通ひけむとおしはかりたる、その歸るさなり。◎人のながむらむ。人はおほかたの人にあらす。わが思ふ人あり。◎待つ夜ながらの有明の月。人を待ちて、待ち明したる夜の有明の月なり。おがらは、そのまゝの意、待つ夜のまゝにて、おしとはしたるよしあり。

今宵はど待ちつるかひもあかりき、待つ夜のまゝにて、うち眺むる有明月の、さてもさびしき哉。常はかたみに、別れをしみて、この月かげに泣きつるものを、今はひとりぞ、誰を恨みむすがもなし。人はかくとも知らでぞあるべき。知らで、何處に月みるらむ。思へば誰が許よりの歸るさにか、この月かげを眺むらむよ。人に、

恨みのなきものはと恨みふらはならず。あらはに歌の面に見えず。見えずといへども、恨は含めり。郎恨めしく、郎なほ戀し。郎が情はさもこそあらめ。わが情はた郎の上に、昨夜郎來らず、われなほ待ちつ。待ち明しつる、そはあながちに、恨みも果てじ。されど、郎の來ざりしは、外に通ひ路の、あればと思へば、あゝ思へば、恨めしからぬにしもあらざるあり。初句より三句にいたる、二氣この感喟に到着せり。かへるさのもの、婉切の極、人のと言ひて、君やなど言はざりしぞ、いはむかたき、四句何等の精緻ぞ。これ定家獨擅の句法か。宗祇のこの調比類なしと稱へたるも宜る哉。

東野州の、有明のつれなく見えしといふ忠岑が歌を、ふかく執心せられて、常に吟せられし、その心よりよみ出で給へり。と思ひとりたる、必ずしも然るべからじ。情怨もどより、その致を異にせり。鴨長明の、新古今三首の名歌として、これ及び、かくてさはいのちやかぎり、徒にねぬ夜の月のかげをのみ見て。

野邊の露は色もなく、てやこぼれつる。袖よりすする萩の上風。

の二首を採りたる、むしろ、菽麥を辨せざらむしわざのみ。命意の靖深ある、言詞の線繞ある、そのいづれよりせむにも、優劣は、あきらかあらむに、かくてさはの歌、殊

に詞調の妥貼を缺く如何ぞこゝに列するを得べきこの歌定家自身も得意なり
けむとりて自讃歌中に加へたりき。

或はこの歌の上句を有明の月の物かなしきは別れて歸る時のみありと人々は
思ふならむとやうに解するありこれ男子の歌と見おしつるもの貞徳季吟など
かく思ひき或はまたよその人は思ふ人にあひて歸るさの物と見やるならむと
羨みたるありと思へるありこれも男子の歌と見つるものにて宣長あご然りき。
いづれもその當を得じ石原正明の

わが待つ人をさして人といへり大かた世上の人をいふにあらず。
と言へるはじめて當れり。

人問は、いかに言ひてかながめまし。君があたり夕ぐれのそ
ら。

藤原良經

後京極攝政自歌合五十八番右の歌にて

しのぶれどまけぬと人や思ふらむうち忘れてはなげくけしきを。

一三六

に番ひて勝とかりたるものあり判者は釋阿入道俊成なりき。

◎いかに言ひてかながめまし。何と答へてこのまゝにうち眺め居らむかとな
り。◎君があたり。君が棲める家のあたりの意あり萬葉集君があたり見つゝを
居らむ生駒山雲なたあびき雨はふるともあごあまたその例あり。

あまりの戀しさに夕まぐれ門に立ちて情人の棲めるあたりの空を心あてに眺
め居れば人に怪まれて君は何して居たまふぞなど問はれもやせむその時は如
何ある言の葉もてこれに答へむいかにこの場をつくるひてこのまゝ心をやり
居らむかおぼつかなしやそのをりの事さても戀しきかなたの空よと物思はし
きは暮天のからひ雲のはたての色々なるにあやなく胸のむすばゝるゝは人戀
ふる人の常なるべし心あてに眺むる情人の棲める方何ぞ飽かむの時あるべき。

この歌蓋し萬葉集卷十二

足引の山より出づる月待つと人はいひて妹まつわれを。

より脱化し來れるものまかもその窩中に陥らで特殊の妙趣を保有し得たり上
句讀むに息もつかれず暢達この上をからむ四五句はた幽婉箏を聞くが如く吟
じをはらば耳邊にえからぬ響あるべし風態格調相諧ひていさゝかの間隙もあ

一三七

らす。

三句切れの歌は新古今にいたりて成功せり。成功して更に弊竇を作れりあるものはこの體を目して歌にあらずと言ひあるものは強ひて四五句を動してこれを嘲る。この輩何ぞ三句切れの特性と、その弊害とを領せむ。要はたゞ詠物に臨みて眞摯ある體度を執るに在り。思想の排列にその意を加ふること審かあるに在り。

い。つ。も。聞。く。も。の。ご。や。人。の。思。ふ。ら。む。來。ぬ。夕。ぐ。れ。の。松。風。の。こ。ゑ。 同 人

こも亦後京極攝政自歌合六十九番左

うつろひし心の花に春くれて人もこずるに秋風ぞふく。

に番ひて持となりたる歌あり。この歌新古今集卷十四にも載れり。

わが宿の松風は常にさびしき聲あれども戀人の來ぬ夕暮にくらべては更にものゝかすにもあらずげに、一人ある夕に聞く松の聲は身にも心にも徹りわたりて悲しくわびしきをかの人はさりともおしはからでなほ何日もあがらの聲を

らむと思ひ居るらむいかにもしてこの思ひをかの人に知らせむよしもがあと。情の熱せるにあらず。情の濃かあるあり。想の高きにあらず。想の秀なるものあり。言句精緻にして聲調流麗。怨みて掩はず。又亂らす。當時代に於ける戀歌の粹たるを失はじ。ものとや人のと言へるあたりはた當時の最も好める句法たり。三句にて切り五句を名詞もてとぢめたるいはゆる新古今風の醇あるもの來ぬ夕暮の松風のこゑ。曲盡の妙この大臣慣用の調子ありとす。

判者俊成はこの歌とかの「うつろひし心の花に」の歌とを評隲して「心各艶にして勝劣またわきがたし」といひたれども必ずしもしからず。「うつろひし」の歌にとるべきはたゞその調子のみ。まかもこの調子は新古今時代の通有せるところ。何ぞこれを珍しむせむや。この花に春くれて「人もこずるに秋風ぞ吹く」を強ひたる巧みは決して賞すべき手段にあらず。一首を誦了して起る感興はいかばかりかあらむ。この歌の風態格調は蓋し一世に卓越せるもの。固より天壤の差ありて存す。これをしもあは同等の沽券を有せりとあさむは紅と赤との識別なきものゝわざとぞ言ふべき。六百番歌合の合判に「こぬ夕暮何のこぬとも聞えずや」と言へるはた又採るに足らず。

古今集の

來ぬ人をまつ夕暮の秋風は如何に吹けばかわびしがるらむ。

はこの歌の本歌たること疑ふし前に釋せる定家の歌はこれと殆ど同じき風格を有せるものそのいづれか摸するところたりしにはあらじか。

作者知らず

よ。し。か。の。こ。れ。ら。が。ひ。ご。り。寐。や。か。ば。か。り。寒。き。冬。の。夜。に。衣。う。す。く。
て。夜。は。あ。が。し。た。の。め。し。人。は。待。て。ご。來。ず。

體源抄に載れる今様歌なり。

◎よしなのわれらが獨寐や。せむもあきわがひとり寐なるよとありよしなは、由無にてあは無し語根おほつかあ聞きともあなごのあと同例なり。こは皆名詞格ありと知るべし。われらはなほわれと言はむが如し。らは元來複數をあらはす接尾語なれどもかくも言ひて自己一個人の代名詞に用ゐることあり。古今著聞集の今様に「われらが通ひて見し人もかくしつゝこそかれにし」かあど見ゆ徳川時代の身ども及び今日のわが輩などもこれと同例なるべし。◎たのめし人。

必ず來るからむと心に頼め置きつる人あり。

如何にしてかこの寒夜を明さむ。閨衣薄うして堪へがたきに夜の長さはたいくばくぞ。今宵は必ずと頼めおきし人。今いかにしつる。待てごもく、さらに來るけはひもあし。空たのめか。空頼めありき。せめてかの人の來給はむには、さて慰むよしもあるべきものをいかに思ひわづらへごもかひなくせむあきはわが獨寐なる哉と。孤燈影くらきところ冷かなる衾をひき被きて。寐もやらす起きもやらす。ふし沈みて涙ぐめる。手弱女のおもわ書かざれど。おのづからあらはあり。情人との歡會は春の如し。風霜といふども。冒し得べしや。古今集の

さき草の岡のあがたに君とわれと寐ての朝げの霜のふりはも。

すあはちこれあり。情人來らず待てごも來らず。孤影たい燈下に悄然たり。春あは寒きを感じぬべきは。それこの時にあらずや。聞裡ひろうして。まかも身を措くに。どころあく。輾轉反側。嵩し果て。は遂に怨嗟す。一句の突として起りたる。おのづからその境にかあへり。これ一首の總提二句と三句とは。冬夜をわぶるの恒情のみ。五句頓折して再ひ痴に入る。言つきて怨つきす。聲たえて韻たえず。悲涼の氣を。いゝら。讀む者の肝膈に徹せむ。四句のは五句のは。各相待つゆるかせに。看過すべか。

らす。

うごくある人を何ごと恨むらむ知られず知らぬをりもありしを。

西行法師

この歌新古今集卷十四にあり。

◎うごくある人 やうく疎遠になりゆく人あり。◎知られずしらぬをりもありしを。知られずはわが身のその人に知られずにて知らぬはその人のわが身を知らぬありをりもありしを。初句の上にもぐらして解すべし。

情人との歡會たまさかにありぬわが愛いまだ衰へぬを人はあごかく疎くありたる疎くありゆく人すでにわれを忘れればかさても昔は相識らぬ中なりしを人われを識らずわれ亦人を識らざりしを今はた何が故に人のつらさの恨みらるゝぞ相識らざりし昔を想へば今の疎遠をもあきらめるべき筈あるをさはあり得ぬわが心のいぶかしさよと一首澹泊にして去かも意深遠縹渺として捕捉するに易からず維摩詰經の非淨非穢不出入般若心經の不垢不淨不増不減

それこの歌の想と孰れぞ五滯皆空あり既に空と觀じ了る六塵何かあらむ十二因縁何かあらむ無明なく意識なく我なく人なく得る所無きにあらずや既に所得無し一切の煩惱如何ぞわが心に蟠らむ人と相契る期するところ那邊にある人と相背く望むところ何ものぞや始あるが故に終あり始ありと識るが故にその終あらむことを庶幾ふかり始とせずんば何ぞ終を終とせむ始必ずしも始あらす終また必ずしも終にあらず流轉還滅は畢竟無明に執せるの名目のみ有漏路なく無漏路なし我たい我にありて我を忘れむか疎くある人を恨むまでもなく疎んせらるゝ我を恨むも要せじ識られず識らぬ時そは過去に屬せり過去に屬しつれども今は現在と異なるあきかり過去の時と現在の時とその間何等の物をか含める覓むれども得べからず得る所無きあり既に得る所なし既に得る所なし是に於てか過去と現在とその全く一時あるを知る一時一時にあらず一刹那のみ刹那のうち何をか望み何をか覓めむ時機とは何ぞや相なく性なした因縁の假合あるのみ因縁假合して人とわれど相契れるのみ因縁離るもどの空ありわが心に些の罣礙をからむ筈なるに必ずあかるべき筈あるにかはかつ人を恨みてえ止らず執着愛着それこれを如何にせむ情は靈あり不可思議

かり。千變萬化。その向ふところを知るべからず。五蘊皆空と觀じてすら根底を叩
けばこの聲ありわれは人あり神にあらす佛にあらす戀に生き戀に死かむ人の子か
り戀に狂ひて狂ひて死かむも惜むところにあらず人を恨むの眞恚の炎もえて
くもえ盡さずんばわれは遂に如何にし得べき戀に迷ひて人を恨み人を恨み
ていよゝ迷ふ迷裏に迷を生み生みくして盡つるところを知らず戀に歸し愛
に歸して心頭を滅却し戀を抱き愛を抱きて泣き又叫ぶその間に何ぞ我あらむ
や人あらむや他念なく餘念なく一念たい戀のみ一念發起して而る後大覺に入
る大覺は無覺の如し人を恨むも咎めず人を戀ふるも憚りあらず否我あきかり
この歌正に人間の聲あり識られず識らぬをりもありしをありきと知りつゝな
ほ人を恨む人を恨むは我が我は未知の時代に反れと命せり未知の時代に反ら
ば何の恨もあるまじきをそれに従はで人を恨む人を恨むは我にあらずたゞ戀
の一念のみわれ我を率ゐること能はず我われを亡すことあたはずわれにもあ
らでこの嘆を吐く人間の聲は由來かくの如からざるを得ざらむあり初句のう
とくあるはやうく疎遠になりたるをいふ疎遠になりしの意にはあらじ多少
進行の趣あらむ作者元來初句の字餘りを好めりかりしの意あらばかりしと言ふ

に躊躇せざるべきをや四五句はもとこれ天資の言常人百年の苦慮かほかつ得
易きものからむやをの一音力甚だ強く餘意餘情窮るところを知らず如何かれ
ばかくはと自ら疑ひたらむとこそ
これ新古今集抒情詩中の絶品たるのみならず前後に通じて殆ど等類の歌を見
ることなし蓋し圓位上人獨擅の想かたゞ徳川時代の俗謠(端唄)に
蟬と螢を秤にかけて泣いて別りか焦れて退きか昔思へば見ず知らず
といふがあり結末の一句これをこの歌の翻案と見ばさて止まむ別に後世人の
胸に湧きたるなりとせむにはわれ將に歌筆を投せむとす無智無學の徒輩決し
て悔るべきにあらずこの端唄焦れて退きかまでは河東節の夜編笠中にも引
用したりそれにて一首の完きならむ結末の一句如何なる人の手に加へられし
ぞゆかしやづかし

新田義貞

わが袖の涙にやぶる影さだにしらで雲井の月やすむらむ

この歌太平記に見ゆ同書の記するところによれば義貞禁中の宿衛仕りける頃

句當内侍がり、人して、この歌をおくりけるに、内侍は、さすがに、あはれとは思ひしものから、なほ、憚るところやありけむ、かへしをだに、えせざりけるを、帝、ほのかに聞き召して、遂に、この内侍を、盃に添へて、下し賜ひけりとぞ。

◎かげとだに。かげは、月の影なり。だには、今俗にいふさへも、ただけでも、あごに同じせめては、わが袖の涙に、たのが影の宿りぬとのこと、ただけにても、知りてくるればよからむに、さはあらずしてとの意なり。◎雲井の月。雲井の井は、借字にて、居の義あるべし。月は、その人に譬へたるにて、一首、皆、月の縁語をもて、仕立てたり。雲井といひ、澄むといひ、宿るといひ、影といふ、皆しかあり。さて、澄むといふこと、の詞は、何となく、今俗にいふすまし顔にも、かよひて聞ゆ。

君は、雲井の月の如し。わがこの思ひを、よすべくもあらず。しかも、君がれも、かげは、始終、わがまぢかひを、往來して、忘れむとすれど、え忘れざること、また、袖の涙に宿れる月、かげの如し。あゝ、わが戀ふる月の如き君よ、せめては、君がおも、かげの、わが目にうつれりとだに、知ろしめせや。さりとて、君は、知り給はぬか。何ぞ、月の如く、雲井の、あゝ、あたに、遠く、高くは、すまし居給ふぞと。これ、一首の意あり。月、非情にして、も、の言はず。人、亦、無情にして、超然たり。この時に於て、誰か、いッそうちあけ話さうか。

の思ひあからむ。まかも、關あり、障壁あり。うちつけあるわざ、すべくもおぼえず。煩悶の極、知らず識らず、この歌とありぬ。一首、全く、擬人法を、以てし、摯實あるに、あらず。雄勁あるに、あらず。は、か、かげに、もの、あはれなる、風情、たゞ、字句の間に、溢るゝものあり。もとより、抒情の、最も、宜しきに、慍へる、手段、たらじといへども、あは、當時に於ける、戀歌の、上乘あるもの、ありけむ。物に、寄せ、物に、託して、戀情を、抒ふるは、必ずしも、わるしど、か、さ、然れども、いたづらに、詞工の、するにのみ、心力を、費して、内容の、無意義に、陥らむも、顧みたらぬは、決して、歌の、能事と言ふべからじ。詞の、あや、詞の、くさり、縁語、かけ、詞、或は、多少の、妙も、あらむ。多少の、妙は、あらむ、あれど、そは、たゞ、籬上に、渦く、文紋の、如きのみ。目、一たび、これに、觸れ、あは、や、がては、興味、の、索然、たらむ。佛作りて、魂、入れぬは、木屑と、擇ぶところも、なし。歌、豈、何ぞ、ま、から、ざら、むや。この歌、さすが、實情より、出でたる、か、ひ、ありて、人の、心を、動し、得たり。趣、向に、考慮を、費した。らむ。痕跡、あらはにして、掩ふべくも、あらぬは、せむ。方、あき、時、世の、累、ひ、ありけり。上句、天、正本には、誰故に、や、ごる、袂の、涙、とも、と、あれど、涙の、宿るといふこと、おだや、か、ありとも、思はれず。なほ、普通本の、ま、なるが、優り、たらむか。

言はでおもふころ一つの頼みこそ知られぬ中の命ありけれ。

藤原爲氏

續拾遺集卷十一に載れる歌あり。

◎言はで思ふ心一つのたのみ。何事をも言はずしてたゞわが心一つに思ひ定め居る頼みとの意あり頼みはわが戀の成就せむの頼みをいふ。◎知られぬ中わが上の更にその人にしられぬ間柄ありに於けるさごの後置詞を下に加へて見ばよくわからむ。

機會も亦く勇氣もはたおこらねば今日といふ今日まで戀しとだに言ひも出さざりきされどわが心一つには今こそかくは忍びもすれやがてうち出で胸をはらさむ。一たびうち出でたらむ上は如何にすとも目的を達せで止まじと頼みおくありこの頼みのあるが故に相識らぬ中と思ひつゝも亦はわが戀を繼續し居るあり。若しこの頼みだにわからむにはいかでわが戀の命あらむと頼みは依頼ありわが心一つに依頼するありわが心に依頼するはとりもなほさず希望あり目的なり希望あり目的あればこそ人は世上に長へ居らるれ希望は大あるべく目的は失ふべからず希望を遂行し目的に到達せむはたゞそれわが心一つに

頼まざるべからずわが心一つに頼まむはよし言はで思ふはむしる進みて言はむに加かざるなり機會は待たざるを得じとこそいへば自ら作らむの勇氣と決心とあからでやは運と果報は寐て待て柵から牡丹餅等の諺は未だ半面の觀察たるに過ぎじものをや萬葉集卷十二ある

人言はまことこちたくなりぬどもそこにさはらむわれならかくにもしくは

思ひ念力岩をも透すおんのそなたが一重垣都々逸

の如き積極的熱誠をくんば心一つの頼みといへども決して成立せむの期あるべからじ。

柳川 檢校

門に立ちたは八もじさまか夜風身の毒こちをざれ。

三絃小唄端手組の唱歌あり近松の冥途の飛脚下卷に引用せるには

門にたつたはしのびの夫かえ野風身の毒こち入らまやんせ

とあり元祿貞享の頃にいたるまでなほこの唄の行はれけむことしるし

◎門にたちた。この時代をほかゝるところに音便を用ゐざりけむ。たはたるの略せられたるもの。◎八もじ様。八兵衛とか八藏とか言ひけむ。名なりしあるべし。もじは文字なり。女子の通語にして物名を頭字に附して名詞を形つくるに用ゐる語あり。女子は物の名を、あらはにはぬが、奥ゆかしとてのすさびありけむ。御目もじ、御はもじ、御かもじなど、皆同例なりとす。今下流社會に行はるゝ氣ぶるし(氣狂ひ)熊ぶるし(熊といふ人名)などの類も、これと同性質あるべくおもはる。◎ちこそざれ。此方へ來れあり。ござるは有るの敬語なれども、場合によりて、來る居るおごの意にも用ゐらる。

門に立ちて居給ふは、八もじ様にや。それよ、まことに、八もじ様なり。何とて、早く入り給はぬぞ。夜風にさらされむは、御身の毒ぞかし。いざどく、此方へ、おん入りあれやと。門に立つらむ。戀人の姿、夜目にも、いかで見まがふべき。來むか、來じか、ど氣をもみたるほど、うれしさ加ふるは、今の歡會からずや。燭をとりて、ひそめき出づれば、果して郎あり。夜色冷かにして、風露を帯びて、吹く身の毒の一語、いかる力をもちてか、紅唇を洩れけむ。情愛、身を率ゐて、そゝる郎が、手をとらしめ、つらむよ。身の毒の下に、かりあれば、いふが如き、説明語の來るべきを、さはあらずして、うち略

き去りたる郎を導き入るゝに。些の暇あかりしかば、ならむ。羞を包みて、あらはにせず。まかも羞あり。嬌含りて、あらはならず。まかも嬌あり。羞態、嬌態、言句の間を往來して、讀む目、あやなるこゝちぞす。ある。

思ひ出すことは忘るゝ故よ。おもひ出さぬよ。忘れぬは、

作者知らず

弄齋節の唱歌なり。弄齋又は籠濟とかき、朗細と書く。その作歌者の名なりや。はた、作曲者なりしにや。今、これを知ること能はず。隆達節に次ぎて、起れる曲名なり。忘るゝ故にこそ、思ひ出しもすれ。終始一貫、忘るゝことのなからむには、思ひ出すといふことのあるべき筈なし。人を思ふこと、絶間なくんば、殊更に、何の思ひ出づることかあらむと。この歌、多少、推理に傾きて、情味の淺きをいたしたれど、おほ詩趣のあきにしも、あらず。悟るは、迷ひの一面あり。笑ひにこもる、悲みあり。忘るゝ時、既に、思ひ出すを、孕み居るもの、とすれば、思ひ出すは、やがて忘るゝは、はじめからざるを得じ。常住といひ、不斷といふ、世上の通語、味ふに堪ふ。思ひ出し、笑ひは、なほ恕すべし。忘れ遺物は、無きに加かず。兩性間の情交、豈ひとり然らざらむや。三句のよ、

四句のよ、重複せるは、耳觸りなり。樂器にのぼすも、聴きよからじ。
かの高尾の文といへるが中ある

思ひ出さねばこそ忘れず候へ。

の名句は、或はこの歌の二番煎ならざるあきかいか、後の端唄にも思ひ出さず
に忘れずにの如き句あるを見る。その基せるところは、蓋しこの歌あるべし。

あらい風にもあてまい様をやるか信濃の雪國へ。 作者知らず

元祿十二年板の紙齋に載せたるひとよぎり(尺八)唱歌なり。この歌後にいたるま
で傳りたりげなれども、そは、おほく、

花のやうなる若殿様をやるよ信濃の炭焼に。

とやうに、轉訛し果てぬ口惜し。

◎様。誰様といふべき敬稱接尾語あるが、本來の性質ならむと誰しも思ふべけれ
ど、さにはあらず。足利時代の末頃より、徳川時代の初期にかけて、女子の男子を
呼ぶある代名詞として用ゐられしものなり。おもふに、そさまと言ひけむが、略かれ

たるならむ。そさまは、そなたと同意なれば、さまは、即ち方の意に均しからむ。今の
世、あはかつ、あの方、ごの方など、は言ふゆゑ、近松以來の淨瑠璃などにも、あの方
んには逢ひともちいなど、この代名詞を用ゐたる例甚だおほし。◎やうか。遣らむ
かの音便、やうかの約りたるなり。かは、かの父母をかきてや、永くあが別れなむ。
ながさか、が夜をひとりかも寝むなどの、やかに同じき助辭にて、ひたすらうち嘆
ぐ意のこもれるあり。故に、こは、遣らざるを得ざることかとの義と知るべし。
わが夫君は、信濃へ赴かむとて、旅装ひをし給ふよ。信濃は、名高き雪國なり。朝冷夜
寒、いかばかり烈しからむ。今日が日までは、一吹き風にもあてまいものをと、心か
げこし、いとしの、夫あるに、たゞ一人、かの雪國へ、遣るべくありぬと思へば、思
へば、あゝ、胸痛くて堪へられずと、哀別離苦、それ、これを如何にせむ。天を恨むも、か
ひかく、人を恨むも、またかひかく、泣きてせむ、かく泣かすして、なほせむなし。身を
挺して、夫を劬勞せりけむ。妻の情緒、いく重纏綿して、この歌を成しぬ。その言や、哀
しく、その聲や、切なり。哀切、恰も、嗚咽すらむが、如く、讀む身、おぼえず、ひき入れられ
て、ぞ、いゝ、悲痛の感に、堪へず。祖道送別の歌、その數百を以て、かぞふべきも、古往今
來、この上に出づるもの、果してあるか。萬葉集中の抒情詩、皆、天真の流露を見る。そ

の離別の歌

二人ゆけど行き過ぎがたき秋山をいかでかひとり君が越えなむ(卷二)
か思ひそと君は言へども逢はむ時いつと知りてかわが戀ひやまむ(卷二)
家もふどさかしらあせそ風まもりよくしていませあらきその道(卷三)
天地の神もたすけよ草枕旅ゆく君が家にいたるまで(卷四)

等はいづれも摯實にして、人の同情を牽くに堪ふれど、なほこの歌の婉切に及ぶものあらし。

あらい風にももの文字殆どさへも(すら)の意を有せりまして、信濃の雪國をやとの餘意、これがためにぞ認めらるゝ。あてまい様をのまいなる一助動詞、うべもこの處に措かれたる哉、あてまいはあてまいにあらす。あてまいものをと心に思ひ定むるありまいは、じに均し。じは心一つに打消す助動詞なり。その實際に伴ふや、否やはさておき、わが心にしかと定めていさゝかの疑ひをも挿むことのあるらぬ時にこそ、この助動詞は用ゐらるれ。夫を大事にどの熱誠は、たゞこの一語に集中せられて、情操の苟も冒すべからざるものあるを見る。三句の上三音や、ろかど、截斷して、下に續けざる音節、おのづから切迫して、かの音最も高調によく感情の憤

併に伴へり。三句の下四音徐々として低きに附き、五句の雪國へにいたりて、ますます緩なり急なるもの短く緩なるもの長し。こゝに於いてか、餘韻、嬌々として絶えむの時なし。かくの如きの句法は、俗謡の常に有するところのもの。やるぞ、この文江戸までも見やれ、茨にも花がさく、なんのそなたの一重垣等、皆しかなり。和歌に於ては、たゞ萬葉集に、その例あるのみ。殊に、こゝのやろかの如く、かの一音の全體に徹底せるものか、はたや今宵ものやを除きては、別に、恰好なる匹を見出し能はず。
年少氣銳の士も、し歌に志あらば、浪史く早く、伎工の上に出づべし。詩形の如何は、問ふを要せず。修辭の研鑽、何の特むところぞ、今に媚び古を宗とするは、愚の愚なり。名を街ひ功を競ふは、陋の陋なり。無名の作者、歌亡びす。

作者知らず

はなればなれのあの雲見れば明日の別れもおもはるゝ。

この歌、淋敷座之慰には、四五句、明日の別れもあの如くとあり。或は、様よあれ見よあの雲ゆきを様と別れもあの如く、

と唄ふ地方もありとか。今は河東節の夜編室中に引用したるによれり。
情人來るまづ何をか語らむ窓を推せば天全く暮れぬ根なし雲あり忽ち凝り忽ち散る。一夜の歡會も亦かくの如きか鶏鳴曉を催さば人は躊躇せずして歸るを急がむ。そのをりのつらさ今より思ふも胸苦しや。さても逢瀬ほどはかきさものはあらぬか。あど嬌情零るが如きは珍しからじや。逢ふは別れのはじめとは蓋し不易の斷言なり。逢うて別れが無けりや。よいの如き無理なる注文も亦人情の動くに隨ふ言たらずとせむや。そもく雲は無心にして徂徠すれど有情の人。これを見て思ひを寓す。荷も胸に蟠る思ひ。あらむか。耳目に觸るゝほどのものいづれか。好個の詩材たらざる情の濃かあるにあへば水の音風のひびき皆生命あり。この歌他の奇なし。奇なきが故に吟誦に堪ふ。

作者知らず

様と別れて松原ゆけば松の露やら涙やら

肥前地方に行はるゝ田唄あれどももど如何なる種類の唱歌ありけむいかある時代の製作なりけむ。今詳にすること能はず。

◎松の露やら涙やら。松の露にか涙にか更に差別あしとなり。やらは名詞に副ひて副詞を形つくる接尾語にてやらむの略かれたるものあり。やらむはにあらむの約言あるべくにあらむはにあらむかの略言あるべし。

君と相別れてたゞ一人行く。松籟ものがあしくわが心やまし。滴々として香り落つるは松露か。松露のみにあらず。涙か。涙のみにあらず。絶間なき胸の思ひ。いかにして遣り得むか。情致景致兼ね備る。涙に汚れし膩粉をつくるひあへず。松影婆娑たる白砂の上をなづみ行くらむ人のうしろかけ憔悴たるものあるをおぼえむ。無心の松露必ずしも無心からず。渾然この婦の涙と融和し去りぬ。蓋しこの婦の狂熱やおのづから自然に合するものありしからむ。一首玲瓏として崑玉を見るが如く。一たびこれに觸れむほどのもの誰か陶然たるるひごちあきを得べき。萬葉集卷二ある。

わがせこを都へやると小夜更けてわかとき露にわがたちぬれし。

といふどもはたまた頼政集の

君待つとたてる木かげの雫さへ涙につれて落つと知らむ。

といふどもこの歌に匹せしめむに。おほ數歩の後に在らざるを得じ。

初句様と別れてと言へるとの一字活きあり地方によりてはこの句君に別れて
と唄ふとか聞くさては如何にして送に相別れけむ風情を含ませ得べき君が家
より別れ來しにはあらで君と路頭に相別れしあるをや君をどこまで送り來し
にかざらばまたの逢瀬をなど契り合ひてかたみに袖をしぼりたりけむ君とは
からず相會ひしにかざらば來給へうち連れてなど言ひをいきて心にもあら
ず別れ來にけむ旅立つ君かあらぬか果してさあらば松原どしに笠の見えずあ
るまでうち振る袖の隠るゝまで相共に見おくり見かへりけむよ無量の情味掬
すれどもつくるところにあらす四五句の疊語河等の精緻何等の婉麗言つきて
意つさず餘意餘情縹緲たるものあらむ

船ちや寒かろ着て行かしゃんせわしが着替のこの小袖。 作者知らず

端唄部類に載せたるにはこの末に誰に遠慮もかいわいな的一句あれども蛇足
に過ぎねば今は常盤津三つの朝中より抽出せりこの曲に於てはこの唄二上り
に唄ふと聞けどもとは如何なる節の唱歌なりけむ詳かあらずとまれ一たび吉

原の遊女らが口の端にのぼりけむは疑わらず

◎船ちや寒かろ。船にては寒からむによりてありぢやはではの轉訛でははに
てはの約あるべし寒かろのろはらむの音便らうの約りたるものなり◎行かし
ゃんせ。行き給へなりしゃんせはせさせの約言あるさせの訛りたるならむか
さんせさんすあぞ、も言ふ徳川時代の初期に生れたる狭斜語あり。

君は今船にて歸り給はむとやさては波上の寒さのおしはからるゝをせめては、
この小袖召して行かせ給へ。こは妾の着替ありいざ召しませ召して寒さを凌が
せ給へと温情蒸すが如く嬌態零るが如し側の見る目も憚らでおのが小袖を郎
の肩に被りけむ時いかに魂のすゝしかりけむ憂くつらき世間の事いかでこの
利那をば襲ひ得むや天上の歡樂まのあたりに世はたゞ二人ありしならむ初句
船ちや寒かると言へるぢやの一語苟もせずこれあるがためにいつも駕籠にて
歸りかれば今日は試みに船にて行かむ船頭の氣のきいたるを撰びてあぞ
郎の言へるにさては寒さをおぼえ給はむにと女氣のいと心づかひしけむと
さへ聯想せらるべけむ着替の小袖を簞笥よりどうで、玄つけ糸とりながら嬌
をふくみけむ少婦のおもかげ言表に躍如たり着替の一語決して失ふを許さず

若しこの語かりせば、詩情の一半は、正に、滅殺せられぬべし。
萬葉集卷十五

別れなばうらがあしけむあが衣下にを着ませたいにあふまで、
及び貫之集ある

玉銚の道の山風さむからし、下にを着ませかたみがてらに。
あど、これと、殆ど同一ある情致あれども、婉深あること、到底及び得べからじ。

もしや途中で雨降るならばわしが涙ごおもはんせ。 作者知らず

潮來節唱歌ありこの歌

博多沖から船漕ぎ出す。もしも船中で雨を降らばわしが涙と察しておくれ。
と改作せられて、近き頃まで、歌澤節の端唄にうたはれたり。

◎思はんせ。 思ひ給へと言はむが如し。思はせに、んの添りたるなり。せば、助動詞。
「天の浮橋にたゝして」汝が名のらさねあどやうに、上古より用ゐられたりしを、平
安朝以後、文語には、殆ど、その跡を絶ち、言語の上のみ、名残をとゞめたり。

君は、今、旅立ち給はむとす。行程杳として、歸期はかり難しとや。さて、われ一人、家
に留りて、如何に、日をおくらむ。おもふに、日毎、たゞ涙あるべし。君よ、もし、行路、
日暮れなむとする時、雨の蕭々たるものあらば、そは、わが涙とおぼし給へ。今より
後は、ひたすら泣きてあるべきものを。かく言ひもあへず、顔を掩ひて、嘔り泣き
けむ。旅行く人は、た、門、べに、た、ゆ、た、ひて、征衣の袖を、沾しけむ。事實を、超過するは、感
情の、激越に、伴ふ、必然の、言あり。人戀ひて、泣かむ。涙は、かぎり、知られじを、この、歌、よ
く、自然物ある、雨を、捕へて、無量の、情致を、諷託せり。涙を以て、詩材とあしたるもの、
古今、その、例、尠からず。或は、敷妙の、枕ながるゝといひ。或は、われは、堰きあへず、瀧つ
瀬なれば、といひ。血の、涙、といひ。涙の、淵、涙の、川、といふ。萬般の、詞工、遂に、この、歌の、自
然に、優ること、能はず。萬葉集卷十五ある

君が行く海べの宿に霧たゝはわがたちなげく息と知りませ。
のみ、この、歌の、情趣と、相一致したる、いはゆる、同巧異曲と言ふべきものか。

十四夜少女

うきあがらうらやましきは、ありの、關をも、知らぬ、涙ありけ

り、

この少女は、大津の小野某の女あり、年十四ありける頃をりにふれたる、

人あらばうき名やたむ。小夜更けてわが手枕に通ふ梅が香。

といふ歌、恰く、世上のもてはやすところとなり、遂に、誰いふともあく、その家を、十

四夜と呼びおしたりきといふ。小野某は、天正年中の人。

◎うきながら。心憂くはありながらもなり。◎は、かりの關。陸奥にあり、憚る

べき人目の關との意を寓したるあり。寄關戀なる題によりて、詠めるおれば、

一首の意人、うき名を歌はれむが、つらければ、わが心を抑へて、面には、もの思はし

き色をも見せじと、つとむるものを、涙は、さりととも知らずして、はふり落つるよ。か

くては、色をつゝめるかひもなく、人に知られむの恐れあり。これ、まことに、心憂き

かぎりながら、さて、羨しきは、憚るべき人目の關をも、知らず顔なるこの涙ある哉

と、かりげに、涙ばかり、心任せに、ならぬは、あらじ。情を、控制するほど、おほは、ふり落

つるは、いぶかしきまでなり。泣けども、盡きざる涙は、由來、熱誠の化身ならず

や、熱誠の、進るところ、涙、必ず、湧く。その間に、些の間、隙、おきなり。泣きたければ、即ち

泣く。これ、人間の、本意、本能、本意に、背くも、人目の、故のみ、人目を、わびて、泣かざらむ

とす。泣かざらむとすれど、えもあし、果てず、遂に、涙は、従は、ざるあり。意思に、於ては

憂く、情に、於ては、羨む。初二句の、巧緻に、して、自然を、失は、ざるに、ながらの、一語、能く、

その、處を、得て、この、機微を、捕捉したり。この、少女の、才華、豈、驚くに、堪ふべからずや。

勅撰集の、いづれに、かこを、挿みて、遜色、あらむ。金葉集の

いかに、せむ。數、あらぬ、身に、した、がは、でつゝ、袖より、落つる、涙を、

の、如き、に、いたりては、この、歌の、類に、して、去、かも、この、歌に、及ば、ざること、遠し。作者、

不幸に、して、末世に、生れ、古名人、と、伍すること、能はず。遺恨、何ぞ、堪へむ。むし、る、數、世

紀を、後れ、しめて、古學、勃興の、時代に、遭は、せたら、ましかば、造詣、する、ところも、多、か

ら、ましを、くや、しくも、縣門の、三才女、をして、その、文名を、擅に、せしめたり。は、かり

の、關に、諷託したるは、時代の、累、また、如何とも、せむ、あし。

作者知らず

來る。か。來る。か。川。裾。見。れば。河。原。柳。の。音。は。か。り。

會津地方の盆唄なれど製作の時代を明かにせず。同地方に於てすら、今は、唄ふこ

と稀になりぬ。

わが待つ人は、かごとく遅き堪へかねて家を出でぬ。その人もや見ゆると川裾の方に眼をおくれど、更にせむをした。河原柳の春風にふれて習々たる音を發するあるのみと。人待つ人の心ばせ、かくあらむは當然あり。鳥をかぎりに、かのさまたてばさむき嵐も身にしまぬ。端手組唱歌とは言ふものから、おは胸裡のむすほはるゝをどいめ得ざらむ。婿々たる柳條、春風に吹かれて無心に鳴り物思ふ人をして苦惱身をおくに處あからしむ。愁思低迷いかにいかに萎頓せりけむ。人もし、一たびこの歌を吟せば自ら斜坡に立ちて晝裡に入れらむ思ひあるべし。初句の來るかゝの調子、すでに氣のもめたらむ趣あり。いつまで同じどころに立ちつ居つしたりけむか。四五の句、河原柳の音ばかりの十二音、作者はいかにしてか、思ひ得たる眼を閉ぢ頭を傾けて、去かる後に誰かよく探り能ふべき吟後の餘韻、永く耳邊に搖曳たるものあらむ。

萬葉集卷十

わがせこを今かゝと出で、見ればあわ雪ふれり庭もほぼろに、
同卷十一

馬の音のどいともすれば松かけに出でいぞ見つるもしも君かど

の如き人待つほどの心まらひ古も今も異なるをきを見ずや、ことに今かゝどこの口吻にいたりてはこの歌の來るかゝとに宛然たり。全く同一人の手に成れるかの感あくばあらず。さばれ詞意の靖深、この歌の如き萬葉のといへども、おほ拮抗すべからじ。たゞ後の都々逸
止めばそれかどつひだままれてエ、もちれつたい虫のこゑ
は僅にこの歌の亞たるを得むか、一は絢爛を脱して平淡の域に達したるもの、一は未だ絢爛の域に安んずるもの、たゞに於てか岐る。

思ひすつるまかあはぬごても縁さうき世は末を待て。 作者知らず

萬治三年板の吉原小唄總なぐりに載せたる歌あり。

◎思ひすつるま。 自暴自棄するまと言はむが如し。思ひあぐみての果に、いはゆるやけをおこすまのこどあり。◎縁と憂世。 縁は自然のめぐりあはせ。憂世は、この社會を愛しと觀じたるよりの言あり。
戀に寢るゝ人の子よ落膽すること勿れ。落膽して、自暴自棄すること勿れ。たとひ、

望はかゝはずとも、そはたゞ一時の休戚のみ。一時の休戚によりて、意をくさらし、
氣をつぶさむは、むしろはじめより、人を戀ひざるに加かず。一たび、人を戀ひそめた
らむ上は、棄つべからず、失ふべからず。縁は、豫知しがたく、世は、長へにつらからむ
や。ともに、末の末かけて、望を属して可ありと。これ、蓋し、自然が人間に與へたる慰
籍の聲か。何ぞ、それ、侃々として、人の容姿を正さしむる理想は、永久あり。希望は、無
限あり。一蹉一躓、おもふに、一瞬の時間に過ぎじ。十年二十年、これを、この世の永さ
に比ぶれば、芥子粒ほどの違ひもないとは、思ひたらずや。世界の進行は、間斷を
殆ど、現在の存するを許さず。既に、現在を、たゞ、未來あるのみ。未來は、杳たり。理想
と希望と、何ぞ、そこに宿らざらむや。世の、薄志弱行、ともすれば、瞿々として、自ら、泰
んせざるの、徒とくく、この歌を、哦して、自然の教誨を受けよ。意志の確立は、どりも
あはさず。人間存在の意義あり。情智の按排も、必ず、意志の力を、籍れ、情は、情の趨く
ところ、智は、智の向ふところ、おのづから、その、定め、あらむ。去かも、あは、意によりて、
陶冶せずんば、人は、遂に、如何し、得べきぞ。
初句、まづ、思ひ棄つるかと、言ひ切りたる、峻嚴にして、冒瀆すべからず。二三四句、
徇々として、さかながら、賢哲の言を、聞くらむこゝち、す。末を、待ての、命令的、ある、能く、

初句に相應せり、待の一語、意深遠あり。待ち待ちて、待ち通さずんば、遂に待ちたる
かひなからむぞ。待つべき末は、何日とかあす、われ、これを、知らず、知らざるが故に、
待つあり。無始より、無終に至るの間、いづれ、彌勒の世、あらむ。あり。萬葉集に、いはす
や。

天地を照す月日のきはみなくあるべきものを、何か嘆かむ。(卷二十)
と嘆くといへども、死あは死を、嘆かすといへども、生さば、生さむ。たゞ、待て、未來
を、過去は、趁ふべからず。又、萬葉集にいふ。
命をしまたくし、あらば、ありきぬのありて、後にも、あは、さらめやも。(卷十五)
天地の神に、祈りて、わが、戀ふる妹に、必ず、あは、さらめやも。(卷十三)
天地の神し、ことわり、あくば、こそ、わが、思ふ妹に、あは、す死に、せめ。(卷四)
これら、いづれも、この歌と共に、積極的、信念を、發展したるもの、かばかりの、熱誠、あ
くんば、如何にして、か、戀を、遂げ、得む。末を、待たずして、これを、棄て、むは、意思の、薄弱
あるのみに、あらず。また、情操の、輕浮、あるを、あらはす、所以、あり。情操の、前に、敵は、あ
らじ。長へに、その、力を、保たむ。こと、易かるべきを、や。
添は、れまいとは、そり、や。氣の、弱い、石に、立つ、矢も、ある、わい、を。(潮來)

五月雨心をしづめかしやんせ待てば甘露の日はあたる(都々逸)
など言ふものいづれか戀愛の第一乗に入らざるべき生命の長短よしわか心任
せならずといふどもそは問ふべきかぎりにあらず
あす知らぬ命をぞおもふおのづからあらはあふ世をまつにつけても(新古今
集)

縁さへあらばまたもめぐり合はうが命にさだめあいほどこに(隆達節)
かぞ嗟嘆するを止めよ嗟嘆するを止めてたにめぐり合はむの時機をあり待
て現在に於てかあはぬとても決して思ひすつるあどぞ世路の坎坷我に於て何
かわらむ。

戀愛詩評釋終

戀愛詩評釋校正

- 八田の一本菅は云々
二頁の十行に「措辭」とあるは「措辭」の誤りにして、五頁の八行に「同じ緒」とあるは「同じ緒」の誤りあり。又三頁の六行ある「披瀝」の「披」に施したる。點は、點たるべかりしあり。
- はしたての云々
七頁の六行「見れば悲しものれはねからざるべからず。八頁の八行ある「辞藻」の「辞」は「辭」とあるべきあり。
- わがせこは云々
十頁の十三行ある「感嘆辭」の「辭」も亦「辭」と改めてむ。
- みよしの云々
十八頁の七行に「割折」とあるは「割折」のあやまり、同頁の十行に「沖つ白波」とあるは「沖つ白波」の誤りあり。
- みよしの云々
十九頁の九行に「はたは脚結抄に云々」と言へるまことは、富士谷御杖の萬葉集

燈に亡父成章の説とて、擧げたるありしを、そゝるにせしは、わが罪あり。殊に、脚
結抄とさしたるは、挿頭抄と思ふ。書き誤れるありき。はたは、副詞をれば、脚
結といふべきものにあらず。かばかりの事、誰か知らざらむ。さて、挿頭抄には、た
の意を解きたるは、同じ人のかれど、精しからず。

○二十頁の十五行「いまたは、いまだ」とあるべく、二十一頁の五行「空き」とあるは、
「き」とせではかきはす。同頁の九行に「全体」とあるは、體と改むべし。

○石見の海云々

二十四頁の十二行ある「波の高さわざはもとより、波の音さわざ」の誤り、二十六
頁の二行ある「万葉集の万は萬の誤りなり。二十八頁の十四行「中」とあるは、
「中たるべかりし」ところ。三十二頁の末行「あぢむら」とあるは、
「あぢむら」からでは聞えず。

○淡路の云々
三十三頁の一行二行ある歌の傍には、共に、點を施すべきを脱したり。

三十四頁九行「あらすはやまじ」のははばとあるべし。同頁の十行「そらみつ」には、
、點なかるべからず。三十五頁の四行なる「ものさびしき」は「ものさびし」とる

二

べく、三十七頁の九行ある「はしめすは、はじめす」たるべきあり。

○わがせこは云々

三十八頁六行「同じき」のしは、じの、同頁十一行「手はかれ」のはは、ばの、同十二行「万
葉集」の万は萬の、いづれも誤りあり。

○君待つと云々

四十二頁の十三行冒頭に「待つ戀ひ」とあるは、に「待つ戀ひ」とすべかりしあり。

○難波人云々

四十四頁末行「めつらしき」四十五頁二行「めこらしき」五行「めつらしき」は、いづれ
も「めづらしき」とすべきところ。

○千早ぶる云々

四十八頁の四行ある「はしめては、はじめて」の誤り。

○劔太刀云々

四十九頁末行「劔太刀」の刀字位置を誤れり。五十頁十行「そのを意」とあるは、その
意を「とあるべきを、轉倒したるあり。五十二頁の四行「一折は、一折」の五行「鳴り」は
「鳴り」の「しづめ」は「しづめ」の、いづれも誤り。同頁の七行「致の下に」しを脱したり。

三

○玉敷ける云々

五十三頁の十一行「ものくはものく」とあるべくむしろ都あるもの都なるものと正しく書きたるをよしとせむ。

○天地に云々

五十五頁二行「またはいまだ」の誤りなり。

○露霜の云々

本文中「わが、かへり」とあるは「わが、かへり」からざるべからず。五十六頁十三行「あちのすむは、あぢのすむ」の誤り。

○しき島の云々

五十九頁二行「あ」と「あ」と三行「か」下の「は」が下の「と」いづれもあるべきところあり。六十頁三行「万葉集は萬葉集、十二行「未だは未だ」のいづれも誤り。六十一頁の四行「在り」の傍點は、點たるべく、同十一行「べからじ」には、點を施すべし。同頁十四行の「あらむは、からむ」の誤り。六十二頁の五行「万葉は萬葉の、これもまた、白妙の云々」

六十五頁十一行「一ッ、松は二つ、松とあるべく、六十六頁四行「婉約は婉約」とある

べし。

○わかせこが云々

六十七頁九行「いづ、またはいづ、またの誤り、六十八頁六行「一頓拆は、一頓折」の誤り、同十四行の「または、また」の誤りなり。同頁の七行「もの」の傍點は、たるべし。

○さにづらふ云々

本文二行「あおほせは、あおほせ」とあるべきところ。七十七頁六行「過ぎは過ぎ」の、八十頁十行「快らむは、快らむ」の、いづれも誤りあり。

○あつ、云々

八十二頁十四行「思はれぬば」の「ぬ」は「ね」の誤り、八十三頁六行「尽さずは、盡さず」の、同頁九行十行の「いまたは、いまだ」の、いづれも誤りあり。同頁の七行「ゆるが如き」の上にも、を脱したり、補ふべし。八十四頁八行「あらずは、あらず」とあるべし。

○くらべこし云々

八十五頁十行「年頃を」の下に「る」を脱す。あらはるは、あらはるとあるべし。八十六頁の五行「うがふは、うかぶ」とせではかゝはず。十三行の「調謬は、綱繆」の誤り。十四行の「ぬ」に、點を脱したり。

○月夜よし云々

八十九頁初行「よろしき」の下に、をを脱したり。九十一頁二行の「き」には、點たるべく、三行の「よ」には、點たるべし。同頁の十四行「自己」とあるは「自己」の誤り。

○天の原云々

九十三頁八行「吟哦するにば、吟哦するに」とあるべく、九十四頁十二行のみ「い」は「は」のみは「い」は「じ」とあるべきあり。

○偽の云々

九十四頁十一行もの、あればは、もの、あればの誤り。九十五頁の十行「能はさるは、能はさる」の誤りあり。同頁末行「偽」の位置を誤る。

○月やあらぬ云々

九十六頁五行「五條」の傍線を除きて、上に、「一」をおくべし。八行「月傾くまで」は「月」傾くまで」とあるべく、九十九頁五行「硯は、硯」とあからでやは。

○ある時は云々

百二頁七行「桃の天」に、點を施すべし。

百三頁八行「源氏盛衰記」は「源平盛衰記」の誤りあれど、この歌は義經記に載する

ところたり。記憶にまかせしそ、ろはし、さ、われあがら、かたはらいたし。

○そこひなき云々

百九頁十一行「そこひなき」の上に、◎をもらしたり。補ふべし。

○世中の云々

百十七頁九行「ものを」の傍に、點を脱したり。施すべし。

○あふまでと云々

百十八頁末頁の和歌は、一字下げむを要す。

○聞ちかき云々

本文中「頃あか」の傍に、點を施さるべからず。

○君があげこし云々

百二十三頁十三行「たらむ名は」た、む名」の誤りあり。

○契りこし云々

百二十八頁末行「除」は「徐」の誤り。これ歌の傍點を除くべし。

○はるかある云々

百三十二頁の三行に「心づかもなく」とあるは「心づかひもなく」たるべきを、脱字

せしかり

○かへるさの云々

百三十六頁の三行物かなしきは「物」がなしきたらむぞよき。

○よしかの云々

百四十一頁四行ある「空」たのめは「空だのめ」。

○うとくなる云々

百四十五頁の五行「想かのか」には、○點を要す。

○もしや途中で云々

百六十頁十行「漕き出すは漕き出す」とあるべし。

○來るか〜と云々

百六十五頁の五行ある「だまされてはだまされてたらざるべからず」。

○思ひすつるを云々

百六十八頁三行に「あらず」とあるは「あらず」の誤りあり。

○以上の外にも、句讀點の誤りたるはあらむあれど、今一々こゝに正すに違あらず。版を再びせむをり、契つて、その訂正を期せむ。
(十一月十四日校了)

明治三十三年十一月廿二日印刷
明治三十三年十一月廿五日發行

定價金三拾五錢

著者 服部 躬 治
東京市本郷區淺草町六十四番地

發行者 三 樹 一 平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 宮 本 敦
東京市神田區雜子町參拾四番地

印刷所 宮 本 印刷 所
東京市神田區雜子町參拾四番地



發行所 東京市神田區錦町一丁目 明治書院

明治書院出版圖書目錄

落合直文 合著
小中村義象

七版

大鏡詳解

クロース製
全一冊

定價金壹圓六拾錢 小包料百里以上廿四錢
分本和製定價花鳥の巻金三拾五錢 郵税金四錢

國文の通弊たるや、流暢麗麗なるも浮華纖弱に陥り易きにあり。獨り大鏡は然らず、流麗にして莊重、而も藤原氏全盛時代を細叙したるものなれば、國文の模範たるのみならず、國史研究者の必讀すべき書也。然るに古來完全なる註釋書なきは豈に遺憾ならずや、本書は落合小中村の兩先生が、該博なを學識を以て、之を精細註解せられたるもの也。兩先生の斯道に精通せらるゝは江湖の既に知らるゝる本書の眞價に至りて贅言を要せざる可し。

落合直文 校
小中村義象

大鏡讀本

上卷 金二拾五錢 郵稅四錢
下卷 金三拾五錢 郵稅六錢

故文學博士 小中村清矩 閣
和田英松、佐藤球合著

五版

增鏡詳解

背皮製
全一冊

定價金壹圓七拾五錢 小包料百里以上廿四錢
分本和製定價上中下各卷四拾五錢 郵稅各六錢

増鏡は大鏡と同じく三鏡の一にして鎌倉時代の國文歴史也、而して其文章の雅健なるを、記事の正確なるを、國文國史研究者の必讀書也。然るに其は、古來註釋書なきは、學者の大に遺憾とする處也。本書は和田佐藤の兩先生が、多年の苦心を以て、故小中村文學博士の懇篤なる校閲により成りたるものにて、考證の確實、釋の詳密なるは稀に見る所のもの、加ふるに附録一卷は、詳解の索引、系圖其の書引年表、京都圖、同附近圖、里内裏圖、清涼殿圖、寢殿造圖、等を編成したるものなれば、増鏡研究者のみならず、歴史家の机上欠く可からざる也。

和田英松 校
佐藤球 校 文部省檢定済

增鏡讀本

和裝全三冊
定價四拾五錢 郵稅八錢

落合直文編 文部省檢定済

中等國文讀本

全十冊

定價一ヨリ四迄各二拾錢 郵稅各四錢

本書は、落合先生が、高遠なる學識と幾多の研究により編次せられたるものにて、材料の豊富、程度排列の適當なる、以て讀書力を養ひ、作文の模範となし高雅なる思想を養ふ等國文讀本の眞目的にかなへるもの、一度世に出づるや非常の好評を得て、各學校に於て續々採用せらるゝの榮を蒙れり。然れども、編者の斯道に思なる猶之を以て足れりせず。程度の適否分量の過不及等、實際教授上の得失を、中學、師範、高等女學校等の當局教員諸氏の意見に徴し之を參照して一大校訂を加へ、文部省の教科書標準により、版を改めて更に公にせられたり。以て本書の完璧無瑕、世の滔々たる國文讀本なるものに比して、差隔天淵のみに非ざることを知るべし。

落合直文著

日本大文典

皆皮製 全一冊

定價金壹圓七拾五錢 小包料百里迄拾貳錢以上廿四錢 定價一、二、三各四拾錢 四拾五錢 郵稅各四錢

落合直文校閱 文學士 內海弘藏著

中等日本文學史

クロース製 全一冊

定價金六拾五錢 郵稅金八錢

落合直文著 訂正三版

新編假名遣

定價三拾錢 郵稅四錢

明治書院編輯部編

中假名遣教科書

定價拾二錢 郵稅貳錢

故文學博士小中村清矩著

歌舞音樂略史

日本紙刷 全二冊

定價金七拾錢 郵稅六錢

我神代の歌舞音樂より、徳川氏時代の歌舞伎、淨瑠璃、小唄、長唄、三絃、鼓の類に至る迄、其事蹟、起源、沿革等を細叙し、猶、數十葉の圖畫を附して、説明したるもの、文學者の机上欠く可からざる書也。

今泉定介校 鳥野幸次編

文部省檢定済

訂中學國史

和裝 全二冊

定價上卷貳拾錢 下卷三拾錢 郵稅各四錢 中學初年級歴史教科書として能く其程度を考へ時間を量り、尤も簡明に編著せられたるもの也。

延岡中學校長 山崎康午太郎 合著 文部省檢定済

訂日本史要

クロース製 全一冊

定價金七拾錢 郵稅八錢 本書は文部省に於て編定せられたる中學歴史細目に則り、之より多少の補修を加へて編纂したるものにして、其体裁や簡にして要を得、其文章や平易にして流麗也。

關根正直著

訂更科日記略解

定價卅五錢 郵稅四錢

平安朝時代に出でたるものにて、浮華淫逸の風なく、佳構貞操、女性之風采を見るは、獨り此更科日記のみ、然れども舊本頗る錯亂多く解き易らざるを以て、著者弘く異本を考證參照して其錯亂を正し解釋を加へ年表を添へたるもの也。

大久保初雄著

日本中文典

全二冊

定價正編金廿五錢 續編金三十五錢 郵稅各四錢

近來日本中文典の著多しと雖も、繁簡其當を得ず、以て中學程度諸子の指導たるもの甚だ稀なり。本書は、著者が考案し、多年實地授業の經驗より因てなりたるものにて、正編に於ては、初學者に雖も通曉し易き様、文典の全体に付き簡單な説明を與へ、續編に於ては、必要なる部分を選びて詳説し、且つ各編の終に應用問題を掲げ、以て練習に便ならしむる等は本書の特色なりとす。されば中學程度の教科書には勿論、高等學校入學試験、教員檢定試験等受験者には最も適切なるものなり。

文學士 大林徳太郎 合著 文部省檢定済

訂日本文典

和裝 全三冊

定價上下各金十五錢 中 金二十錢 郵稅各四錢

本書は第一卷に音聲、第二卷に品詞、第三卷に文章論と、編を分ち極めて平易なる文章を以て國文典の概略を敘述したるものなれば中學程度の教科書として尤も適當なるものなり。殊に編中處々に例題及練習問題を挿入したれば是によりて生徒の實力を養成し亦既修の習力を統括するを得べし。

和田英松 球合著 六卷迄既製

榮華物語詳解

和裝美本 全拾五冊

定價每冊金四拾錢 郵稅六錢

一卷より一帙入定價金貳圓 小包料百以上廿四錢
榮華物語は、藤原氏全盛時代の國文の歴史にして文章の明麗麗麗なる、物語文の王と稱せらるる「源氏」をも凌ぐものなり。記事の細密明晰なる、外戚専横の裏面を描出して餘す所なく、國文の歴史に志あるもの、必讀すべき良書なるは多辨を要せず。然れども、未だ完全の註釋書なきは世の以て遺憾とする所也。本書は、好評を得たる「増鏡詳解」の著者佐藤和雨先生が多年刻苦研鑽の効に於て、其註釋の精細、考證の詳博なるは、前書に劣らざる事本院の信じて疑ざる所也。殊に、索引、系圖、年表、及諸國一卷を附する等集れば、國文研究者は勿論國史に志あるものも必ず一本を備ふべき也。

前高等學校教授 小中村義象校
東京女學館講師 國分操子撰

今昔物語讀本

定價廿五錢 郵稅六錢

文學士 鹽井正男著

新古今集詳解

和裝美本 全六冊

一の卷定價金參拾五錢●郵稅四錢
二卷三卷既成○三卷以下印刷中

和歌は、優麗なる我國人が心情の美術品にて、誠に我が文學の花なり。而して新古今集の時代は最も隆盛進歩を極めて、よく幽遠巧妙に、よく優麗風致ありて、實に其蘊奥を盡し其の美妙を極めれば、心あらむ人、必ず此の集を味はざるべからず。されど、未だ親切に解釋せる良書なき故に、人多く其美を味ふを得ず。著者こゝに、新に此の詳解を著し、每首の意義詞遣ひを詳細懇切に解釋せられ、且つ其の妙所々々の評論をも添へられぬ。著者が歌道の名は世の知らるる、所本院の贅言を要せざるべし。

關根正直校 文部省檢定濟
金子元臣撰

徒然草讀本

定價拾八錢 郵稅四錢

徒然草讀本解釋

定價拾五錢 郵稅四錢

文學士 武島又次郎著

新撰詠歌法

和裝全一冊 定價四拾錢 郵稅六錢

世に詠歌を教ふるの書多しと雖も、概れ因循なる和歌者流の手に出づるを以て、其說陳套膚淺にして兒戲又類せる多し。此書は武島文學士が該博なる學識により、わが國古來歌學者の説に交ふるに西洋詩學者の説を以てし、最も斬新なる方法によりて、歌の本質を説き、種類を説き、裝飾を説き、聲調を説き、構想を説き一讀の下、直に詠歌の秘訣を悟らしむ。

文學士 高山林次郎序 堀江秀雄著 再版既成

活少年

袖珍美本 定價貳拾錢 郵稅四錢

要 一、世界の大事 二、日本の國情
三、日本の老人 四、少年の責任
五、家庭に於ける少年 六、社會に於ける少年
七、少年時代の價值 八、立身の基礎
九、獨立の精神 十、將來の活事業

文學士 武島又次郎著

國歌評釋

和裝全五冊 定價四拾錢 郵稅六錢

歌は能く讀むことの難きにあらざして、能く知るこの難き也。上下三千載我國の歌、敏知らずと雖も、皆幽婉にして、含蓄あるを特質とす。其措辭の巧妙にして、命意の深遠なる、之を註し之を説くにあらざれば、到底初學の理解する所にあらず也。評釋の必要は實にこゝに於てか起る。今や武島文學士、精細の筆を以て古來國歌の秀逸なるものを選び之を釋き、之を評し、之を論し、以て其奥旨と光彩とを發揮せられんことをす。

下田歌子題歌 棚橋絢子序
跡見花蹊序 堀江秀雄著

理想の少女

袖珍全一冊 定價貳拾錢 郵稅四錢

要 一、世界の情態 二、日本の女子
三、家庭に於ける女子 四、女子の体貌
五、女子の學藝 六、女子の職業
七、女子の責任 八、女子の交際
九、女徳の基源 十、今後の女子

十六夜日記 定價金八錢 註釋付拾三錢
 竹取物語讀本 定價金八錢 註釋付拾五錢
 土佐日記讀本 定價金八錢 註釋付拾三錢
 方丈記讀本 定價金八錢 註釋付拾三錢

本書は、從來ありふれたるものと異り、廣く異本を参照し、送り假名法、假名遣等を一定し、専ら讀本体に編纂したるものなれば、教科書として最も適當なるは勿論、別に詳細周到なる註釋を附録したる者あれば、自習用として最も便利也。

東西南北 定價廿錢 郵稅四錢
 與謝野鉄幹著 (新体詩集)

天地玄黃 定價廿錢 郵稅四錢
 與謝野鉄幹著 (新体詩集)

保元物語讀本 定價金拾五錢 郵稅金四錢
 平治物語讀本 定價金拾五錢 郵稅金四錢
 太平記讀本 定價金三拾錢 郵稅金六錢
 平家物語讀本 定價金廿五錢 郵稅金四錢
 保元平治物語解釋 定價金拾貳錢 郵稅金貳錢

漢文を用ひずして、漢文の註重をうつし、國文を用ひて、國文の優柔を避け、雄渾流暢二つながら具ふるものは、戰記文なり。而も其記事は悲壯勇烈、歴史上の事蹟なれば、國文の模範となり、歴史を知り、併せて、精神鼓舞の資となるもの也。本院茲に、斯學に精通せらる、今泉先生に請うて、假名遣、送假名等を訂正して、此種の讀本を出版すること、はなしぬ。而して、別冊詳細なる解釋のあるれば、初學者と雖も、一讀解得するに難からざる可し。

神皇正統記讀本 定價三拾錢 郵稅四錢
 島山健校 文部省檢定濟
 金子元臣訂

村山自彊 文部省檢定濟
 中島幹事 合編
 漢文史記列傳抄 全四冊 定價一、二各二十錢 三、四各二十五錢 郵稅各四錢

編者の例言に曰く、從來史記列傳を讀本として出版せしもの多尙あり、其列傳は、史選原本の儘なれば、其思想尙尙あり、其難しきもの前に出で、平易にして讀み易きもの却て後にあり、斯の如く難易前後に顛倒しては、中等教育學習の上につき適當なるもの可からず、よりにて本書は、排列の順序を變更し、所謂易より難に入り、單純より複雑に進む原則に従ひ、中等教育の程度に學問時間の配當に適合せしむることに發せり、是れ本書の他讀本と異なる特色とす、本書は、かかる注意を以て成りたるもの、中等教育漢文讀本として適當なるは、疑なく要せざるべし。

青崖山人國分高胤著
 詩董狐 第一集 定價廿錢 郵稅四錢

伊藤春畝侯題字 宮崎宣政著
 晴瀾焚詩 附錄 定價三拾錢 郵稅四錢

金子元臣 柴山啓一郎 合著
 百人一首評釋 定價廿五錢 郵稅四錢

一々其意義を詳密に解釋したる上、嚴正なる評論を加へしもの、既知と初學者とを問はず必ず一讀の要あるべし。
 黒田侯爵題歌 口繪野中至氏夫妻肖像及富士山 四版
 落合直文著
 たかねの雪 定價廿五錢 郵稅四錢

巖に野中氏が盛夏登山に難しとする富士山絶頂に越冬を企たる不撓の精神は、豈、常人の企て及ぶ所なむや。本書は、之を廣く世に傳へん爲落合先生が得意の才筆を揮うて細叙したるもの、
 落合直文閣 藤井静子編 増補四版
 萩の下の露 定價廿二錢 郵稅四錢

落合先生の門下園秀作家十數名の美文和歌を集めたるものにして、一々先生の嚴密なる校閲を經たれば作文作歌の模範として絶無の好師友なる可し。

14
7

東京府師範簡野道明編 文部省檢定済

高等女子漢文讀本

日本紙刷 全一冊

定價一、二各廿五錢

郵稅各四錢

高等女學校、師範學校女子部、其他全程度の漢文教科書として編纂したるもの、材料、程度、分量等の事は、一に教育上の制定に基づき、讀力を進め、文章を練り、兼て直接優美なる女徳を養はしむるを勉めたる女子讀本として適當なること喋々を要せざる可し。

東京府高等女學校教諭 小島政吉著

女子本邦史要

定價六十錢 郵稅八錢

本書も又、高等女學校、師範學校女子部、其他同程度の歴史教科書として編纂せるもの、綱目は、文部省の豫定せる中學國史細則に則り、特に、女子に所要なる歴史上の事實を選むに意を加へ、又各章の終りに、問題を掲げ、生徒の應用題、并びに、教師教行の要目に供したり。

石川岩吉編

十訓著聞讀本

定價廿五錢 郵稅四錢

服部躬治著

戀愛詩評釋

定價卅五錢 郵稅四錢

この書は、古來試人の戀愛詩六十余篇を選ひて評釋したるもの、詩形は、長歌、短歌、施頭歌、今様俗曲を問はず、作者は、皇族と無名の下司とを論ぜず。上は紀元萬葉より採り、下は淨瑠璃本より抜く悉く之れ古來の秀逸、而して之を論評する頗る嚴正。

國文學

毎月一回十日發行 定價一部三錢 郵稅五錢 二十一日發行

新道家の寄稿、及、江湖諸君の應募文歌を掲ぐ、専ら國文學研究者の好同伴を以て任するもの也。

注 爲替は神田錦町宛 郵券代用は一割増

東京神田區錦町一丁目十番地

發行所 明治書院





14